IS･･･Plays as a bridge

直通特急

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ…Ｐｌａｙｓ　ａｓ　ａ　ｂｒｉｄｇｅ

【Ｎコード】
Ｎ１０３６Ｕ

【作者名】
直通特急

【あらすじ】
運命とは残酷なものである。野球部で野球を楽しんで大学に進学して将来は鉄道の運転士になると言う俺の夢は高校１年生にして早くも、そしてもろくも崩れ去った。俺は今日から男子の全校生徒が消費税以下のＩＳ学園に入学することになる。一番まずいことは俺が女嫌いなことだ…。

1話　Ａｄｄｍｉｓｓｉｏｎ　ｔｏ　…（前書き）

前回の作品からの修正版第１号でございます。前回の作品からお読みのお客様並びに今回からお読みになられますお客様、今後ともよろしくお願い申し上げます。それではどうぞ本文の方をお楽しみ下さい。

1話　Ａｄｍｉｓｓｉｏｎ　ｔｏ　…

俺はいまとある学校の門の前に立っている。何でも俺は世界で２人目の男性のＩＳ操縦者…だそうだ。まだまだ実感なんてわきやしない。

「ぺっ！！」

学校の門に唾を俺は吐いた。悔しかったからだ。そうだ自己紹介をするのを忘れるところであった。俺の名前は聳井亮悳（イシイアキノリ）だ。俺は中学三年間を地元の中学が荒れてて行きたくなかったから…いわゆる中学受験というやつをしてお国の建てた中学即ち国立の中学校に進学したのだ。もともと俺は自慢になってしまって申し訳ないのだが勉強は出来た。それこそ小学三年で微分積分が分かっているくらいだったから。まぁ、俺の入学した年はたまたま女子の方が成績が断然よかった。と言っても勉強だけが出来るやつばかりで人間性は乏しかった。国立中学と言うことだけあって帰国子女だとか言った外国人の同級生とも親しい仲になっていた。男友達の方が意外と仲良くなっていたと俺は思う。さっき女子の人間性が乏しかったと言ったのはここあるのだ。

「チョンなら出来るでしょ？。これぐらい」

「ダメだよ。チョンじゃ出来ないって」

「あっ、そうか！！」

在日の彼等はそうやって女子どもに馬鹿にされていた。でも、試しに話してみればみんな心はかなり澄んでいて非常にいいやつであっ

た。まもなくして俺と知り合った彼等は男友達を作ることが出来た。勿論自分から勇気を出して話したというのもあったが…。

それで中学三年生になると俺の中学の男女抗争は激化の一途をたどった。奇しくもそのころ歴史の時間で俺達は‘東西冷戦’を習っていた真っ最中であったから。男子は同盟を…そう、ソ連が昔、他の共産圏の国と組んでいた経済相互援助会議、ＣＯＭＥＣＯＮのように…。勿論女子も例えるならＮＡＴＯのような強力な同盟を組んで俺達と対立していた。そんな中とんでもない事件が起こってしまったのだ。最後の年の合唱コンクール。まぁ今ではどこの中学でもあるそうで俺の学校にもご多分に漏れずちゃんと毎年１０月に開催されていた。こういうときはみんな同盟を組んでいた俺達男性陣はこぞってサボり、練習に出ても歌わなかった。そんなある日のこと俺はとある女子が泣いた理由を俺の所為にされそうになったのだ。

「しく…しく…」

「アンタが泣かせたんでしょ。聳井謝りなさいよ!!!。」

「こいつが勝手に泣いたのが悪いんだろ?。況してや俺が…俺達が泣かせた理由はなんだって言うんだよ!!。なあ朴(パク)?。」

この朴というのは俺達の友人でさっき言った在日朝鮮人の朴優一(パクゆういち)であった。彼は韓国人の父と日本人の母の間に生まれたもんだからお互いの国の読み方を取った名前になっていたのだ。

「そうだなぁ…う～ん…僕等には関係ないんじゃない?。だって練習ちゃんと出てるし。聳井だけ責められるのもおかしいよ」

「みんなは?」

「俺も賛成だ。登井をお前達いい風にしくんでじゃねーぞ!!」

「俺も同感だよ!!」

「僕も!!」

とうとう終いには女性から僕に平手打ちが飛んでくる始末。男性陣の怒りは一気に上昇した。まさに国王の横暴に激怒した市民革命のようである。

「お前等は何もするな!!、ここは俺が何とかする」

男性陣を静止させると俺は

「俺を殴ったことを後悔させてやるから楽しみにしておけ…」

と女性陣に言うと振り返り

「なぁみんな!!、これで女子(こいつら)がどんな奴らか分かったことだし麻雀とでも行こうか!」

「賛成!!」

との俺とそのほかの男性陣とのかけ声のも俺達は練習を一斉に抜け出して下校していった。その後の合唱コンクールには俺達のクラスからは男子は一人も出ず異例の女子だけでの出場となった。それでも俺達に学校の先生は何も言っては来なかった。匙を投げられたというわけではない、元々この事件は女子の一人が俺に平手打ちをしたからと言う理由で男子が出なかったと先生達が認めてくれて俺達の無罪放免としてくれたからだ。これは他クラスの女子に怯えてい

た男性陣にも大きな影響を与えた。

俺は将来鉄道の運転士になりたかった。これは小さい頃に線路脇に住んでいたからだろう。親父も母さんも学校の先生もなりたいならなれと僕の職業に関しては大賛成であった。成績もあるだろうがこのご時世これだけ自分の将来を考えている人間もそうそう少ないのだろう。俺はだから国立鉄道大学校附属高等鉄道学校を受けることにしたのだ。この学校はつい最近出来た鉄道系の大学校で文部科学省が認めている大学校の一部である。長引く不況のせいでＪＲ各社は軒並み業績が悪化、ＪＲ北海道、ＪＲ四国、ＪＲ九州、ＪＲ貨物の４社同時の経営危機によりさすがの国も動かざる得なくなったようだった。５年前にＪＲは国有化され再び国鉄となったのだ。と言っても監督者が国になっただけで今まで通り北海道部門、東日本部門、東海部門、西日本部門、四国部門、九州部門、貨物部門と各部門ごとに分けられて実質的には昔のＪＲ各社のそれぞれの経営範囲と重なっていた。

その国有化事業の一環で設立されたのがこの国立鉄道大学校だった。国有化を機にＪＲ各社の職員は全員が国家公務員に任命された。勿論鉄道大学校に受かっても国家公務員と同等の扱いを受けられるようになっていた。具体的には鉄道員の育成を目指した学校であり大学院の運転士課程まで進めば無条件で卒業すれば国鉄なり私鉄なりの鉄道会社の運転士になれるのだ。俺にピッタリな学校だと思ってくれた読者の方は非常に素晴らしいことである。付属の高等鉄道学校も偏差値で言うと６９とかなり高かった。だが俺にとってはそんなことはチョロいもんだった。しかも基本的に行くのは男ばかりだからこれで女ともおさらば出来るし…野球部もあるから…。

にもかかわらず運命は過酷なものであった。たまたま入試会場となっていた鉄道学校の教室で小火（ボヤ）騒ぎが起こってしまったのだ。それで急遽代替予定地として選ばれたのがあの共学と言ってるが実質

女子校のＩＳ学園だったのだ。勿論俺も仕方がないから入試に出た。試験も手応えはばっちりで後は吉報を待つばかりと意気揚々にして帰ろうとしたとき、ＩＳが俺に反応してしまったのだ。その所為で俺は強制的にこの国立ＩＳ学園に入学させられたのだ。朴も韓国に帰って行ってしまった。仕事の都合と朴の親父さんのお母さんつまりはお婆さんの調子が悪くなったそうだからだ。

「鉄道の勉強もない、男子も殆どいない、野球部もない…ないない尽くしか…。」

俺はもう一度学校に向かって唾を吐くとそう呟きながら学校の門を踏んだ。周りでは女子の生徒が親と仲良く学校の門の前で写真を撮ったりしている。まぁ何というかどこの学校でもありそうな普通な入学式の光景だ。実を言うと今回は親と俺は別々にこの学校に来ていた。それは中学の時も同じだったから別にどうって言うことではなかった。俺は今朝早くにここに来て…おっと、この学校の所在地は神奈川県の平塚市だ。俺は通勤時間帯の列車に乗りたくなかったので朝５時２０分に東京駅を発車する普通列車静岡行３２１Ｍに乗って平塚駅までやってきた。通勤時間帯を避けたかったのにはこの手荷物にも原因があった。俺は事前に貰ったパンフレットでこの学校にはやたらと空き地というか芝生の平面ないわゆる公園のようなところが多いことに気がついていた。だから、放課後なんかは自由に使えるだろうから野球の硬式用の木製バットと金属バットを持ってきていたのだ。重くはないが周囲の目線がどうしても気になってしまう。

”あれが噂の男性操縦者ね…”

”バット持ってるみたいだけど、野球でもするつもりなのかしら？…”

と言うひそひそ声が聞こえてきた。

”面と向かって言ってくれた方が個人的には楽なんだよなぁ…これだから女子は…”

そんな事を思いながらも学校の中の方へと俺は足を踏み入れていった…。

1話　Ａｄｄｍｉｓｓｉｏｎ　ｔｏ　…（後書き）

いかがでしたでしょうか?。ご意見ご感想、随時お待ちいたしております。

2話　Ｔｅａｃｈｅｒ

入学式もほどほどに俺は教室に向かった。男子は同じクラスの方がいいという学校側の配慮で１年１組に俺も配属された。あいうえお順にも関わらず俺ともう一人の男子学生は前後の席順になることが出来た。

「俺は織斑一夏(おりむらいちか)だ。よろしくな」

「こっちこそ…だな。俺は鹿井亮憙(いしいあきのり)だよ」

ここの学校の先生はとにかく女性の先生しかいない。まぁＩＳを操縦出来るのが今まで女性しかいなかったんだから当然だろう。担任と副担任が女性と言うことは別に俺は気にしない。というか憎んでも男性の先生に変わるというわけではないのだからどうしようもないという訳なのである。入ってきた若そうでいろいろと大きい先生も女の先生だった。

「皆さん、入学おめでとう。私が副担任の山田真耶です」

みんなの無反応さに山田先生はあたふたしているようだ。入学してきて早々、友達もまだいないんだから（自分にはもう出来たが…）先生が何を言おうと緊張して言い返したりなんか出来ないだろう。

”おいおい…国立の先生ってもっとまともなはずだろ…。”

いちいち俺も不満に思いながら話を聞いていた。先生の話だと担任の先生はまだ会議中とのことだそうだ。この学校は全寮制だから寮でもこんな調子だと気が狂いそうである。まぁいちいち面倒なこと

には首を突っ込まないようにすればいいだけのことだ。山田先生の話ではこのクラスの担任である織斑千冬先生はこのＩＳの世界では超有名人とのこと…ん？。俺はあることに気がついて後ろに座っている織斑に話しかけた。

「早速なんだけどさ、織斑」

「ん？。どうかしたのか…えっと」

「登井でいいよ、まぁ亮悳でもいいけど。そんな事はいいとして、お前の織斑だけど、織斑先生と何か関係あんのんか？」

「あぁ、千冬姉は俺の姉なんだ」

「千冬姉？」

とその時織斑自身は気がついていなかったようだが後ろからその織斑先生本人と思われる女性の人がスーツ姿で黒板の方、つまり俺達の席の方に向かってきた。そしていきなり織斑の頭をげんこつした。

「大丈夫か？」

俺にはとってもいたそうに見えた。ざっと時速９０キロ前後のちゃんと計算された強さと思われるげんこつだ。

「痛っつ～。ち、千冬姉いきなり…」

またもや織斑先生は織斑に向かってげんこつをした。今度も計算されてはいるが少々荒っぽいげんこつだった。

「イタタタ…」

「学校では‘織斑先生’だろ？」

”おぃおぃ、暴力かよ、この先生。まぁ織斑も十分に悪い姉貴を持ったもんだなぁ…”

そんな事を思っているといたがる織斑の脇を後にして織斑先生は黒板の方に向かった。

「もう会議は？」

「あぁ、早めに終わったんだ。山田先生、どうもありがとう」

「あっ、いえ。そんなことは…。それでは担任の織斑千冬先生です」

「今山田先生から紹介もあったように私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。これからお前達はびしびし鍛えていくからそのつもりでいろ。特に今年は世界初の男性操縦者が2人も入学したと言うこともある。私は男女で区別をしたりするつもりは更々ない。みんなで協力して頑張って過ごすように！」

この先生は確かに脅威に俺も感じる。脅威というか威圧感が相当あるのだ。

「織斑先生、まだ石井君と織斑君の自己紹介がまだです」

その時、山田先生のナイスフォローだ。これは見事、野球で言うところの外野に抜けそうな強い当たりをダイビングキャッチするようなものだ。

「そうか…それじゃあ名前順で甕井。先に頼む」

”やれやれ…まぁ名前にまで腹を立てている場合じゃないか”

「東京都から来ました。甕井亮恵です。特技も趣味もこれと言ってありませんがよろしくお願いします…」

俺は入学早々嘘をついた。

”野球と鉄道が好きで女嫌いですなんて言えないしね…まぁ、こうでも言っておけば多分みんなも俺の事は特によくは思わないだろうし、いわゆる計算通りってやつだな”

俺は心の中でドヤ顔をしながら席に着くと次に織斑が立ち上がった。こいつの方が緊張していた。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言い終わった途端に歓声が沸き上がった。確かに俺と織斑を比べたら、ルックス、第一印象、性格のどれを抜いても俺の負けだ。まぁそれはそれでいいんだけどね。気がつくと思った以上に時間が進んでいたようだ。もうすぐ昼時というところにさしかかっていた。

「さてと、それじゃあきりがいいから先に食事にしよう。次の次の鐘（チャイム）までが休み時間だ。自由に過ごすように！」

そう言うと織斑先生と山田先生は号令の元俺達のいる教室から去っていった。すると早速織斑の前には女子の人だかりが出来た。

「ねぇ、ねぇ織斑君」

「一緒にお昼ご飯食べよう！」

「えぇ～、私も誘ってる～」

「お、おいおい」

あたふたしている織斑に

「話し中悪いけど。俺は昼いらないから好きにしておいてや」

と織斑に言うと更衣室に向かうべく教室を出ようとした。

「大丈夫なのか？。具合でも悪いのか？」

織斑は心配の意を込めて俺にそう訊いてきてくれる。これは嬉しい限りだ。

「いや、そんな事はないけど…何となくだね」

「何となくって…」

「いいわよ。甕井君がお腹減ってないって言ってるんだからさ」

「そうそう。そういうことで織斑君行こう！」

「えっ。そ、それじゃあ又後でな甕井。どこにいるんだ？」

「多分更衣室かな？ちょっとやりたいことがあってさ」

「わかった！。後で行けたら行くよ」

「オーライ！」

俺は織斑達とは反対方向に向かった。すれ違う度に女子からは変な目をされたが特に気にすることなんて無かった…。

3話　Dormitory

入学の日で、そして入寮の日でもあるからもしかしたらだいぶ精神的にも疲れていたのかもしれない。実はここに来るまでも結構苦労してやってきたのだ…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

午後の授業も一通り終わる。と言うことはこれから早速入寮な訳だ。もう入寮式でも呼べばいいのか分からないが入学式の時にそんなようなやつを同時に行っていたのですぐに入寮出来るようだ。

「さてと、俺はお先に」

「おい！、待てよ甃井一緒にかえろ…」

「織斑く～ん！」

「一緒に帰ろ～」

俺が織斑を誘わなかった理由が読者の皆様にもおわかりいただけるだろう。

「お前は別に帰った方が良さそうだな」

「そうだな、悪いな…」

「気にするなって、又後でな」

「あぁ」

もう織斑とはすっかり仲良くなった。実は昼休みに更衣室に行っていたのは大きさを確かめたかったからなのだ。部活では出来なくても個人的な素振りだとか壁当てぐらいの野球の練習なら出来る。もう野球は諦めた方がいいのかもしれないが楽しみでやっているんだからそういうわけにもいかない。それではどうして更衣室と野球の関係がどうなっているかというと、ここの男子更衣室は男女共通の設計となっているため大きい。しかも床は絨毯（カーペット）だから裸足で素振りをしても足から出血だとか言ったことは多分ないだろうから練習にはもってこいの場所なのだ。まぁ素振りだったら木製の方がいいだろう。何てことを思っていると織斑がパンを買ってきてくれていたのだ。お礼にと言うわけではないが俺がどうして女嫌いなのかは説明した。

「…なるほどな、確かにそれならお前も嫌にはなるだろうな」

「わかってくれるか？」

「あぁ、そんなやつは女として以前に人間として最悪だな」

「おぉ！。ありがとうな、そういう風に言ってくれるやつを待っていたんだ。これからもよろしくな織斑！！」

「おう！」

握手を交わして俺達は意気投合することが出来た。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とまぁ言う感じで今に至るわけだ。帰り道はなるべく遠回りをしてきた。女子に会いたくないというのもあったが学校のまだ行っていない場所を回ってみようと思ったのだ。ただ…

「いいトレーニングにはなったけど、腰痛ぇ〜」

実はバットケースをそのまま持ち歩いていたからかなり鍛えられてしまった。どうも俺は腰が弱いようだ。俺の好きな野球選手がオリックスの李承燁(イスンヨプ)?選手で、李承?選手のフォームに俺は憧れた。李選手のフォームはいわゆる一本足打法で一番会得が難しいフォームとも言われているくらいだ。俺も案の定、フォームをものにすることは一応出来たものの腰に相当な負担と軽い後遺症のようなものが残ってしまったようなのだ。だからこういうときはひとまず横になって腰を伸ばしてストレッチをするのだがこれがまたとっても痛いのだ。

「イタタタタ…」

「失礼します」

「はい?」

俺はベッドから起き上がると振り返った。するといたのは山田先生だった。

「今晩は甕井君。今は時間は?」

「えぇ、一応」

「そう、ならよかったわ。実はね、甕井君にはしばらくこの部屋を

一人で使っていいことになりました。他の国や地域からの転校生が来るまでは」

俺は嬉しかった。この学校の寮、ヘタなホテルよりも便利なのだ。
俺は嬉しさと興奮を抑えつつ

「わかりました。どうもありがとうございます」

とお礼をした。先生はそれだけを伝えに来ただけなんだからすぐ戻ったわけで、

「よっしゃぁあ！」

と俺は叫びながらベッドにダイブした。これはもしかしたら神様がくれた、お情けなのかもしれない。

「お～い、聳井」

「おぅ織斑、どうかしたのか？」

「晩飯行かないか？」

「分かった！」

俺と織斑はすぐに食堂に向かった…。

4話　The worst meeting

ここの食堂の食事はとっても旨い。普通の料理屋と肩を並べるほどの腕と言っても過言ではない。そして男性は珍しいのだろうか結構大盛りとかもおまけしてくれるからとっても便利だ。

「ここの食事はうまいなぁ」

「あぁ。とりあえず、しばらくはここのご厄介になりそうだなぁ。ま、酒がないのがなぁ…」

「おい聳井。あんまりそう言うことは言わない方がいいぞ。ほら」

「そうだったそうだった。悪い悪い織斑」

織斑の指さした方向にはジャージ姿の織斑先生の姿があった。一年の寮長らしい。織斑曰く、最近先生が帰ってこなかったのはこういう理由があったからだろうとのことだ。その織斑先生が近くにいるからだろうか、パパラッチ顔負けの織斑ファンの女子達もこちらには近寄ってこない。おかげで悠々と晩ご飯を楽しむことが出来るのだ。

「聳井、一夏」

なんだか俺達はいやな予感がしたが一応

「「はい！」」

と答えた。すると織斑先生は突然、俺達の食べている席の隣に座っ

た。

「ここの生活はお前達にとってはきついかもしれないが頑張ってくれ。なるべく精神的な負担をかけないように甕井には個室での生活を、一夏には幼なじみとの同室を私は認めさせているんだ。これからも何かあったらどんな些細なことでも相談に乗るぞ」

と快く俺達の不満などを聞いてくれることを約束してくれた。俺は一応礼を言っておいたが、使うつもりはなかった。先生に申し訳ないというのもあるし俺が女嫌いというのもあった。俺は中学の時女の先生にも裏切られたことがあるから正直なところ今はまだ学校が始まったというか今日が初対面なので層すぐに悩みを打ち明けることは難しい。だけど

「よかったな甕井」

「あぁ。でも俺が女嫌いなのは知ってるだろう?」

「大丈夫だ。千冬姉は少なくともそんな事をする人間じゃないよ」

”確かに織斑が言ってくれているんだったら考えてもいいかなぁ?”

どうやら織斑の言い方からしてこれは問題なさそうな感じである。まぁ様子見というところだろう。空気を読まないのか何だか変な生き物の着ぐるみを被った女子が俺達の座ってるところにやってきた。どうやら後ろからはその人の連れと思われる人達もやってきているようだった。

「ねぇねぇおりむおりむ~。一緒に晩ご飯食べよう?」

「え、でも俺は聳井と…」

”こういうときは俺が空気を読めばいいのさ織斑、大丈夫だこういうことには慣れてるから…”

俺は心の中でそう思いながら重い口を開いた。

「ぁぁ、それじゃあ織斑…先に戻ってるぞ。ゆっくりしていけ、俺はもう疲れたからさ」

「あっ、あぁ…わかった。それじゃあな聳井」

「ネー」

と韓国語で冗談ぽくっ‘はぁい！’と返すと、俺は部屋に戻るべくその場から離れていった。その後はどうやら俺の事をその3人は聞いていたようだが詳しいことは俺も聞かなかった。

眠気が酷くなってきた。これは急いでシャワーを浴びて寝た方が良さそうだ。若干足下もふらついているように見えてしまう。まぁ朝東京を4時過ぎに出て5時の普通電車でここに来ているんだから少しぐらい眠くなってもおかしくないだろう。

「ぅ〜ん…」

眠そうに呟きながら俺は部屋の方へ向かって行った。すると前の方から金髪の…いわゆる白人という言い方は失礼だが外人の女性が目に入った。ここでは寮の中でも制服でいることが圧倒的に多いからここの生徒であることは分かった。と言うか俺と多分同じクラスの人だ、相手は俺の顔を見てムッとしながらも面識があるような顔を

していた。俺が何も言わずに通り過ぎるとその人は突然こちらに向かって

「ちょっと！」

と言葉をはなった。勘弁してくれよ、眠いのに…。

「何ですか？」

「クラスメートの私（わたくし）に挨拶もしないのですか？」

「いや、他のクラスメート…あっ、いや織斑以外にはあなたと同じように振る舞っていますけど」

「そういうのはよろしくないのではないのですか？。況してやこの私には特に」

「ったく、いちいち腹の立つ人だな」

俺はつい眠たかったからと言うのもあるが怒ったように言い返してしまった。こんな事じゃあ普段は怒らないのに、きっと睡眠もカルシウムも不足しているのだろう。

「なっ、何ですって！！」

一番嫌な展開に発展してしまった。これはとっても厄介だ。

「腹の立つとはどういうことなのですか！！」

「いちいち、そうやって突っ込んでくるところかな？」

「むぅぅぅぅ、代表候補生の私にたてつくとはいい度胸ですわ。覚えておきなさい！」

そう言うと俺の前から立ち去ろうとした。

「俺の名前は…聳井明悳ですけどあなたは？」

「セシリア・オルコットですわ！。以後お見知りおきを、ふん！」

そういうと今度は本当に怒りながらどこかに行ってしまった。

”やれやれ、ああいうのが本当に困るんだよ…あぁ、眠いんだった。これは深刻だぞ、早く部屋に帰らないと…”

俺は今にも倒れそうなほど睡魔に襲われていることに気がつき急いで部屋に戻った…。

5話　朝練

気がついたら朝の6時過ぎだった。晩ご飯を食べたのが大体7時過ぎで8時ぐらいにはもう寝たような記憶がある。結局のところ10時間近く爆睡していたようだ。ベッドは結構しわくちゃになっていた。髪型はと言うと俺はスポーツ刈りだからあんまりどうって事はなかった。

”いやぁよく寝たなぁ…”

そんな事を思いながら朝日を俺はベランダに出て見つめていた。

「素振り行くか！」

俺は顔を洗い歯を磨くと外の例の芝生の当たりに向かった。さすがに朝早いだけあってまだ誰もいない。ただただ波の音と潮風が体に来るだけだ。朝日がまるでカクテル光線のように眩しい。まさに打席に丁度今立った野球選手のような気分である。

「さてと」

俺は素振りを始めた。李承?選手に憧れたのには意外にもそう古いことではない。李選手が来日したのは２００４年のこと。千葉ロッテマリーンズに入団した訳だがその頃はまだ韓国野球にすら俺は興味がなかった。ただただ東京都民であったからという理由で巨人を応援していたどこにでもいる野球ファンだった。そんな俺を変えたのは２００６年即(すなわ)ち今から5年前だ。その日俺は巨人対ヤクルトの試合を神宮球場で観戦していた。この年は丁度李選手が巨人に入団した年でもあった。確か6回ぐらいだったと思う…

「４番、一塁手（ファースト）、李承燁（イスンヨプ）？」

とウグイス嬢のコールと共に李選手は打席に立った。初球をフルスイングした打球は神宮球場のバックスクリーンへと舞い込んだ。この一球に俺は魅せられた訳だ。それ以降、李選手を尊敬するようになりバッティングフォームまでも李選手と同じ一本足打法に近い形に変えた。それに連携するかのようにして韓国の野球にも興味を持ち始めたわけだ。そして韓国の野球チームのＬＧツインズに在籍している朴龍澤（パクヨンテク）選手という人を尊敬するようになった。この朴選手というのは日本で言うところの張勲（チャンフン）、張本選手のような選手だ。一昨年には・３７２で首位打者にもなっている。おっと、長々と語っていたら向こうの方から誰かがやってきた。見たところ織斑と織斑先生のようだ。

「早速やってるな！」

「まぁな…おはようございます、織斑先生」

「おはよう。朝から元気そうだな」

「鍛えておかないと打てなくなりますから」

「感心だ。安全に気をつけてくれればお前の練習に私はとやかく言うつもりはないからそのつもりでいろ」

”この先生なら大丈夫そうだな…”

俺はまだ心の中に疑念をわずかに残しながらもこの先生を信用することにした。

「わかりました！、ありがとうございます」

俺は先生の計らいに嬉しかった。

「ところでだが…」

いきなり先生は俺に何かを話そうとした。

「何でしょうか？」

「お前が構わないのなら一夏にも野球を教えてやってくれないか？」

「俺がですか？」

「あぁ。お前しか男子がいないというのもあるし、野球を出来て損はしないだろう。というわけで早速今から教えてくれないか？」

”なるほど、通りで織斑がジャージ姿な訳だ”

俺は改めて納得した。

「わかりました。いいですよ、織斑。始めるか？」

「おぅ！！」

俺達がキャッチボールを始めると織斑先生も

「食事には間に合わせるように！」

と言い残し、満足げにその場を離れていった。

「もう少し手を上から出した方がいいぞ」

「こうか？」

「そうそう、さっきより投げやすくないか？」

「ホントだ。サンキュー！」

「まぁいいって」

すると織斑は、おかしな事に気がついたようだ。

「甕井、お前って左利きなのか？」

そう。俺は左投げ両打ちなのだ。元々は右打ちだったのだが、中学時代に野球部の部員から

”左投げなんだったら、左打ちになった方がいい”

と強く勧められてそれ以降、両打席で打てるようになったのだ。

「そうなんだよ。俺は左投げなんだ」

「へ～、でも昨日は鉛筆を右手で持ってただろ、それに箸も」

「あぁ、それは親が右利きだと思って俺を躾けた名残さ。今は箸ぐらいなら左でも持てるようになったよ」

「そうか。おっとっと」

そう言いながら織斑はボールをグラブからぽとっと落とした。初心者の割には剣道を習っていたというだけあって筋はいい。

「さてと、次はバットを振ってみろよ。見てあげるよ」

「おぅ！、助かるぜ」

そういうと俺は織斑にバットを差し出した。素振りの時は俺は木製陽のトレーニングバットを使っているのだが…

「おっ、重いなこれ…」

案の定の結果に至った。このバットは１０００グラムと初心者には相当重いバットだと思う。

「と言うと思ったからはいこれ」

そう言いながら俺は金属バットを差し出したこのバットも９００グラムはあるから重いだろうが、１０００グラムを持った後だから軽かったようだ。

「もう少し体を後ろに残して！。そうそう」

見事な素振りだと思う。これは俺よりうまいかもしれない…。

「ふぅ、今度は甕井の番だぞ」

「へっ？」

「見せてくれよ。お前の素振り」

俺は少し緊張した。人に素振りを見せるのは中学校以来だ。

「わかった」

俺は早速、いつも通りベルトをクイっと動かすことから始めた。何から何まで李承?選手にそっくりだ。

”ブン!、ブン!”

「おぉ〜」

李承?選手の打法を会得してから早5年、もうすっかりこのフォームにも慣れた。そりゃあ、証5からやっていたら当然か。

「凄かったよ。甕井は一本足になってスイングするんだな」

「まあね。俺の好きな選手がそう言うフォームだから、真似したんだ」

「へぇ〜」

何てことをしていたら…

「大変だ!、おい、急いでシャワー浴びて食べに行こうぜ」

「おっ、おぅ!!」

俺達は急いで寮の方に向かって行った。実はこの時、織斑の野球の練習見たさにたくさんの傍観者（ギャラリー）が草むらの中にいたのだ。その中にはあのセシリアさんの姿もあったようだ。そして

”全く、日本の男性はあんな泥臭いスポーツを朝からやっているのですわね。でも、私のいたイギリスのクリケットに似ていてどこか懐かしかったですわ”

なんて事を思っていたようだ…。

6話　ケンカ（前書き）

作者の大好きな李承?選手がシーズン2号ホームランをナゴヤドームで放ちました。今後の活躍を心から期待しております。

6話　ケンカ

学校に向かうと朝一から俺は面倒なことになった。昨日とても、とても（大事なことなので2回ほど言わせていただきました）軽い口げんかをセシリアさんとしたわけだが、同じクラスな訳なので俺が教室に入り自分の席に着くと早速彼女は俺の席の前にやってきたのだ。俺はと言うと鞄から教科書を取り出していた。それも無言のまま俺の席の前で突っ立っているのだ。因みに言っておくと俺は出席番号がクラスで1番だから一番前の席な訳で俺の前には黒板があるのだ。

「おはようございます、聳井さん」

沈黙を打ち破るかのようにセシリアさんは俺に向かって言った。周りは俺とセシリアさんのやりとりを見守るかのように黙っている。

「おはようございます。セシリアさん」

「…」

「…」

その後は再び沈黙に戻る。さすがに俺もからかいたくなったから

「お客様はどちらまで参りますか？」

と言ってみた。案の定

「はっ！？」

とセシリアさんは言い返してきたので

「本日ののぞみの指定席は最終まで満席です、自由で行きますか？。それともひかりで行きますか？」

とみどりの窓口の係員になりきってみた。わなわなと怒りをあらわにしながらセシリアさんは俺に言った。

「私を、私を？」

「私をなんですか？」

「嘗めているのですか？」

「笑わせるなよ。当たり前だろ？」

「んな！！」

するとセシリアさんは俺の机をバンと叩いた。

「いい加減にして下さいまし！！。あなたは私を誰だと思っているのですか？。こう見えても私はイギリスの代表候補生なのですわよ！」

「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国のことか？」

「えぇ。幾ら日本の男性は知識が乏しとは言えども、それぐらいのことはご存知のようですね」

「まぁ、北アイルランドをいつまで経っても自分たちのものって思っている、国ですけどねイギリスって」

俺も負けじと反論する。イギリスは正式名称の通りでグレートブリテン島と北アイルランドで構成されている王国な訳だがこの北アイルランドのすぐ近くにはアイルランドがある。大体想像がつくであろうがここは昔からアイルランドが独立を願っている土地なのだ。だから１９７０年代にはＩＲＡ（アイルランド共和軍）による活発なテロや紛争が起こっていた土地でもある。いわゆるヨーロッパ諸国で言うところの民族主義で対立した旧ユーゴスラビアのようなものだ。セシリアさんはイギリス人だから俺の放ったこの一言には耐えきれなかったようだ。

「決闘ですわ！！。織斑一夏、聳井亮悳、代表候補生の名にかけてあなたたちを纏めて相手してあげましょう」

「えっ、なんで俺も？」

とばっちりを受けた織斑は困惑している。

「あなたたち、今朝早く仲良く二人で野球とか言うスポーツの練習をしていましたわよね」

「ま、まぁ」

「そして、あなたは入試の時に教官を倒したと」

この学校の入試では一般の筆記試験の他にＩＳを実際に操縦して行う格闘訓練があるのだ。それは男女関係なく行われた。勿論俺も受けた。俺も実を言うと教官を倒しているのだがそのことをセシリア

さんは知らないようだ。

「一応な…」

「許せませんわ。まぁ私は入学試験では首席でしたが…」

「はははははは」

「なっ、聳井さん。何がおかしいんですか？」

「たかだかこの学校の入学試験で首席を取ったからってねぇ…。入試は入試に過ぎないのさ」

「むぅぅぅぅ。聳井亮恵、あなたは必ず倒して見せますわ」

「ほぅ、負けないようにこちらも頑張らせていただきます」

「の、臨むところですわ！！！」

そんなふうに口げんかをしていたら鐘（チャイム）が鳴った。これから1時間目のホームルームの時間だ。この学校は朝一からホームルームを行う珍しい学校なのだ。

「静かにホームルームを始めるぞ。今日は早速で悪いのだが席替えをする！」

織斑先生は俺達にそう言った。先が思いやられそうだ…。

7話　math

織斑先生に逆らうのはリスクがあまりにもありすぎる、だからといって席替えをしてまた織斑が自分の前後左右の席に来る確率も相当低い。本当は席替えなんてしたくなかった寄りにも寄って、セシリアさんとさっき口げんかをしたばっかりなんだから…。

「さっきも言ったがこれより席替えを始める。クラスの輪を広げるための一つのやり方だと思ってくれ。鴛井と織斑には申し訳ないが、確率的に再会出来るチャンスはないわけではない」

”その確立がとてつもなく低いって事は考えないのですね…”

「はぁ」

俺はため息をした。それが何を意味するか、織斑にも分かっていただろう志保科の女子全員にも分かっていただろう。別に同情して貰うつもりは殊更(ことさら)ない。これも運命だと思って諦めるしかないのだろう。

「それじゃあ、始めるぞ。オーソドックスにくじで決めて貰う」

どこにでもある普通の席替えだ。

”３６番か…こりゃあ運がいいなぁ。”

３６という番号は俺にとっては非常に嬉しい数字なのだ。と言うのも李承?選手の韓国時代の背番号だからである。急いで黒板に書かれた席と番号の一覧を見る。まさに指定席車で自分の座席を確かめ

るようなものだ。

「ここか…」

俺は鞄を置いて席に座った。これもまるで朝一の新幹線に乗り込むようなものだ。ここでいつもならお茶を一杯飲んでほっと一息するところなのだが今日はそういうわけにもいかない。何てったってここは学校なんだから…。因みに言っておくと今回の自分の席は窓際の一番後ろだ。なんだか席の割り振りがめちゃくちゃで自分の前の席は番号が17番だったりする。隣の席は一応35番になっているようだ。

「俺は35番か」

”35!?”

俺は織斑の声に驚いた。

「おぉ!。また一緒だな!!」

「よかったよ〜、俺勉強苦手だから聳井に訊こうと思ってたんだ」

「構わん構わん、じゃんじゃん聞いてくれよ。こう見えても勉強は自信あるんだ」

「おっ!、これは期待出来そうだぞ」

なんてつかの間の安心も終わりを告げる。隣に織斑が来たと言うことは少なくとも前は女子が来るというわけだ。それはそれで憂鬱だ。

「はぁ～」

「ため息なんかしてどうしたんだ？」

「まぁ後で詳しいことは話すけどさ、俺女嫌いなんだよ」

「あぁ、なるほどな…」

「だから静かな人とかだったらいいんだけどさ…」

「やった～、おりむ～と甕井君の前だ～」

さすがにこればっかりは違ったようだ。この人、織斑から聞いた話だと布仏本音（のほとけほんね）さんと言うようでお姉さんが3年生でここにいるんだとか、とにかく‘のほほん’としているのが特徴であろう。まぁ俺の中では許容範囲だ。5回されないように言っておくと、許容範囲というのは別に何も俺が行動を起こさなければ何もしてこない。だから俺が黙ってさえいれば相手も話しかけてこないという、俺にとっては理想的な人だ。

「よろしくお願いします」

「こっちもよろしくな！」

俺は敬語、織斑はタメ口とこの時点で温度差がはっきりと分かってもらえただろうと思う。俺は基本的には異性に対しては敬語だ。そういう風に躾けられたというのもあるし、自分から徹底して行っているからと言うこともある。

「さてと、全員着席が済んだようだな。それじゃあこれから暫くの

間はこの席で頑張ってくれ！。と言うわけで次の時間は数学だ。山田先生が担当なされるから失礼の無いようにな！」

この山田先生、ＩＳの専科と数学科を掛け持ちで行っているようだ。野球で言うところの内外野どっちも守れる選手と言ったところだ。ところでセシリアさんはと言うと、少し離れたところに座っていてさっきのことはどこ吹く風といった具合に周りの女子となにやら話をしていた。

鐘が鳴って早速数学の授業は始まった。前にも俺は言っているが、俺は小学三年で微分積分を理解していた。自慢のようになってしまって本当に申し訳ない。だから、ここでやってる数学なんて他の人には悪いけど俺にとっては

”お遊びだな”

としか思えないのだ。最初は整式の計算と高等学校の数学課程なら極めて普通なところから始まる。

「…このｘが今回は共通因数として括り出せるわけで…」

「ふわぁ」

俺にとってはあくびをするぐらい余裕で退屈だった。そんな態度を取っているんだから、山田先生が気がつかないわけがない。

「聳井君、大丈夫ですか？」

「あぁ、すいませんでした。気をつけます」

「はい。それじゃあ次のページを開いて下さい。最初、ここには問題が載っていますから誰かに早速誰かに解いて貰いましょうか。それじゃあ、えっと…2問ありますから聳井君と織斑君に解いて貰いましょう。二人とも」

「「はい」」

「前で解いて下さい（ニコッ）」

山田先生は笑顔で俺達にそう言った。織斑は自信があまりなさそうだったが、俺にとっては楽もいいところだった。

｛問、次の各式を因数分解しなさい

（1）
a＋b＋ab＋1

（2）
2a－3b－3ab－2

｝

俺はどっちでもよかったが、不安な顔をしている織斑に（1）を解かせてあげることにした。

「織斑はどっちがいいんだ？」

「（1）でいいか？」

「そう言うと思ったよ。いいよ」

「サンキューな」

この二つの問題はどちらもａについて考えればいいわけで

（１）なら

ａ＋ｂ＋ａｂ＋１　＝　ａ＋ａｂ＋ｂ＋１　＝　ａ（１＋ｂ）＋ｂ＋１　＝　ａ（ｂ＋１）＋ｂ＋１

となってこれを因数分解するんだから

＝　（ａ＋１）（ｂ＋１）

となるわけだ。（２）も同様に

２ａ－３ｂ－３ａｂ＋２　＝　２（ａ＋１）－（３ａｂ＋３ｂ）

＝　２（ａ＋１）－３ｂ（ａ＋１）

となって

＝　（ａ＋１）（２－３ｂ）

となるわけである。まぁ負を外に出して

＝　－（ａ＋１）（３ｂ－２）

としてもいいんだけど、面倒だからここまででいいだろう。

「ハイッ。二人ともよくできていますね！！」

山田先生も大満足のようだ。

「助かったぞ」

「まぁいいっていいって」

「二人とも凄いねぇ」

「みんな聳井のおかげだよ、なっ？」

いきなり話を振られたが

「あっ、まぁそんなところ…かな？」

数学の授業はもうすぐ終わりそうなところまで気がついたときにはなっていた…。

8話　Let it be.

ところで、この場をお借りして誤解されないように言っておこう。俺は一応純血の日本人で偶々（たまたま）好きになった野球選手が韓国人だったのだ。因みに言っておくとちゃんと日本国内でも好きな野球選手はいるし好きな野球チームもある。そのチームというのは今はなき、‘大阪近鉄バファローズ’と‘横浜大洋ホエールズ’だ。近鉄は何より見ていて面白かった。ラルフ・ブライアント、タフィ・ローズ、中村紀洋（なかむらのりひろ）、鈴木貴久（すずきたかひさ）だとか言ったパワーヒッターの驚異的な打線に加えて、野茂英雄（のもひでお）や阿波野秀幸（あわのひでゆき）と言った絶対的エースがマッチすると見ていて最高の野球であった。一方で横浜大洋と言えば、万年Bクラスで‘横浜大洋銀行’等と馬鹿にされていたものの、スーパーカートリオの高木豊（たかぎゆたか）、加藤博一（かとうひろかず）、屋敷要（やしきかなめ）、そしてエースで自分が投球フォームを真似している（勿論おふざけではあるが）佐藤政夫（さとうまさお）投手は見ていて興味深かったし、何より俺は大洋のユニホームがとっても綺麗に見えた。近鉄の赤に対し、大洋は青色ととっても新鮮だった。

「何読んでるんだ？」

俺はそんな事を思いながら大学野球の本を読んでいた。

「野球の本だよ」

「お前は本当に好きなんだな」

「まぁね、鉄道も負けないくらい好きだけどさ。鉄道学校受けたぐらいだし」

織斑も鉄道学校のことは知っていたようだ。どれぐらいの実力が必要かと言うことは特に。

「えっ！、お前あそこ受けたのか？」

「うん。まぁ受かったと思ったんだけどさ。ＩＳがお前と同じで反応しちゃってさ…パァになったって訳」

「へ～」

次の時間は体育だそうでグランドに集合しなくてはならないのだが、まだ時間に余裕があったから更衣室でそんな事をしていたのだ。この後俺は、今朝どうして織斑に野球の練習を教えるように織斑先生から言われたのか納得することが出来るとは思いもしなかった。

「今日はソフトボールをやって貰う！。団体競技をみんなで行うことでクラスの親睦を深めることと、チームプレイの難しさを体感して貰いたい」

集合するや否や俺達はグランドに連れて行かれてそう言われた。中学までなら体育は男女別々に行っていたからソフトボールと言われたら大喜びしていたのだが、ここでは男子は二人しかいないししかも

「聲井と織斑は各チームの均整化のために別々になって貰う」

と織斑先生からだめ押しの一言。俺は心から絶望した。

「はぁ～」

「聲井君、よろしくね」

「あぁ、布仏さん。みんなでチームは決めて下さい。俺はそれに従いますから…」

さすがに空気を読んでくれたようでセシリアさんとは別のチームのようだ。まぁあっちはあっちで織斑がいるから居心地は悪そうだが。

「ちょっといいか？」

後ろから突然誰かに話しかけられた。振り向くと底には和服…いや武道が似合いそうな日本的な女子の姿があった。

「あなたは？」

「篠ノ之箒だ。一夏とは幼なじみでな」

「あぁ、なるほど…」

「今後ともよろしくな」

「え、えぇ、こちらこそ…」

「？」

俺が女嫌いというのは誰も知らないから俺のこう言った態度は不自然に思われるのだろう。普通の男子ならこういうときはよろしくと気軽に言い返せるのかもしれないが、女嫌いな俺にはいちいち腹が立ってしまうのだ。だから気がつかないうちに言い方がよそよそしくなってしまう。

「それじゃあ甃井君はあの辺を守って」

「了解です…右翼手（ウイクス）か」

ウイクスというのは韓国語でライトを意味するのだ。因みにセンターは中堅手（チュンギョンス）、レフトは左翼手（チャイクス）と言う。

「それじゃあ試合開始だ！」

織斑先生はホームベース脇のベンチに腰掛けながら俺達の姿を黙って観ている。何か考えでもあるのだろうか？。

「甃井く～ん、行ったよ～！！」

女子の声が聞こえてきた。

”さすがＩＳ学園に来る子だ。案外に力はあるんだな”

俺は少し前で守っていたがどうやらその心配も不必要のようだった。

「いやぁ、お前はいい当たり打つよなぁ」

「お前だってあと少しだったよ。もう少しってところかな、織斑は筋がいいからすぐに上達すると思うぞ」

「そいつぁ、嬉しいや。ありがとうな」

今日の試合、俺は５打数５安打２本塁打４打点、織斑は５打数５安打２打点だった。結局のところ試合は俺のいたチームが勝ったが、そんな事よりも俺は織斑と野球を別々のチームとは言えども楽しめ

たことが嬉しかった。

「そういえばさ」

「ん？」

その時、いきなり織斑は俺に向かってそう話を振った。

「明日は決闘だろ？。大丈夫か？」

「織斑は？」

「俺もついつい手加減はいらないとか言っちゃったから頑張らないといけないな」

「大丈夫だって‘Ｑｕｅ　ｓｅｒａ　ｓｅｒａ’さ」

「ケセラセラ？」

「スペイン語で”なるようになるさ”って意味なんだ」

そう言い返すと織斑も安心したように

「それもそうだな、明日もお互いに頑張ろうぜ！」

と力強く俺に言い返してきてくれた。

「おぅ、勿論よ！」

俺と織斑は固い握手で明日の健闘を共に祈った…。

9話　Ramapant　sexism

その夜、俺は織斑を自分の部屋に招き入れた。

「この選手は誰なんだ?。見たところハングル語が看板に書いてあるから韓国の選手か?」

「そっ、俺の大好きな選手なんだ」

「ふ~ん、で、なんの用なんだ?」

「まぁ座ってくれや」

「お、おぅ」

俺は織斑を椅子に座らせると、お茶を出した。

「悪いな」

「まぁまぁ…それで話があってさ」

「話?」

「明日のことなんだけども…その、意外にも結構な情報がネットに載っててさ」

「へ~、でもＩＳって結構な秘密を持ってるんじゃないのか?」

「そうじゃなくて、セシリアさんのことだよ。彼女の戦法だとか出

身だとかが書かれてたんだよ」

俺はそのサイトを見せた。まぁどことは言わないが、とある回線を使えばそのサイトに辿り着くことが偶然にも出来たのだ。

「う～ん。俺、英語苦手なんだよなぁ」

「えっとな…イギリスの名門貴族出身、早い内に両親を事故で亡くす。努力の末に現在の地位を勝ち取る。当時の男尊女卑の考え方に反して婿養子であった父親の立場の弱さから来る卑屈さに憤慨の念を抱く。専用のＩＳは‘ブルー・ティアーズ’、性能は十分との報告を受けているが試験的要素が濃いこのＩＳにはまだ不慣れのようであり成績は芳しくない…てな感じな事が書かれてるね」

「もぅ読み終わったのか？」

「えっ？。まぁ大体はさ…そこでさ俺考えたんだけど」

「うん…」

それから３０分ほど俺達は明日どうやって戦っていくかを議論した。相手からの条件に全てこちらが従うと約束しているからどんな風に戦うかも分からない。二人一気に纏めて相手してくれるのか、それとも別々に一対一で対決するのか。ハンデは使わないと俺達は決めている。こちらも嘗められるわけにはいかない。少なくともセシリアさんの場合、ＩＳにまだ慣れていないようだからこちらもほんのちょっぴりは有利になりそうだがそれもあんまり期待してはいけない。まぁ、こっちにはこっちでそれなりに考えがある。俺が教官を訓練で倒したのは…野球のボールなしでは出来なかったことだ。実を言うとこの時倒した教官というのは織斑と同じで山田先生なのだ

が、俺は逃げ回っている内にポケットの中にボールが入っていることに気がついた。それを丁度山田先生の上から落としてそれに気をちらつかせている内に何か出来ないかと考えたのだ。結果は大成功、野球で言うところのホームベースで相手の捕手（キャッチャー）に体当たりするようにＩＳごと前から突っ込んだ…とまでは行かないが迫りきって圧倒することが出来た。これは今回も使えそうな予感がある。

「どうしたんだ？」

「いや…まぁ織斑になら話してもいいか。実はさ…」

「えっ！？。お前も実技試験受けてたのか？」

「この学校の受験では誰もが受けなくちゃいけないんだろ？」

「ま、そりゃあそうだけど…」

「俺は鉄道学校の試験のせいで別な日に振り替えさせられたからみんなとは一緒に試験を受けられなかったんだよ」

「なるほどな」

「まぁ俺も倒したけどね、山田先生は」

「俺と同じか」

「そういうこと」

「お前とは気が合うな」

「それはこっちもさ」

その後はこれまた３０分ほど雑談をした。俺が女嫌いと言うことも知ってくれていたが、それなりに紹介はしてくれた。さすがの織斑だけあって、もうたくさんの女子と交友関係を築いているようだ。篠ノ之さんの事について聞いてみると確かに織斑の幼なじみであることがわかった。お姉さんがいるようで、小学４年の時にＩＳを発表したことを理由に転校してしまったんだそうだ。確かに俺が小４の時にそんな事があった気がする。ＩＳが発表されて世界中が大騒ぎしていていた気が…。

「いやぁ、楽しかったよ」

「そうかそうか、それはよかった」

「そろそろ消灯か…俺はそろそろ戻るよ」

「そうしておきな。篠ノ之さんにまた機銃掃射喰らっちまうぞ？」

「それだけは勘弁だな」

何でも織斑は篠ノ之さんと偶然にも同じ部屋なんだそうだ。個室で使わせて貰っていて俺は何だか一人だけ独占していていいのかとも思った。ま、学校がそうしろって言ってるんだから仕方ないか？。

「それじゃあまた明日」

「おぅ、お互いに頑張ろうな」

「ネー」

「えっ？」

「韓国語で‘そうだね’だよ」

「ははは。お前って凄いな」

「いやいや、友だちに韓国人がいるって言っただろ？」

「そうだったそうだった。それじゃあまた明日な」

「うん、おやすみ」

俺は織斑がドアを閉めて、足音が聞こえなくなると鍵を締めてベッドにダイブした。

”ふぅ～、明日は頑張らないとね…そういえば今日は李承？選手ホームラン打ったんだっけ？。こりゃあ幸先いいな…”

俺はそんな事を思っている内に眠りに就いたようだった…。

10話　Ｓｌｅｅｐｉｎｇ　Ｃａｒ

夜遅くに俺は目を覚ました。すると遠くの方からなにやら懐かしい機関車の汽笛が聞こえてきた。

”ピィー！！”

「ん？！、ＥＦ６６？！」

俺は慌てて外のベランダに向かった。すると堂々たる１３両の明るい車内が俺の目に入った。ガタンガタンという規則正しい音を立てながら遠くの線路を西へとひた走っている。

「さくらだ！！」

俺は年甲斐もなく叫んだ。

このさくらというのは寝台列車の「さくら」のことである。１９２９年９月、当時の鉄道省が当時の東京（とうきょう）～下関（しものせき）間を結んでいた「３・４特別急行列車」に対して授けた。「富士（ふじ）」に次いで日本の鉄道史上二番目の愛称つき列車である。２０世紀、その輝きは寝台列車になっても決して衰えなかった。１９５９年に当時の最新鋭の２０系客車に置き換えられ、より一層人気は増した。況してや今日のように誰もがこの寝台特急に乗れるわけではなくしかもまだ特急が「特別急行」となっていた時代である。当時はまさに高嶺の花とでも言えばいいような存在の寝台列車だった。その後は幾たびの変遷を経ながらも１９７２年には１４系１４形寝台車に置き換えられてさらなる活躍を期待されてはいたが徐々に陰りが見えるようになった。航空機の大衆化、安価な高速バスの台頭、新幹線網の発達、道路網

の発達などによって老朽化した寝台列車は徐々に姿を消していった。戦前から、寝台列車の中でも王道の如く君臨していた「九州寝台」も例外ではなかった。１９９６年に臨時列車ではあったものの早くも「みずほ」が廃止になった。これは当時としては衝撃的なもので遂に九州寝台にも廃止の手が及んだことを意味していた。その後更に列車の統合などを繰り返して何とか寝台列車を継続していこうとしたものの、その努力もむなしく老朽化した寝台車では他の輸送機関に太刀打ちすることは出来なかった。２００５年には惜しまれつつもここまでの‘ブルートレイン’の礎を築いた「あさかぜ」が廃止。その後このさくらもあさかぜと運命を共にするかのように同年に廃止となった。

”でも、どうして?”

俺はおかしかった。２００９年に東京駅発の九州行寝台列車は全廃されて今は一本もないし、臨時列車の情報も俺の耳には入っていない。それでも俺は

「綺麗だなぁ」

と呟くほどその寝台列車を眺めていた。夜の東海道をひた走るその姿はまさに芸術そのもの。長居ブルーの編成をたなびかせて、月夜に照らされながら走る車内から見る月は格別なものであった。

”あれれ??”

気がつくと今度は車内の中にいた。偶然にも寝台列車に必ず備え付けられてある浴衣をちゃんと着てベッドに座っているのだ。

”ゴトンゴトン、ガタンガタン”

リズムよく聞こえてくるレールの音までもがしっかりと聞こえてくる。

”これは夢かな?”

俺はベッドから外を見ながらそんな事を思った。それでも十分に嬉しかった。外からは小さな子供の声であろう。キャッキャッ、キャッキャッと嬉しさのあまりはしゃいでいる声がした。行為のも寝台列車には必ず必要な音声の一つだ。俺は一度もこの列車には乗ったことがない。廃止になったときが丁度11歳だったから無理もなかった。だが一度でいいから乗ってみたいと思っていたのだ。夢かもしれないとは思いながらもやはり嬉しかった。

”おっ!”

列車は根府川を過ぎて例の鉄橋にさしかかったようだ。この鉄橋は東海道本線(とうかいどうほんせん)の中ではそれはそれはとっても有名な鉄橋であって、俺もたまに来ていた。ここからは昼までも海が一望出来て美しいのだが今日はまた違った意味で美しい。月に照らされた漆黒の海が光を放っているのだ。急いで個室の車内の灯りを消すとそれはまた著しく見て取ることが出来た。

「いいなぁ…」

そんな景色に心がジーンとしている内に機関車は長い長い汽笛を放ちながらトンネルにさしかかった…。

「はっ!、やっぱり夢か…」

気がつくともう朝の5時だった。いつもよりも30分も寝坊だ。

“今日はセシリアさんとの決闘か…”

そんな事を思いながらもどことなく心の中はスッキリしているような気がした。もしかしたらあの夢は自分の不安なり悩みが発散されていたのかもしれない。自分の好きな鉄道が俺を助けてくれたのかもしれない。

「さてと…あれ?」

俺の寝ていたベッドの脇には寝台列車の本が置かれていた。それからしばらく準備なりなんなりをしている遠くの方からなにやらまた汽笛の音が聞こえた。外から眺めてみると遠くの方には東京へとラストスパートをかけるサンライズエクスプレスの姿があった…。

11話　決闘（前編）

いい夢を見たなぁ…と久しぶりにそんな事を思いながら俺はいつもの通り食堂に織斑と一緒に向かった。

「あれ？」

「甕井どうかしたか？」

織斑の周りにはいつものなら例のファン会員とでも呼べばいいような人達がたくさんいるはずなのだが今日はそうった人達がいない。

「いやさぁ、今日は誰も周りにいないなって」

「あぁ」

「空気読んでるつもりなのかね？」

「かもしれないな」

確かに周りの空気は緊張しているような気がした。元々決闘を申し込まれた身だから俺は全然緊張なんかしていなかった。みんなの重いとは裏腹に俺は楽しみであった。ただでさえ相手は代表候補生、野球で例えればいきなり明日プロ選手から対戦を依頼されたようなものだ。嬉しくないわけがない。勝つにせよ負けるにせよ、全力で戦うつもりだ。

さて、織斑先生は俺達の決闘に関して怒るどころか寧ろ肯定しているようにも感じた。

「聳井、一夏！、二人とも今日は頑張れよ。滅多にない機会なんだ。大切にな！」

朝一のホームルームでセシリアさんがいるまで大声で俺達に織斑先生はそう言った。

「織斑、頑張るしかないな」

「あぁ…」

セシリアさんは当然のことながら専用機、織斑にも「白式（びゃくしき）」という専用機が与えられている。早い話が俺だけ練習機だ。みんながオーダーメードのバットを使っているのに自分だけがどこにでも打っている普通のバットを使っているような惨めさ…と他の人は思っているのかもしれないが俺はそんな事は全くなかった。

「最初は俺からだな」

「頑張ってこいよ！、聳井」

「おぅ！」

セシリアさんの強い要請で俺が先に戦うことになった。よほど俺の事をとっとと倒したいと思っているのだろう。変な意識を持たれているようだが、俺は挑戦するつもりで行くわけで何も怖いものなんかないし、逆に楽しみで仕方がない。

「うわぁ…眩しい」

俺は外に出ると開口一番にそう呟いた。観客席にはこれでもかと他のクラス、学年の人達が来ていて自分たちの決闘を見物していた。

「ねぇねぇ見てよ。あの子練習機じゃない」

「いくら何でも、専用機に練習機が勝つなんて無理よ」

「あの子もいい度胸してるわよね。代表候補生には向かうなんて」

「痛い目喰らって泣きつくのが関の山ってところかしら？」

案の定俺の評価は最低最悪。まぁそれも当然と言えば当然のことだろう。

「聳井さん！、早く上がってきてくださいまし！！」

上からはセシリアさんが無線で俺を急かした。

「やれやれ、今行きますよ…上昇」

俺の上昇には意外にもみんな驚いていたようだ。確かに入学して間もない１年生のしかも男子がここまで練習用とは言えどもＩＳを操っているんだ。驚かないわけがない。いきなり初打席でバットにボールを当てるようなものだ。

「おぉ！！、高いなぁ…あそこにあるのはスカイツリーかな？」

俺が喜んでいるとまたまたセシリアさんは怒った。

「いい加減にしてください！！。聳井亮悳、あなたは絶対に許さな

い…倒して見せますわ」

「おっと！」

戦いはセシリアさんの不意打ちで始まった。

「卑怯者が！、俺もお前を許すつもりはない！」

罵声には罵声で対抗し俺もとうとう本気になった…。

１２話　決闘（後編）（前書き）

今日は夏至なんですね。どうりで暑いわけです…。

12話　決闘（後編）

卑怯な不意打ちを逃れた俺は何とか体勢を取り直した。だが俺に攻撃出来る好きはまだまだなかった。さすがに不安定とは言えども専用機なことだけあって、間髪を入れずに俺に攻撃をしてくる。俺は防戦一方だ。

「おっ！、またか！」

「あらあら、随分と逃げ足が速いのですわね」

相手が放つビームに当たらないようにと考えると、逃げる以外に方法はない。だが燃料なんか野問題もあるから長時間それを続けると逆に俺の攻撃は出来なくなってしまう。負けてでもいいから、攻撃を一度だけしてみたい、なんてことを思った。

「くっ…早く当たってしまいなさい！！」

俺の逃げ足にさすがのセシリアさんもしびれを切らしたようだ。より一層攻撃を強化してきてくれた。何だか、子機みたいなものからじゃんじゃん攻撃してくる。ヤバいぞこれは…

「痛っ！！」

その時とうとう俺はビームに当たってしまった。特定のビームに避けようとすると、他のビームがその隙を突いて攻撃してくる…と言った誰でも思いつきそうな戦法にまんまと嵌（はま）ってしまった。

「おっほっほっほ！！。とうとう当たってしまったようですわね。

さっさと…」

「8．05…」

「なっ、何なのですか?。人がしゃべっているときに!」

セシリアさんの話を遮って俺はこう言い返した。

「公認野球規則8．05によれば‘打者が打席内でまだ十分な構えをしていないとき投球された場合には、審判員はクイックピッチと判定する。走者が塁にいればボークとなり、いなければボールとなる。’と書いてあります。だから今のって野球で言えば反則なんですよねぇ」

「なっ!!」

「俺達が昨日の朝やっていたスポーツのことです。まぁあなたの事ですからどうせ泥臭いとか思っているんだと思いますけどね…」

「くぅぅぅ!!」

「ん?」

「つ、次で決着をつけて見せますわ!」

「ほぅ。それは面白いですね…おっと!」

「まだまだ!!」

俺はその後も5分くらい逃げ回った。火力を最大限に使っているん

だろう、相当相手も疲れていた。俺はまだまだ余力十分だったが先に悲鳴を上げたのはＩＳ本体の方だった。

”まずいな、シールドエネルギーなんかの一部を移動用に回したりして延命してきたけど、もぅそろそろ限界か…”

そう、エネルギーがもうないのだ。そこまで高度は高くないが、高速飛行を繰り返しているからエネルギーの消費も多かったのだろう。早くけりをつけないといけない。よぉく見てみると、セシリアさんのＩＳは子機からの攻撃の時は全体の統括をしなくてはならないからだろうか、セシリアさん自身は攻撃をしていないようだった。そろそろボールの出番のようだ。俺は一気にセシリアさんの大体５０メートル上に向かってから野球のいわゆる硬球を落とした。落下速度的にも上々だ。

「きゃっ！」

俺の思った読みとは違い、避けずにセシリアさんは驚きながらもボールを取ることが出来たようだ。それはそれで好都合だ。

「てやぁ！！」

俺はそのどさくさに紛れて少し斜めからセシリアさんに向かって体当たりギリギリなところ…いわゆる寸止めなところまで接近した。セシリアさんは驚きのあまりに声すら出なかった。

「…」

「さっきの続きですけどね、ボールを持っていない野手が進路を塞ぐことは守備妨害なんですけど、ボールを持っていれば走者には体

当たりすることが出来るんです。その時はボールを落とせばセーフ、落とさなかったらアウトってことになるんですよ」

「えっ、アウトと言うことは…」

「さすがにクリケットの本場ですね。俺の負けです」

「ど、どうしてですか？」

「だってあなた今ボールを持ってますよね。落としていないんですから」

本当は体当たりしたかったんだけどなぁ…中学の野球部にいたときはよくやっていた。本当は中学生の野球では危ないからいけないはずだったらしいけど…。

「ふざけないでくださいまし！！。あなたとの勝負はまだ…」

確かにセシリアさんの言うとおりだった。これだと俺が一方的に負けを認める、いわゆる降伏だ。セシリアさん自身は俺をあくまで倒してしまいたいと思っているようだが、俺にはそこまでつきあえない理由があった。

「無理ですよ、ほら…」

「エネルギーがもうありませんわね」

「これ以上飛んだら墜ちますから…」

俺は早速、基地というか格納庫の方に進路を変えた。

「あっ！、待ちなさい！！。話はまだ…」

「次の試合（ゲーム）があるんでしょ？」

「…」

何か言っているようにも聞こえたが俺には分からなかった。下の方に戻ってくると何だか騒がしかった。

「あの子…凄かったね」

「うん。練習機だからダメだと思ってたけど、あそこまで候補生相手に戦うなんて」

「でも最後のやり方ってありなのかしら？」

「いいんじゃないかしら？。別にＩＳで体当たり禁止なんて誰も言っていないんだから…」

「そうよね…何だか全く予想もつかなかったわ」

どうやら俺に対する見方も幾分変わってくれたようだ。心の中で笑いながら俺は格納庫に戻った。

「お疲れ！！」

織斑が出迎えてくれた。

「おぅ。いやぁ強かったよぉ」

「お前も健闘してたじゃないか！」

「いやいや、あんなインチキくさい戦い方じゃね。所詮練習機と専用機との戦い、勝負は目に見えていた。だからあぁすればいいかなって思っただけ」

「聳井、ご苦労だったな」

「あ、織斑先生」

「変わった戦法だったな」

「あ、ええ…まぁ」

「だが見ていて面白かった。これからも頑張るようにな！！」

「あぁ、どうも…それじゃあ織斑、頑張れな！！」

「任せとけ！」

俺はそそくさと更衣室に戻った。シャワーを浴びたかったというのもあるしここならゆっくりと観戦出来るからだ。ＩＳは見た感じ誰でもそうそう買えるような安物には見えない。大体世界に何個あるかといった具合なんだから買えるとかそう言う問題ではないほど高価なはずだ。にもかかわらず俺の戦法ではＩＳを意図的に破壊してしまう。なのに織斑先生が俺のこの方法を認めたことが意外だった。まぁ…いいか。

「おっ、始めたなぁ…」

俺は更衣室にある水を飲み、ほっと一息しながら観戦に集中した…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやぁ、疲れた〜」

「ははは、こっちも同じだよ」

「セシリアかなり疲れてたぞ。お前が逃げ回ったからじゃないか？」

「えぇー、俺のせい？」

「だろ？」

俺と織斑は更衣室で制服に着替えながらそんな話をしていた。織斑も結局はあと一歩というところでエネルギー切れで敗退してしまった。

「まぁ楽しかったな」

「おっ、女嫌いなお前からそんな事が聞けるなんて意外だなぁ」

「よせよ。俺はあくまで勝負が楽しかったっていいたいのさ」

「わかってるわかってる」

「本当か？」

「勿論だ、ところでさ…」

「ん？」

「どうするよ、外の人だかり」

「だよなぁ」

俺達はそとのざわつきからしてかなりの人達が俺達が更衣室から出てくるのを待っていることが分かった。今日の戦いで俺達に対する見方が織斑の場合は一層よく、俺の場合は不思議になったようだ。

「しゃぁないな。非常口からだな」

一応更衣室にも外に直結している非常口がある。ベルが鳴るかもしれないけど、こっちの方が安全だ。

「そうするか…」

俺達は急いで非常口から逃げ出した。案の定警報が鳴り、部屋に戻るや否や俺と織斑は織斑先生に連れて行かれて寮長室でお説教を喰らう羽目になった。

ところでセシリアさんは

”二人には勝ったのに…、なんなのでしょう。この気持ちは？。甕井さんにも一夏さんにも見事に私の弱点を見破られてしまいましたわ…”

と、自室でシャワーを浴びながら思っていた…。

13話　説教

今日は織斑先生のげんこつを実に3発も喰らった。いつもこれに耐えている織斑を考えると凄いと思う。

「全く、お前達は…。たが確かに、一部の女子がお前達に敏感に反応していると言うこともわからなくもない。だからといってお前達のやったことを容認するわけにも行かない」

「すいません」

「ごめん、ちふゆね…ぐはっ！」

「織斑先生だといっただろが！」

「ごめんなさい、織斑先生…」

「全く…おっ、もうこんな時間か」

時計を見ると時刻は既に夜の7時を回っていた。部屋に戻ったのが大体4時過ぎだったから実に3時間近くここに拘束されていたというわけだ。

「さてと、というわけで以後は気をつけるように」

「「はい」」

「よし、お前達も早く食事に行け」

ようやく解放された。先生に言われたとおり俺達は急いで食堂に向かった…と言いたいところだったが、そう言うわけにもいかなかった。俺は例によって女嫌いだから夕食時に食堂へ向かうのが億劫になる。だけど今日は仕方がない。

「うわっ、混んでるなぁ…」

「おっ、あそこに箒がいるぞ」

俺もこの場に一人で残されるのはいやだから一緒について行く。

「箒、俺と甕井と一緒に食べないか?」

「あぁ、大歓迎だぞ!」

何だかとっても喜んでいるようにも見える。断るわけにもいかないから今日はここで食べることにしよう…。

１４話　謝罪

俺は正直なところ女嫌いだからあんまり乗り気ではなかったが、織斑の友人と言うこともあって断ることが出来なかった。まぁ幸い織斑が篠ノ之さんの隣に座ってくれたから、俺は二人の話に時々相槌を打ってご飯を食べてさえいればよかったから些(いささ)か苦労はなかった。

「ははは、昨日は箒が怒ってさぁ」

「そ、それは一夏のせいだろ！」

「そうだったっけ？」

「当たり前だ。人の竹刀を勝手に使った上にあろう事か…うわぁもう！、考えただけでも恥ずかしい！」

聞いている限りだとこの人がどうやら織斑のルームメイトのようだ。俺は個室だから分からないがどうやら仲良くやっているようである。

「平和だな…」

「えっ？」

「何か言ったか？」

織斑も篠ノ之さんも同じようなことを聞いてくる。

「いや、何でもないよ。悪い悪い…それじゃあ」

気がついたらどうやら食事を俺は済ませていたようだ。

「えっ、もう戻るのか？」

「あぁ。今日も疲れたからさ」

「おやすみな」

「聳井、おやすみ」

「二人ともお休みなさい…」

俺はそう言うと席を立ち食器を片付けに向かった。どうやら篠ノ之さんは俺の事が変に思えるらしい。俺の姿が食堂から消えると突然話題を俺の事に変えた。

「なぁ一夏」

「ん？」

「あの聳井ってやつなんだが…」

「聳井がどうかしたか？」

「いや、何だか私といるのがつまらないのかって思ってな。この間挨拶をしたときもどことなくよそよそしかったし、況してやその後の会話はみんな敬語だったんだ。躾けられたとか言ってな」

織斑には一応全て打ち明けていた。俺が女嫌いで異性に対しては原

則敬語を用いることも。だけどそのことを他の人に口外することを俺はしないようにと頼んでいた。それは俺が後々言うべき時に言おうと思っていたからだ。

”う〜ん。幾ら箒とは言えども、甕井の頼みを破るわけにはいかないかな…”

「気のせいじゃないか。俺に最初にあったときもそんな感じだったし」

「そうか…ならいいのだけどな」

「ふぅ…」

織斑という友人を持ったことを俺はとても嬉しく思うべきであるようだ。確かに彼はいいやつだ。男子が二人しかいないから団結して頑張ろうという意識がお互いに強いのだろう。

さてさて場所は変わってその頃俺は部屋へと向かう廊下をすたすたと歩いていた。別に疲れていたわけでも眠かったわけでもない。俺はあの場所にいるのがとうとう耐えられなくなっていたのだ。最初は確かによかったのかもしれない。だがあの二人の仲を見ているとどうも自分がいるということ自体が場違いな気がしてしまったのだ。だから俺は疲れたと嘘をついて部屋に戻ることにしたのだ。

”まぁ腹も一杯だし。あとは誰にも会わずに…”

「あっ」

「あっ」

俺は自分の運が最悪だとこの時悟った。角ですれ違ったのは偶然にも今日決闘をしたセシリアさんだったのだ。

「どうも…」

「…」

俺が挨拶をしても返事をしてこない。そりゃあ相手だって俺の事を毛嫌いしているんだから当たり前か…と思っていたのは俺だけでこの時セシリアさんは

”どうしましょう。聳井さんになんと謝ればよろしいのでしょうか。普通にごめんなさいと謝るのがベストなのだろうと思いますが、聳井さんがそれぐらいのことで許してくれるのでしょうかしら…”

と心配しながら心の中でそう呟いてた。勿論そんな事が俺に聞こえるわけもないし、況してや俺は聞きたくもない。

「お休みなさい」

俺は最後にそう言うとまた動き出した。

「あっ、あの…」

俺は今度は聞こえないふりをした。しっかりと聞こえていた声を俺は無視したのだ。すると…

「ちょっ、ちょっとお待ちください！」

後ろからセシリアさんは後をつけてきた。仕方がないから俺は停まった

「どうかなさいましたか？」

「その、今日は申し訳ありませんでしたわ。無礼な真似をしてしまい、あなたに恥をかかせてしまって…本当にごめんなさい」

俺は意外に思った。女性に誠心誠意で謝られたのはとっても久しぶりだったからだ。でもダカラと言って長年培ってきた女嫌いがそう簡単に治るわけがない。

「俺は気にしないんで…それじゃあ」

「あっ、ちょっと…」

”もう、なんなのかしら。ちゃんと謝ったのに…でも私にも責任がありますから…それにしてもどうして私たちのことを聳井さんは避けるのかしら…”

セシリアさんも去りゆく俺の後ろ姿を見て箒さんと似たようなことを思っていたようだ。

部屋に戻って灯りをつけると俺はテレビをつけた。オリックスの試合を中継していた。

「さぁ、昨日ホームランを放った李承？選手が打席に入ります。ここまでの成績は中飛（センターフライ）、一塁打です。さぁ、一体どうなる…おっと！！、初球を打った！。これはいい当たりだ。入るか入るか？…入りましたぁ！！！！」

俺は久しぶりに李承?選手のホームランを見た。とっても嬉しかった。決闘には負けたけど今日はこれを見られただけで全て帳消しだ。

”よかった。最後の最後に李承?選手のホームランを見れたぞ!。さぁてと、もう寝るか…”

俺は嬉しさを思いながら部屋の灯りを再び消してベッドの中に潜り込んだ…。

15話　昼抜き

それ以降織斑にはセシリアさんも積極的に話しかけていくようになった。俺の見た限りだとどうやらあの決闘以来自分の考え方を変えたようだ。

「一夏さん、一緒にお食事はいかがですか？」

「おぅ、それはよさそうだな。箒も誘っていいか？」

「え、えぇ…構いませんわよ」

俺はそんな話を隣で聞きながら寝たふりをしている。ここ一週間俺は満足に昼ご飯を食べることが出来ないでいる。どうも俺の女嫌いは顕著に表れているようだ。食堂に行くことだけで億劫になる。ダカラと言って織斑や篠ノ之さん、セシリアさんにまで迷惑をかけるわけにはいかない。そんな事を考えていると本当に眠くなってきた…気がつかないうちに俺は寝ていたようだ。

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

「聳井、おい聳井。昼ご飯一緒に行くか？」

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

「ダメだな。完全に眠ってるよ」

「全く、どうして聳井さんは私たちとご一緒してくれないのかしら」

「気になるのか？」

「ならないわけないだろう」

「箒さんと同じですわ。何だか私たちの事をあまりよく思われてないのかしら？」

別にもう決闘のこととかを俺は根に持っているわけがなかった。というよりは女嫌いだから話をしたくなかったのだ。実を言うと昨日も織斑先生から呼び出しを受けていた…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「話というのは？」

「お前、最近…いやこの一週間満足に昼食を取っていないようだな」

「バレましたか？」

「当たり前だ。私は一年の寮長だぞ」

「すいません、ただあの中で食事をしたくないものですから…かと言って一人で別の場所で食べるのも変に思われたら嫌ですし」

「残念ながら健康面の問題から、私はそれを黙認するわけにはいかない」

「お言葉ですが、別に俺は昼ご飯を食べなくても部活をやっているわけでもないんで持ちます」

「何だと？」

「これ以上話す必要もないかと思います。それでは」

「あっ、おい！！。全く…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

と言ったなんとも相手にとっては扱いづらいタイミングで俺は部屋に帰ったわけだ。さすがに俺も心臓が止まりそうなぐらいドキドキしながらその行動をした。意外にも織斑先生はあっさりしていたことが幸いだった。とまぁ昼ご飯を食べなくても実際のところ俺は本当に大丈夫なのだ。

　気がついたら授業開始５分前になっていた。水を飲んで教室に戻ると織斑が話しかけてきた。

「甃井、大丈夫か？」

「ん？」

「お前、この一週間、昼（ひる）食べてないだろ？」

「そうだな。だけどあそこで食べるのもあれだしね」

「確かにそうなんだよなぁ…でも食べないのは体に毒だぜ」

「気をつけるよ」

次の時間は数学、寝ていても分かるけど山田先生だからそうするわ

けにも行かない。と言うか満腹感が殆ど無いから眠気もおこらないのだ。まぁ、夕方までなら持つだろう…。

16話　New　Face－1（前書き）

いよいよ今日からナイターが始まりますね。李承?選手に期待です。

16話　New　Face－1

最後の授業も終わり、後は荷物をしまって帰るだけ…と思っていたがどうやらまだ何かあるようだ。

「今日から…と言っても、もう夕方になってしまったがこのクラスに新しい仲間が加わる」

そんな事でいちいち残されるのかと思うと俺はウンザリだった。だが…

「ヤッホー！、一夏！」

と言いながら入ってきた新しい女子に俺は尚更ウンザリした。何がウンザリかって、気性が荒そうなところである。幾ら女嫌いとは言ってももう16歳になるんだからそれなりのことは俺だって知っている。

「鈴！！」

「一夏に会いたくて久々に来日したわ！」

クラスの雰囲気が凍り付くのが分かる。勿論歓迎しているというのもあるのだろうけど、織斑を自分のものにしようとするライバルでもあるから、みんながそうなるのも分からなくもない。

「あの、お名前は？」

山田先生でさえ、その転校生の威圧感（パワー）に圧倒されている。外はもう

すっかり黄金色になっている、退屈だな…。

「中国の代表候補生、鳳鈴音（ファンリンイン）よ、みんなよろしく！」

俺は中国という言い方はあんまり好きではない。

「中共の出身か？」

俺は静まりかえった教室で凰さんにそう聞き返した。今は形骸化してしまったが中国…おっと中華人民共和国は昔は根っからの社会主義国の一つであった。どうして中共と呼ぶかは大体予想がつくだろう。これは隣にある中華民国、いわゆる台湾との区別だ。中華人民共和国も中華民国も一応略そうと思えばどちらも‘中国’であるから…。

「そ、そうだけど…」

「そうか…」

俺は別に大きな理由があるわけでこれを聞いたわけではなかった。あくまでもお互いを理解することとして当然のことをしたまでであった。だが相手はそう思ってはくれなかったようだ。

「アンタ、初対面で悪いけど、失礼なこと聞くのね。中共だなんて何年も前の話なのよ」

「俺は台湾のことを未だに国府（コクフ）と呼んでいるんでね」

この中共というのは‘中国共産党’の略で国府というのは‘中国国民党’の事である。前者が中華人民共和国の第一党、後者が中華民

国の第一党だ。

「まっ、いいわ。私もそんなに気にしないし。とにかくよろしくね」

「はぁ…」

お互いにピリピリしていた空気は意外な形で沈静化された。

「さて、凰さんに座って貰う席は…そうですね、甕井君の後ろぐらいし空いていませんね」

さすがにそれは無理だろう。通れも突っ込みたくなった。俺は身長も普通に長いが座高は1メートルを超えている…いわゆる胴長短足だ。見たところ明らかに凰さんは俺より、身長が低い。と言うことは必然的に座高も俺より低くなる。つまり前が見えないわけだ。ここは俺が譲歩すべきだろう。まぁ前が五月蠅くなりそうだから寝ることは出来ないだろうが…。

「先生、凰さんは多分俺の後ろじゃ何かと苦労するでしょうから俺が後ろに下がりますよ」

「本当ですか？」

「えぇ、大体小さいんだから俺が前にいたら黒板見えないでしょ？」

「むぅぅぅ」

どうやら凰さんは怒っているようだ。

”おいおい、怒るところじゃないだろう…”

「わかりました。それじゃあ凰さん。聳井君の前に座ってください。聳井君は一つ後ろに…」

「イェー」

俺は例によってふざけて韓国語で答える。すると早速それを確認して凰さんが数分前まで俺がいた席に腰をかけた…。

その後部屋に帰ると早速俺はいつもの通りにパソコンをつけてのんびりと野球のニュースなりどこゾの閣下なりをこれまたとあるサイトで見ようとした。すると

「た、助けてくれ聳井！」

「ちょっと一夏！」

「まて一夏！」

いきなりドアがバンと開いたかと思うと、織斑、凰さん、篠ノ之さんの順で入ってきた。

「三人ともどうしたんだよ」

俺は嫌々ながらもそう聞いた。

「実はさ、箒も鈴も俺の幼なじみなんだよ」

「リン？、元素記号１５？、Ｐ？」

「そのリンじゃない！、私の仇名よ！」

凰さんが怒りながらそう答える。

「あぁ、なるほど…それで？」

「で、どっちがファースト・幼なじみなのかって…」

「ほぅ、つまりどちらが一番でどっちの方が上か決めて欲しいと言う訳なんだな？」

俺が篠ノ之さんと凰さんの顔を見ると二人とも頷いた。俺はおかしかった

「ははは」

と大声で笑った。

「な、何なのよアンタ！」

「そうだぞ、鵜井、それはあまりにも失礼だ。私たちは真剣なんだぞ！」

二人に半ばキレられたから俺も少し怒り口調で言い返した。

「だったらどっちもファーストでいいだろ！。ファーストは一人だけって誰が決めたんだ？、別に織斑がそれでも構わないんだったらそれでもいいんじゃないのか？。大体織斑の意見もろくに聞こうとしないで自分が一番だなんて…笑わせるな」

俺は続けざまにそう答えた。さすがに二人もこう言われたらシュンとなってしまった。

「さぁてと、織斑はどうなんだ？」

「俺か？」

「お前はどっちがファーストでどっちがセカンドなんだ？」

「箒と入れ違うように鈴が越してきたから、時間的には箒がファーストで鈴がセカンドなんだよ」

「ならいいんじゃないの？。それでさ、別に好き嫌いだとかで区別している訳じゃあないんだろ？」

「あ、当たり前じゃないか！」

織斑の力のこもった言い方に俺はほっとした。もしこれで織斑がなよなよしていたら、又俺は喝を飛ばすところだった。野球を中学でやっているときはみんなでよくヤジを飛ばしたし授業中も女子との対立ではいつもこんな有様だった。

「よし、可決。これでいいんじゃないか二人とも？」

俺は二人にそう訊くと、二人とも

「うん、一夏がそう思ってくれてるんだったらいい」

「私もだ」

と二人は静かに答えた。

「これにて一件落着。あれれ？」

すると今度は俺に篠ノ之さんと鈴さんが迫ってきた。

「な、何だお前等？」

「私たちが真剣に悩んでいたのに笑われたなんて許せない…」

「よし、コロソウ…」

”やれやれ、ランニングトレーニングか…”

俺は一目散に部屋から飛び出した…。

17話　New　Face－2

こんな偶然があるのか分からないが今朝も転校生がやってきた。しかも…世界で3番目の男性の操縦士でフランスから来たんだとか…。

「シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」

彼は何というか女っぽく見えてしまう。外人だからだろうか…。とりあえずデュノアは俺の脇に座った。と言うかそこしか新しい席を置ける場所がないのだ。

「俺は甕井、これからよろしくな」

「こちらこそだよ」

挨拶もほどほどに済ませると俺達は更衣室に向かおうとした。だけどもこんな美男子なんて滅多にこの学園というか普通の高校にだっていない。もし他のクラスの女子に一人でもあったりしたら…とんでもない混雑になってしまうのは間違いない。

「二人とも急ごう」

「どうかしたのか甕井?。まだシャルルは来たばっかりだからそんなに急がなくても」

「まずいんだよ」

「まずい?」

と、その時

「あっ！！」

後ろの方から女子の声が聞こえた。早速誰かに見つかってしまったようだ。１時間目はＩＳの実習で担当は俺達の担任の織斑先生だから遅刻すると偉い目に遭う。

「織斑、デュノア！」

ようやく二人も何で俺が急いでいたか理解してくれたようだ。織斑はデュノアと手をつなぐと俺と一緒に一目散に更衣室に向かって走り始めた。廊下は走ってはいけない？…はて、なんのことかな？。

さてさて、何とか更衣室に俺達は辿り着くことが出来た。走ってきたおかげで授業が始まるまでにはだいぶ時間に余裕がある。こうなったらここで素振りの練習でもすればいい。

「織斑、ちょっと脇でやってるから」

「おぅ！」

俺は黙って、というか無断で隣の列のロッカーも使っていた。別に誰も使っていないし、今後も誰も使わないだろうから大丈夫だろう。そこからバットを取り出すと素振りを俺は始めた。

”ブン！、ブン！、ブン！”

織斑はもう慣れてるからいいもののデュノアは怯えていたようだ。

確かに隣で何をしているか分からないから当然と言えば当然だろう。

「ねぇ、一夏」

「ん？、なんだ？」

「あのさ、聳井って隣で何をしてるの？」

「あぁ。野球の素振りだよ」

「野球かぁ、ボクの国だとあんまり馴染みがないからね」

「よかったら教えて貰うといいんじゃないか？」

「ボクが聳井に？」

「あぁ、聳井は俺にも野球を教えてくれたんだ。楽しいと思うぞ」

デュノアは少し考えてから

「うん、今夜にでも頼んでみるよ」

と織斑に言い返した。俺は素振りに夢中で全くこの会話は聞こえなかった。

それから１０分後、そろそろ着替えてグランドに行けば丁度いい頃合いだ。

「着替えようぜ、織斑」

「おぅ」

「デュノアもって…あれれ？」

「も、もう着替えたのか？」

「う、うん。ボク、早着替え得意なんだ…」

俺達がほんの少しロッカーの中に入っている実習用の服、まぁ何というか野球のアンダーシャツのようなものを取り出している間にデュノアは着替え終わっていた。凄い運動神経の持ち主だ。

「外で待っててくれてもいいけど…中にいた方がいいか？」

「えぇっ？！、いや、そ、外にいるよ」

「そうか…」

織斑の質問に驚きながら答えるとデュノアは早速外に向かっていった。

「シャイなのかな？、甕井」

「さぁ…」

俺達は不思議に思いながらも着替えを済ませて外のグランドに向かった。

今日の実習はＩＳへの乗降と歩行訓練だそうだ。

「それでは、織斑、オルコット、鈴、デュノアの専用機持ちの４人が各自に教えること！、他のものは好きなところに出向いて教わるんだ！」

俺の飛行能力はこの間の決闘で織斑先生は知っている。とは言っても特別扱いはされない。普通に専用機を持っていない生徒と同等に扱われる。この中で俺が選ぶことが出来るのは、織斑かデュノアの二択だろう。悪いけど女子に教わるぐらいなら織斑先生に後で怒られてでもいいからサボるわ。

「聲井、せっかくだから教えてあげるよ」

意外にもデュノアからそう話しかけてきてくれた。これはありがたい。

「聲井がこの間の決闘で凄かったって事は、ボクも知ってるよ」

「へぇ…フランスまでそんな情報が？」

「うん、ボクの乗ってるＩＳはデュノア社製なんだ」

「お前の名字と関係があるのか？」

「父が社長をしていて、それでボクが息子ってわけなんだよ」

「なるほどね」

俺の他には…女子が数名いた。その中には布仏さん達の姿もあった。

「聲井君、さきに乗ってみてよ」

「俺が…ですか？」

「そうそう！、この間凄かったからこれぐらい余裕でしょ？」

「わ、わかりました」

”ん？、聳井って女嫌いなのかな？”

「それじゃあ乗せて貰うぞ」

「え、う、うん。いいよ」

俺は急いでＩＳに乗った。さすがに高性能な専用機だけあって、乗り心地は抜群だ。それから歩行訓練も俺はそつなくこなした。社長が父親なだけのことはあって、デュノアにはベストなとおりに設計されているのだろう。いやそれどころか、誰が乗ってもいい具合になるように設計されているようだ。練習機とは訳が違う。

「ありがとう、乗り心地抜群だったよ」

「そう？」

「あぁ、新幹線のグリーン車並みかな？」

「喜んでもらえると嬉しいな」

デュノアも満足そうな顔をしていた。本当のことなんだからね…。

織斑なり他の女子も真面目に教えていた。

”そりゃああいつらも代表候補生だからな”

当然と言えば当然なことを俺は思った。ただ、

”あっ！”

”あっ！…プイッ”

時たまセシリアさんや凰さんと目が合ってしまう。一番嫌な状況だ。相手も同じに持っているんだろう…と思っていたのはどうも俺だけで相手からしたらどうして目をわざと合わせてくれないのかと不思議に思われいてた。

「よしっ、今日の授業はここまでだ。各自、着替えて次の授業の準備にかかれ！」

「ふぅ、ようやく終わったなぁ」

「ボク、ヘトヘトだよぉ」

「何度かやってる内になれるさ」

「そうかな？」

「あぁ、甦井の言うとおりだよ。ところで次の時間は？」

「地理だったかな？」

「わかんないところあったらまたいいか？」

「勿論。デュノアもわかんないところあったらじゃんじゃん俺に聞いていいから」

そう言うとデュノアも安心しながら俺に

「ありがと」

と言った。俺達は更衣室に戻っていった…。

18話　KBO

勉強の方はフランスから来たと言って出来ないわけではなく寧ろ代表候補生だからかは知らないが前の席の凰さんも隣のデュノアもよくできていた。英才教育と買ってやつを受けさせられるのだろうか、いやぁ代表候補生にならなくてよかったとこれほど思うこともあるまい。勉強って言うのは自分が好きでやるもの、俺もそうやって今までやってきたんだからね…。

さてさて、授業も終わっていつもの通り俺は寮の自分の部屋に戻った。そう言えば俺が韓国で好きな野球のチームをまだ言っていなかったと思うからここで言っておくことにしよう。俺はＬＧツインズというチームと三星（サムソン）ライオンズという2チームが大好きなのだ。前者のＬＧツインズというは、前身が韓国の放送局が主なスポンサーをしていた‘ＭＢＣ青龍（チョンニョン）’と言うチームでこのチームのユニホームが俺は大好きだった。勿論それが俺がＬＧを好きになっている理由の一つだがもう一つは前にも言ったが朴龍澤（パクヨンテク）選手がこのチームに在籍しているのだ。さて、もう一つのチームの三星ライオンズだがこのチームには我らが李承?選手がその昔在籍していた韓国では名門球団の一つに当たる。１９８２年に韓国のプロ野球は発足したが、それ以来一度も親会社が変わっていないのはこの三星と釜山（プサン）に本拠地を構えるロッテジャイアンツだけだ。俺の部屋には前にも織斑が言っていたとおり大きな野球選手のポスターがある。それこそが韓国時代の李承?選手でもあるのだ。

「ほぅ…ヘテがＭＢＣに負けたか…」

俺はついついふざけて昔の親会社でチーム名を名乗ってしまう。ヘテというのは今の起亜（キア）タイガースのことだ。最近は部屋に戻ってか

ら織斑がご飯に呼びに来るまでは素振りをしているかパソコンでいろいろ泳いでるかだ。えっ、泳ぐというのは古い？…ご冗談を。とまぁ、検索するのは専ら野球か鉄道の話題。

「ほぅ、この連結は珍しいな」

勿論動画でのチェックも欠かさない。

「うん！、会心のスイングだな！」

ついついパソコンの前で独り言を放ってしまう毎日だ。すると誰かがドアをノックしてきた。まだまだ食事まではだいぶ時間があるぞ…。

19話　邪魔者

織斑が来るまでは大体後1時間というところだ。

「へぇ～、甕井君の部屋ってこんな感じになってるんだね」

「え、えぇ…まぁ」

入ってきたのは布仏さんだった。何だか大きな着ぐるみを身にまとっている。一体に何をしに来たのだろうか。

「それで何か？」

「うぅん。何となく来たんだよ～」

「は、はぁ…」

危うく俺は舌打ちしそうになった。面倒もいいところだ。まぁのほほんといつも教室で鎮座しているだけのことはあるから、まぁ仕方ないと言えば仕方ないのかな？。

いやいやそんなことはない。とりあえず追っ払わないと。

「あ、あの」

「うん？」

「用事がないんだったら今忙しいんで…」

「私たちのことが嫌いなの？」

「えっ？」

布仏さんの意外な質問に俺は驚いた。確かに間違ってはいない。

「セシリアさんから頼まれたんだけどね、登井君って私たちに冷たい態度取るからさ…それが本当なのか確かめてきて欲しいって」

「ほぅ、それを布仏さんが引き受けたと」

「うん」

どう答えようか悩んだ。だけど、ここで嘘をつくときっと後々面倒なことになりそうだ。

「大体は間違ってないと思いますよ。確かに俺は女嫌いですし」

「そうだったんだ…」

「えぇ、皆さんもだいぶ勘がいいようですね」

「わ、私のことも？」

「勿論ですよ。だから早く帰って欲しいなって」

「そ、そんな…」

いちいち俺はイライラする。この後の予想は

俺が本音を言う　↓　多分布仏さんが泣く　↓　織斑以外の誰かが来る　↓　状況を偏った感覚で捉えられる　↓　俺の所為になる　↓　翌日から厳しい制裁を受ける

とまぁこんな感じの流れだ。女子の多いこの学校ではこれは厳しいのではないかと思われる方もいるだろうが、俺もこういうことには慣れている。

「俺が女嫌いなのには大きな理由があります」

俺は布仏さんに向かってそう言った。

「理由？」

「えぇ、それは追々俺以外の誰かから聞くと思いますよ。俺が嫌いなのはあなただけではありませんから…」

「ぅ、ぅん…」

幸いにも布仏さんは泣かなかった。ほっと一安心だ。

「そ、それじゃあ帰るね」

「えぇ。これで布仏さんもしばらく俺の部屋には来られませんよね？」

「…」

布仏さんは無言のまま、俺の部屋から去っていった。俺はと言うと邪魔者がいなくなったとしか思っていなかったから、笑みを浮かべ

ながら再びパソコンの前に座った。

「おっ！。こんな動画なかったぞ！、早速落としておかないと…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「全く、許せないわね」

その頃俺の部屋の前の廊下では、布仏さん、鷹月（たかづき）さん、谷本（たにもと）さんのいわゆる３人組と呼ばれている人達が俺の部屋の中を盗み聞きしていた。布仏さんをここまで酷い目に遭わせた（これが早速始まった偏った見方の一つだ）として俺の評価は一気に下がったようだ。

「どうする、幾ら甃井君とは言っても…」

「もう甃井で十分でしょ？」

「こら癒子（ゆこ）、そんな風に言ったら失礼でしょ」

癒子というのは谷本さんのことだ。

「だってさぁ…そうしてあげないと、本音が可哀想じゃない？。幾ら女嫌いとは言ったって、あぁやって感情むき出しに話されたら、泣きたくなるわよ」

「だったら本音の思ったことをまず聞かないと」

この鷹月さんというのは２人を統括する役割を担っている。いわゆるリーダー格だ。

「私は甃井君は確かに酷いこと言ったかもしれないけど、嫌いじゃないよ」

「えぇっ！、どうして？」

「どことなく意地を張ってると思うんだよね。何て言うかはよく分からないけど、それに、私たちが嫌いな理由もちゃんとあるって言ってたし」

「本音がそう言うならそれでもいいけど…とにかく私は許せない！」

谷本さんは強めにそう発した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あらら、エラーか…」

そんな事も知らずに俺はのんびりをパソコンで動画を見ながらお茶をすすっていた…。

20話　修正

布仏さんなどが戻っていった後、すれ違うようにして織斑が俺の部屋にやってきた。

「おぃ甕井」

「ん？」

何だか様子が違うような気が俺には感じた。どことなく不安そうな顔をしている。

「ちょっといいか？」

「ん？。なんだい？」

「さっきさ、そこで布仏さんとかに会ったんだけど…」

「あぁ、俺もついつい言い過ぎちゃったね…反省してるよ」

「そっか、布仏さん自体は気にしてないようなんだけど他の…」

それから俺はいろいろなことを聞いた。実は他の人が外で盗み聞きをしていたこと、今後の俺の見方が変わるであろうということ…。

「どうするんだ？」

「何が？」

「このままじゃあお前この学校にいられなくなっちまうかもしれないぞ」

確かに織斑の言うとおりである。この学校で女子を敵に回すというのはまさに死を意味する。だけども今までこんな風に歪んで生きてきた俺、これを治していくのにはいろいろとエネルギーが必要だろう。やれやれ…つくづくこんな学校に入学したことを後悔するよ。本当なら、今頃は鉄道学校で自分の好きな勉強をしていずれは自分の好きな仕事にありつけると思いながら頑張っていたはずなのに…。

「さてと、腹も空いてきたしこの後は食堂に行って話さないか？」

「いいよ」

俺達は食堂に向かった。その後もいろいろなことを話したのだが結局最終的には俺が何とかするという結論に至った。これにはデュノアも同席していていろいろ話をすることが出来た。

「ふ～ん、甚井にもそう言う過去があったんだね」

「そうなんだよ。だから今のこんな風になっちゃってことなんだ」

デュノアもお察しがいいのかはわからないが、だいぶ俺の性格が歪んでいることに早くも気がついた。大体、女子と会話を好まないような素振りをし続けていたから当然と言えば当然なのかもしれないが。

「とりあえずはまぁ…箒だな」

「篠ノ之さんか？」

「あぁ、あいつならきっと大丈夫さ」

「そうか…」

”まぁ、織斑達が協力してくれるみたいだったら大丈夫かな?”

「あっ、一夏」

「よぉ鈴!。一緒に食べるか?」

「えっ?」

俺を見る凰さん。どうやら俺がいなくなればいいようだ。

「織斑、それじゃあそういうことだから…明日からよろしくな」

「おぅ!」

「おやすみ甚井」

「皆さんも」

俺はそう言うと凰さんを見ずに食堂のドアの方に直行した。その後何か話をしていたようだが俺には分からない。

帰りの廊下は結構緊張した。クラスでも定評がある布仏さんに酷い目を遭わせたんだ…俺が。だから復習されるなんて事もあったりするかもしれないわけで…なんて思っていると誰かが来るようだ。

「それでさぁ、登井にはどういう風に」

「そうねぇ…とりあえずでっち上げとか？」

どうやら自分の想像していたとおりだった。でっち上げ？、これには気にくわない。

「正々堂々と出来ないのか？」

俺がいきなり前にでると、俺の話をしていた鷹月さんと谷本さんは驚いた。噂をすれば影というのはまさにこのことだろう。

「あっ、アンタ…よくも本音に向かってあんな事を…」

「酷いことを言ったって言うのか？」

「当たり前じゃない！」

「本音に謝りなさいよ…」

しばらく口論になりそうだ…。

21話　もう一度

久々に自分の電圧…いやボルテージも上昇した。まさに中日時代の星野監督のようだ。何でもかんでも相手の言い分が自分の考えを否定しているように聞こえて腹が立ってくる。まぁ確かに俺が悪くないわけではない。それは否定しないでおこう。だからとは言っても彼女(こいつ)らの言い方ときたら…

「ねぇ、わかってるの！」

「そうよ！。本音がどれだけ可哀想だったか、アンタなんかに邪魔者扱いされたらこっちがやってられないわ」

「ほぅ、お前等自分がそんなに可愛いと思ってるのか？。俺からすればなぁ、てめぇらの‘美しさ’なんか外見上だけ。所謂(いわゆる)、見た目だけよけりゃあ何でもいいってやつさ。自覚症状がないのは怖ろしいもんだねぇ…」

その時である。俺がそう言うと谷本さんが俺の胸ぐらを掴んだ。今にも殴りそうな顔をしている。

「アンタなんか…アンタなんか…」

「殴れるもんなら殴ってみろ。悪いけどなぁ俺は女に暴力をふるうほどまだ落ちぶれてはいないぞ。殺したいなら殺せ！、覚悟があるんだったらなぁ！」

俺がそう一喝すると

「ちょ、ちょっと癒子！！。聳井君も止めて！」

と鷹月さんが止めに入ってくれた。さっきから見ているとどうも吠えているのは谷本さんで鷹月さんは文句こそ言うものの吠えているとまでは行かず、あくまでも冷静な判断力までは失っていないようだ。

”持つべきものは友人…って言葉、谷本さん理解してないんじゃないかな？”

俺は心の中でそんな事を思いながら制服の胸回りをただした。すると…

「ねぇねぇ、あっちの方で声がしなかった？」

「そうですわね、行ってみましょうか鈴さん」

と凰さんとセシリアさんの声が聞こえた。これ以上他の人に会うと、人数的に圧倒される。女子の修正の一つと言っていいだろう。

‘数で圧す’

のだ。俺はその場から立ち去ろうとした。

「逃げるの？」

「…」

「ねぇ！、聞いてるの！」

「逃げと思うか…作戦と思うか、それはお前次第だろ?。アンニョンヒ・チュムッセヨ（おやすみなさい）」

俺はそう言い返すと部屋に戻っていった。間もなくして谷本さんと鷹月さんのいる場所、即ち(すなわ)ほんの数十秒前までいたところに凰さんとセシリアさんが到着した。

「どうしたのですか?。こんな夜分遅くになにやら大きな声で口論をしていたようですけど…」

「聞いてよ!。聳井がね…」

「聳井って…一夏と一緒にいる男子だよね?」

「そうそう、その聳井が…」

「ちょっと癒子、それは言わなくても…」

「ダメダメ。あいつを懲らしめるにはこうするしかないわ…それでね…」

「うん」

「はぁ…」

15分ほどそれからなにやら話をしていたようだ。

一方、俺はと言うと部屋にはとっくに戻りとあるポスターを李承?選手のポスターの脇に貼った。

「これをここでも使うとはなぁ…」

そのポスターというのは、社会主義の国でよく見られる所謂プロパガンダポスターのようなもので

”Ａｇａｉｎ！，？？？　？？！（漢江（ハンガン）の奇跡をもう一度）”

と韓国語で書かれているものであった。１９６０年代、朝鮮戦争の甚大な打撃を被った韓国は世界的にも貧しい国の一つであった。今では考えられないだろうが、隣国の北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国の方が当時のソ連の協力による五カ年計画のもと、復興を遂げていたのだ。それを由とは韓国人も思っていなかった。そして、それがもっとも強かったのが大韓民国第５～第９代大統領の朴正熙（パクチョンヒ）であった。旧日本軍の陸軍士官学校を首席で卒業した彼は、韓国を軍事政権下に置くことに成功し北朝鮮を真似た五カ年計画などを行い、１９６１年から１９７９年まで暗殺されるまでの実に１８年もの間、大統領の座にあり続けた。だが彼が行った五カ年計画などのおかげで京城（ソウル）と釜山（プサン）をつなぐ京釜（キョンブ）高速道路などの開発に成功し驚異的な経済発展を遂げることができた。これを韓国の人々はソウル市内を流れる川の漢江（ハンガン）をもじって‘漢江の奇跡’と呼ぶのだ。

それではどうしてこんなポスターがあるのか。その理由は中学校時代までさかのぼる。俺の友人であって過去にも中学では女子から酷いいじめを受けていた朴達や成績が芳しくない人々を救うために、俺や成績の優秀な友人達が協力して彼等の学力を女子が対抗することの出来ないようにとの想いを込めて、放課後や朝早くに勉強を教えたのだ。その甲斐もあって終（しま）いには女子に圧倒的な差をつけることに成功したのだ。これがこのポスターの作成理由の大きな一つでもある。ある日俺が朴に個別で数学を教えていたときのことだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そうそう、ここをその後は因数分解して…そぅ！、Ｖｅｒｙ Ｇｏｏｄ！！」

その時である。朴は急に鉛筆を手から置いた。

「どうしたんだ？」

「甃井は漢江の奇跡って知ってるか？」

「うん、韓国の経済発展のやつだろ？」

「そっ。俺達に何だか似てないか？」

「ほぅ、どこが似てるって言うんだ？」

「なんかさ、お前達のおかげで俺達の学力をここまで上がった。まるで漢江の奇跡そのものじゃないか？」

朴の行っていると事が徐々に俺にも理解出来た。確かに経済発展を学力向上と置き換えれば確かに俺達のやっていることはそういうことなのかもしれない。

「Ａｇａｉｎ！，？？？　？？！（漢江の奇跡をもう一度）、ってところか？」

「ははは。その通りだな」

「よし、まだまだ奇跡を起こすぞ！。朴だけにとどめたくないな」

「俺も頑張るよ！」

「よし！、それじゃあ次のページだ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

と、こんなエピソードがあって最終的には俺がポスターを作ることになったのだ。それが今自分の部屋に飾られてあるやつというわけ。

”よし、見てろよ…本気出してやっからな…”

俺はそのポスターを見ると、久しぶりに勉強をした。復習というのは分からないところが多々出てくるから非常にいい。

「これは…こう因数分解しておけばいいかな？…おっ、合ってる！」

そう独り言を呟いたとき不意にドアがノックされた。

「どうぞ！」

「おぅ、二人とも…」

俺がそう言うと外からはデュノアと織斑が入ってきた。

「甃井」

「ん？」

「大丈夫なの？。さっきから女子が相当甃井のことで何かを話して

いたよ」

「本当か織斑」

一応デュノアを疑うというわけではないが織斑にも聞いてみた。

「あぁ。布仏さんを泣かせたとか言ってたかなぁ…」

「ふぅ、やっぱりでっち上げられてるな…」

「えっ、どういうこと登井？」

「聞かせてくれないか？」

俺はそれから男子二人に今日のさっきの出来事全てを余すところなくぶち開けた。布仏さんが俺の部屋に入ってきたこと、俺が追い払ったこと、その時布仏さんは泣いてなかったこと、食後部屋に戻ろうとしたら谷本さんが俺の胸ぐらを掴んだことと全てを…。

「そんなことがあったんだ。ボク知らなかったよ」

「無理もないぜ。俺も知らなかったんだから…」

「ごめんな、二人には迷惑をかけないように何とかするから俺のわがまま…許してくれないか？」

俺がそう訊くと

「勿論だ。頑張れ」

「ボクもだよ…だけど、気をつけてね」

と二人は俺を支持してくれた。本当に持つべきものは友人だ。

「ありがとう…二人とも」

俺は心から二人にお礼の意を込めてそう言った。さてと、これから戦いの日々が始まりそうだ…。

22話　New　Face－3

翌日、俺が教室に向かうと早速制裁は始まっていた。俺の席は偉く汚されているようだ…まぁいじめの常套手段と言えよう。やれやれ…考えることが幼稚なんだから…。そんな事を思っていると聞こえてくる女子のひそひそ声、まさにいじめである。

”織斑君とデュノア君はかわいそうだけどねぇ。でも甦井の所為だし…（ヒソヒソ）”

”そうそう、甦井をって言う大義名分だし…（ヒソヒソ）”

いつも通りスマートフォンで昨日の野球の試合結果をチェックしながら席に着こうとした…が、一応調べてみた。すると…ささやかなことに俺の座る椅子には、２つ３つ画鋲が天井に梁を向けて鎮座していた。これはどちらかって言うと手の込んだ悪戯に過ぎない。

「おはよう、い・し・い・く・ん。私たちを怒らせるとこうなるって分かったでしょ？。ほら、さっさと謝ったら？。今なら土下座でもしてくれれば許してあげるけど」

早速谷本さんが一番に俺のところに来てそう言った。一応言っておくと織斑とデュノアもこの時点で、セシリアさん、凰さん、篠ノ之さんと一緒に教室に入ろうとしていたようだ。だがこの空気の中自分の席に向かうだなんて…無理だろ。

”おっ、織斑とデュノアだ…申し訳ないな、とりあえずこの女をどうにかどかさないと…”

「お前が画鋲をやったのか？」

「そうよ。もっとやって欲しい？」

「いやぁねぇ…人の胸ぐら掴むぐらいのアホさだからやっぱりお前かって思ってさ。次はナイフで刺されるかもね…俺がお前さんに」

さすがにこれには耐えられなかったようだ。

「な、何ですって…」

「聞こえなかったか？。お前なら俺を刺殺することぐらいチョロいだろ？」

とうとう堪忍袋の緒が切れたようだ。前にもセシリアさんがしたように俺の机をバンと叩いた。

「ふざけないでよ！。何なのアンタ？。まるで私が人殺しみたいな言い方しないでよ」

「だってそうだろ？。あんな形相で昨日胸ぐらを掴まれたのに…淑女とでも俺が言うと思うか？」

すると、昨日と同様に谷本さんは俺の胸ぐらを掴んだ。

「そうそう、その目だよその目。怒り狂って今にも人を目の前にナイフがあったら刺すことが出来るであろうその目さ…」

「よ、よくも…」

その時である。丁度1時間目の鐘が鳴った。この後は担任の織斑先生の座学の授業だからばれたら二人とも怒られてしまう。谷本さんは不服そうな顔をして席に戻っていった。すると入ってきたのは山田先生だった。その後に次いで織斑先生と…なにやら左目に眼帯をつけた見かけない女子が入ってきた。怪我もしくは虹彩異色症(オッドアイ)だろうな。

「ドイツから来ました。ラウラ・ボーデヴィッヒさんです！」

山田先生の喜び方とは裏腹にラウラさんは黙りこくっている。だが

「ラウラ、自己紹介をしてくれ」

と織斑先生が言うと

「はい、教官！」

と力強く答えた。

「なぁ織斑。あいつ、織斑先生のことを教官って言ってたけど？」

「あぁ、千冬姉は少し前にドイツでＩＳの操縦指導をしていたんだ。多分その時に出会ったんじゃないかな？」

「なるほどね…」

俺達がヒソヒソと会話をしているとラウラさんは

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

と一言言うとまた黙ってしまった。この沈黙にとうとう耐えられなくなったのだろう、山田先生が

「あの…終わりですか？」

と尋ねた。

「終わりだ」

「そ、そうですか…それではラウラさんには一番後ろのデュノア君の隣の席に…」

と言っているそばからラウラさんは自分の席と思っているのだろう、その空いているところに向かった。と、思えたのだが意外な事に織斑の前にラウラさんは立った。

「貴様が織斑一夏か…」

「あっ、あぁ…そうだけど、なに…」

”パァン！！”

その時である。威勢のいい乾いた音が教室中に響き渡った。そう、ラウラさんは織斑に強烈な平手打ちを一発お見舞いしたのだ。織斑も他の生徒も、山田先生も呆然としている。俺は別にこう言った場面は中学の時に自分も経験したことがあるから何とも思わないが…。

「認めない。貴様があの人の弟だなんて…」

どうやらラウラさんは織斑先生のことを心から尊敬しているようだ。

”ふぅ…いろいろこの学校には転校生(かわりだね)が来るんだねぇ…”

俺は既にスマホで鉄道のニュースを読み始めていた。退屈で退屈でしょうがなかったのだ…。

「へぇ、またオーバーランか…って、あらら?」

いきなり目の前が暗くなった。見るとラウラさんが今度は俺のも前で直立不同な状態でいた。

「アンニョン・ハシムニカ（こんにちは）。チョウム　ペップケッスムニダ（初めまして）」

と韓国語でふざけて挨拶をすると俺にもラウラさんは

「貴様が聳井亮悳か?」

と聞いてきた。

「いかにも、私が聳井亮悳ですが?」

「ほぅ、貴様か。イギリスの代表候補生に挑んだというのは」

「随分とお詳しいようで…よっぽど暇人なんですね…」

「くっ!!」

ラウラさんはまたまた俺に平手打ちをした。だが今度はこっちの勝ちだ。

「なっ、何?!」

「う～ん…125キロくらいかな?」

俺はラウラさんの平手打ちを手で受け止めたのだ。

「ふ、ふざけるな!。貴様、覚えておけよ…」

そう言うとラウラさんも自分の席に腰をかけた。やれやれ、まだまだ1時間目なのに…。

23話　仲直り?

やっとの思いで1日の学校授業が終わった。朝っぱらからラウラさんには危うく平手打ちを喰らいそうになったし、その後は例によって谷本さん達とのにらみ合いの連続…

「ただいま…ふぅ」

部屋につくやいなや早速俺はベッドに飛び込んだ。疲れ切ってもう何もしたくない気分だ。昨日の一件以来、織斑とデュノア以外は誰も俺に話しかけてこない。中学より男子の生徒数が少ないからこれは結構しんどい。とは言っても、自分の持っているものが特殊なんだから恨みようもないし…どうすればいいんだ?。

「失礼するぞ」

「あぁ、織斑先生」

「お前に話がある」

「昨日のことですか?」

部屋についてのんびりしていると織斑先生がやってきた。話の内容は上の文章が物語っているように昨日の一件だ。

「なるほどな、大体は分かった」

「そうですか」

「確かに胸ぐらを掴まれた…というのは指導の必要がありそうだな」
俺がそれを聞いてニヤッとすると急に織斑先生の態度が変わった。
「だが、お前にも責任はあるぞ」
「はい？」
「お前が腹が立ったというのはこちらも分からなくもない。だからといってお前の発言は殆どが暴言じゃないか」
「売り言葉に買い言葉ですよ」
「馬鹿者！」
織斑先生はそう俺に一喝した。そして、このままではクラスの輪が乱れてしまうと言うからすぐにとは言わないが仲直りをすることを命じられた。これは任意ではなくて強制だそうで、もしこれに従わない場合は…退学だとか甘いことではなくて先生の直接の指導なんだそうだ。織斑先生の直接の指導と言ったら鉄拳しかないだろう。仕方がないから俺もそうすることにした。
「…わかりました。それでは近いうちにそう出来るように努力します」
「お前…近いうちにと言うのは？」
「今月一杯です」
「わかった…今月中にだな？」

「えぇ…」

「それじゃあ頼んだぞ」

「はいはぃ…」

「はいは一回だ！！」

「すいません…」

そう会話を交わすと織斑先生は部屋を出て行った。でも今月中に仲直りをするとしたらどうすればいいのだろうか？。今日は金曜日だけど、明日明後日は学校がないから俺は出かけるだろうし何か糸口でもあればいい…いやいやあいつ等がそもそも悪いんだから織斑先生を裏切る訳じゃないけど俺から謝ること何てするつもりはない。

「聳井、晩ご飯食べに行こうって一夏が」

「わかった。先に行っててくれ」

デュノアもやってきたことだし、晩ご飯に行くか…。

24話　Reunion（前書き）

今日の試合で李承?選手が4号ソロホームランを放ちました。

24話　Reunion

今日は待ちに待った休日だ。だけど俺はこんな狭い寮にいるつもりは更々ない。今日は中学の野球部の仲間達のOB戦があるのだ。これに俺が参加しないなんて事は…あり得ない。というわけで俺は早速着替えを済ませて平塚駅に向うことにした。言っておくがまだ朝の7時前だ。こんな休日の朝早くに起きているなんて寮長の織斑先生と俺ぐらいしかいないだろう。少なくとも他の生徒はまだ寝息を立てるなり夢の中なりだ。

昨日のうちに外出の許可は下りていたが一応織斑先生のいる寮長室に向かった。

「失礼します」

「おぉ。聲井か、おはよう」

「おはようございます。今日は外出をすると昨日のうちに…」

「あぁ、わかっている。久しぶりに中学の友人に会うとは言えども羽目を外しすぎないようにな」

「心得ています」

「よし。気をつけて行ってこい」

「はい！！」

俺は心を躍らせながら学校の寮を出た。

”あれ、あの人っていうか、聳井じゃん。こんな朝早くにどこ行くんだろ…”

「ちょっと鈴さん！。カーテンを閉めて下さいまし」

「ねぇねぇセシリア。あれ」

「あれって…あら、聳井さん。こんな朝早くにどこに行くのですかね？」

「さぁ…」

この時俺はセシリアさんと、凰さんに見られているとは思いもしなかった。言い忘れていたがこの間編入してきた凰さんは調整の結果セシリアさんと同室になったんだそうだ。それで織斑は篠ノ之さん、デュノアはラウラさんとそれぞれ一緒になったんだそうだ。そんな事は今はどうでもいい。とりあえず俺は一路平塚駅に向かった。

ところで、この学校の生徒並びに教員には国会議員のように全国の鉄道パスが与えられている。しかも新幹線ならこの間出来た東京（とうきょう）と新青森（しんあおもり）を結ぶ「はやぶさ」のグランクラスも乗車が可能なんだそうだ。勿論大都市圏の通勤電車についているグリーン車にも乗車は可能である。だが俺は敢えて使わない。帰りに取っておくのだ。行きも帰りもグリーン車なんて学生の分際であまりにも贅沢すぎる。

「グリーン車じゃなくてよろしいですか？」

「はい」

「かしこまりました…それではこれが平塚～東京間の乗車券でございます」

「どうも…」

唯一のこの鉄道パスの欠点はいちいち窓口で切符を発行して貰わなくてはならないことだ。俺はそれなりに重たいバットケースと鞄を右肩に担ぐと乗車券を持ってホームに向かった。

「おっ！、ラッキー！」

運良くホームに滑り込んできたのは２１１系０番台と俺が東海道本線の中でも１，２を競う好きな電車だ。後他に好きなのは３７３系というもう少し西の方に行けばよく走っている特急車両だ。おっと、そんなことはどうでもよかった。ガラガラな車内の適当な席に俺は腰を下ろすといつも肌身離さず持っているスマホで昨日のナイターのチェックをすることにした。

”おっ、李承?又ホームランか…嬉しいなぁ。えっと韓国では…まぁいろいろ今週もあるみたいだ”

気がつくともう大船を過ぎて横浜に近づこうとしていた。周りの席も幾ら休日とは言えそこそこ混み始めてきていた。

”少し寝るか?”

俺はそう心の中で自問自答すると、暫くの間眠りに就いた…。

「お客さん、お客さん。終点ですよ！」

結局というか…案の定というか、終点の東京駅では駅員に起こされた。何とも恥ずかしい思いを朝からしたものだ…。

その後俺は更に地下鉄を乗り継いで9時過ぎには中学のグランドに辿り着くことが出来た。もう朴も来ていた。

「よぉ朴！」

「あっ、甕井じゃん！」

「わざわざ大邱（テグ）からやってきたのか？」

「父さんの出張についてきてさ…帰りは別々だけどね」

「へぇ…」

それから他のメンバーも続々とやってきた。早速試合は始まった。

「3番、一塁…李承？！」

おふざけで、そう自分で大声でコールしながら打席に俺は入った。第一球ものの見事に空振りにさせられた。

「スンちゃんは三振か？」

ベンチからのヤジに

「なわけないだろ！」

と言い返す俺。すると次の瞬間俺の打った何球は鮮やかにライトの

外野の奥の俺達がラッキーゾーンと呼んでいるところに入った。無条件でホームランだ。俺は嬉しくて嬉しくてしょうがなかった。

「うーしっ！！」

俺はホームベースにそう雄叫びを上げながら到着した。ベンチに戻るとみんなと俺はハイタッチをかわした…。

結局この試合は俺は４打数３安打、１ホームランと炸裂することが出来た。

「いやぁ、甕井のパワーには負けるよ。さすが李承？の打法だけあるな」

「なぁに、今度は俺が勝さ」

「言ってくれるねぇ…負けないよ俺も」

「「「ははは！！」」」

みんなで仲良く笑い合った。その後俺は朴と一緒に地下鉄を乗り継いで再び東京駅に向かった。今日はこれから朴も帰るのだそうだ。だが飛行機の関係で今日は京城（ソウル）市内に停まって明日の夕方には大邱に着くんだそうだ。

「おや？」

地下鉄からＪＲの連絡口の間で俺達は泣いている小さな男の子を発見した。

「お母さ～ん」

と韓国語で泣きながら叫んでいる。きっと迷子だろう。

「朴…」

「うん。いいよ」

俺達はその子の方へ向かった。

「お前、どうかしたのか？」

「迷子かな？」

「あれ？。お兄ちゃん達、僕がしゃべってること分かるの？」

「まぁね…どれ、とりあえず駅の係員のいるところに行こう。そうすればもう大丈夫だよ」

「本当！？」

俺がそう言うと、そのことも泣くのをやめてそう訊いてきた。

「勿論だよ。ところでお前さんの名前は？」

「ウンヒョク…イ・ウンヒョクって言うの」

「ウンヒョク君か…なぁ朴、どっか出来いたことないか？」

「あったようななかったような…」

「まぁいいや。とりあえず窓口に…」

俺はそのウンヒョク君を連れて待合室に向かった。

迷子のご案内が流れてから１０分くらいするとお母さんと思われる人がやってきた。見るからにかなりの美人だ。

「ウンヒョク！」

「お母さ～ん」

そう言いながらウンヒョク君は母親に飛びかかった。愛くるしい光景だ。俺も朴を目を遭わせて自分たちのやったことが間違っていなかったと理解し合った。

「このたびは…助けていただいて…」

「いえいぇ…」

「困ったときはお互い様ですから…」

俺も朴も口々にそう言い返す。

「君たちが僕の息子を助けてくれたのか！」

見るとそこにはお父さんの姿…が?！

「あ、あなたは…李承?選手！！」

「ど、どうしてここに？」

今度は俺も朴も驚いた。まさか自分達が助けてあげた子のお父さんが野球選手だなんて…しかも韓国の国民的英雄だなんて…。

「明日からロッテとの三連戦があってね…昨日と今日は雨天中止だったから今日は先にこっちに来てたんだよ。息子と妻が野球を観に来るって言うし…それで東京駅に来たらこうなったってわけさ」

李承？選手が自分たちにそう説明してくれるだなんてまさに夢のようだ。

「あ、握手して下さい！。それからサインも！！」

「お、俺も！」

俺達の依頼に快く李選手も答えてくれた。すると俺がサインを書いて貰うために生徒手帳とバットを差し出すと

「君はもしかして…ＩＳの操縦者かな？」

と聞いてきた

「えっ、ええ！。どうしてそれを？」

「有名だよ。君たちの成績はかなりいいんじゃないか。これからも頑張ってね」

「は、はい！。ありがとうございます」

最後に俺は李承?選手と連絡先を取り合って別れた。いやぁ…事実は小説よりも奇なりとはまさにこのことなのだろうか…?。

羽田で朴を見送ると俺は急いで平塚駅を目指した。帰りはいちいち浜松町(はままつちょう)に戻るのが面倒だったからとりあえず羽田空港発の高速バスで横浜駅に向かい、そこから電車に乗り換えて帰った。

「ただいま戻りました!」

つくやいなや早速寮長室に向かった。

「おかえり。今日はよくやったな!。教え子として誇りに思わせて貰うぞ」

「えっ?」

俺まだその時は気がついていなかったが。オリックスからお礼の連絡が直接あったんだそうだ…。

２４話　Ｒｅｕｎｉｏｎ（後書き）

ここで作者の直通特急からご報告がございます。この度作者が本当にスマートフォンに機種変更いたしました。これと同時にｔｗｉｔｔｅｒを始めさせていただきました。ＩＤはＣＣＰ＿Ｔｕ＿１４４です。よろしければどうぞフォローしてください。ただここで小説を書いていることは作者の周りには発表しておりませんので、新作を投高いたしましても基本的にｔｗｉｔｔｅｒにはツイートいたしませんので予めご了承ください。

それでは今後ともよろしくお願い申し上げます。

追伸：機種変更したスマホは　ＮＴＴ　Ｄｏｃｏｍｏ　ｇａｌａｘｙ　Ｓ２（ＳＣ－０２Ｃ）です。

２０１１年７月１日

作者　直通特急

25話　半島（前書き）

今日のオリックスは劇的なサヨナラ勝ちでしたね！！

25話　半島

昨日の奇跡的な李承?選手との出会いの帳尻あわせなのだろうか。今俺は凰さん、セシリアさん、篠ノ之さん、織斑、デュノアと会議という名で俺のこの間の事件に関することで話し合っている。さすがに俺の胸ぐらをみんなの前で谷本さんが掴んじゃったもんだから、黙っちゃいられない…と言うのが心境なのだろう。

実を言うと今朝は俺も部屋でゆっくりと休んでいた。と言うのも俺が確か…8時ぐらいに起きると外から谷本さん達の楽しそうな声が聞こえた。盗み聞きしたわけではないがどうも電車で出かけるとか言っていたので俺は嬉しく思いながら部屋でのんびりすることにしたのだ。この時間なら例の喝な番組もやってるしね…。

「これは喝だ!!」

”確かにね、ランナーが二塁にいるのに今のプレーはダメだろ”

素人なりにも自分で何が行けないのかを考えたりしながらのんびり見ていると突然ドアがノックされた。

”織斑とかじゃないと思うから無視してるか…”

今日は織斑達もゆっくり寝ているはずだと思いながら、テレビを見続けていた。だが…いつまで経ってもドアのノックの音が消えないしそれどころかノックがどんどん強くなっていく。終いには

「開けなさいよ!!」

「聳井さん。私ですわ、開けて下さいまし！」

と凰さんとセシリアさんの二人の怒った声。まぁべつにそこまで怖いわけではないけども…相手はＩＳの専用機を持っているからやろうと思えばドアをこじ開けることも出来るわけで…

「１０秒以内に出てこないとこじ開けるわよ！」

との凰さんの突然のカウントダウン。ドアぐらいと読者の皆様ならお思いになるかもしれない。確かに俺もドアが壊れるぶには構わないのだが織斑先生のげんこつが俺はイヤだ。

”しょうがねぇなぁ…”

俺はベッドから起き上がるとドアを開けた。カウントダウン的にはあと3秒というところだった。

「こんな朝っぱらから何のようだ…」

「うっさい！！。アンタあたし達をどれだけ待たせるのよ！！」

「そうですわ。淑女（レディー）を待たせる男なんて最悪ですわ！！」

「お前さん方がＬａｄｙとは…おっと、その後は言わないでおこう」

「うぅぅぅぅ」

凰さんは今にも怒り出しそうな形相で俺を睨みつけてくる。ボールでもおでこに当ててあげたい気分だ。

「さてと…何のようだ？」

そう俺が二人に聞くとようやく二人をも我を取り戻して俺にこう言った。

「今から食堂に来て！」

「一夏さんもシャルルさんもいらっしゃいますわよ」

詳細を聞くとどうも俺に関することで話があると言うことだそうで篠ノ之さんも一緒にいるんだそうだ。本当はこいつ等と話をするなんて真っ平御免だったのだが…織斑とデュノアに失礼だったから俺も仕方なく行くことにした。

ここの学校の食堂は営業時間でなくても原則良性なら誰でも自由に出入りが可能なようだ。入寮初日に織斑先生がここでは勉強会や雑談、交流の場としても十分活用出来るからそうするようにと言っていた気がするが俺には関係ないことだったし況してや俺は遠回りをして帰ってきたから疲れていてまともに話も聞いていなかった。と言うわけで今日はじめてこの食堂に食事以外の目的でやってきた。中に入ると大人数で座れる…何というかファミレスの見合席のようなところに座らされた。織斑達の隣に配慮して座らせてくれた…いやぁ、これぐらいは当たり前かな？。

「これで全員揃ったと…」

「おい、織斑、デュノア。今日は俺なんかしたかな？」

「実はな聳井」

「みんなに話して欲しいんだ。何で螯井が女嫌いなのかって…」

二人の言葉に俺は衝撃的な何かを受けた。

「何だ?。まさかの裏切りか?」

俺がそう聞き返すと織斑はすぐに反論した。

「そういうわけじゃない。お前もいつかはみんなに話さなくちゃいけないだろ?」

「まぁそりゃあそうだけども…」

「だから折角だし。みんなにも知っていて貰ってもいいかなって思って」

「なるほど…でもなんでこの人達にまで?」

「箒や鈴は俺が信頼しているからな」

「「一夏…」」

「セシリアにはボクが伝えたんだ。螯井のことなら大丈夫だと思ってさ」

「デュノアがか…まぁそれならいいか」

俺も納得せざるを得なかった。

「仕方がないなぁ…それじゃあ話すよ…」

俺はそう呟くとゆっくりと俺が今までの中学での経緯を話した。俺の話していることが全て事実と思うとみんなは信じられなかったのかもしれない。

「中学での経験が甕井には深く刻み込まれているという訳か…」

「友人をいじめた女子を甕井さんは許せなかったのですね」

「そういうことだよ。本当は俺だってそんな事をしたくはなかった。でも許せなかった…。ただただ朝鮮(ハントウ)出身と言う理由でいじめをする女子が許せなかった。だから…だから…」

俺も言葉が詰まってしまう。朴や李承?選手、そしてこの間のウンヒョク君や奥さんの顔が蘇ってくると尚更だった。

「でも…それはあまり私たちを毛嫌いするのと関係ないのでは?」

セシリアさんがまるで空気を読んでいないようなことを質問してきたが、確かにそれも間違ってはいなかった。

「確かにお前さんの言うとおりさ。全世界中の女性全員がそういうことをしないことはこちらも十分に承知している。だけどねぇセシリアさん。3年間もそう言う生活をしているとねぇちゃんとした判断力は失われるのさ。お前は、明日からアイルランド人と同室で生活することが出来るか?。それどころか自分のクラスにいるアイルランド人がいじめられているのを目の当たりにして止めることが出来るか?」

「そ、それは…」

「凰さんだって同じさ」

「な、何よ。私がそんな事…」

「じゃあ、どうしてあなたたちの国はチベットを独立させないで強制的にねじ伏せているんだ?」

「そ、それは…そんなこと言われてもあたしは別にチベットを嫌ってる訳じゃないし…」

「仮に凰さんはそうだったとしてもね、大多数の意見を勝手に正しいと思い込んじゃうのさ」

「そんなの屁理屈じゃない!!」

「だろうね。そう言う言い方も間違ってないと思うよ。だけど俺は今の考えを変えるつもりはないね。少なくとも布仏さんにはいずれ謝るだろうし、謝らなくちゃいけないと思う。なるべく早くね…」

そう言うと俺は不意に立ち上がった。

「聳井、どこ行くんだ?」

「部屋さ。何だか言えたらスッキリしたよ。みんなありがとう。久しぶりに女性に好感を持てたきがする…」

そう言うと俺は食堂を後にした。

「よくわかりましたわね。聳井さんの気持ちが…」

「あぁ。聳井があそこまで思っていたなんて…」

「きっと中学の経験がとてつもなく聳井を縛り付けているんだね」

「ボク達がそれを助けてあげないといけないのかもしれない」

「あぁ。シャルルの言うとおりだぜ。みんな、聳井をどうするかこれから考えよう」

「「「「うん」」」」

俺が部屋に戻った後もみんなは長々と話を続けていたようだ。

”李承?選手…俺、どうしたらいいんでしょうか?”

そう心の中で李承?選手のポスターに向かって語りかけると俺はベッドに倒れた…。

25話　半島（後書き）

さて、物語は急展開を迎えるのか？。今後にどうぞご期待下さい。

26話　Change?!

さてと…昨日はあのまま考え込んで眠ってしまったようだ。時計の針はまだ朝の4時半…とは言ってもいつもこの時間に俺は起きてるから、普通に起きられたと言うのが率直な俺の感覚である。顔を洗って歯を磨くと、俺はベランダに出た。朝日がようやく昇ろうとしていた。何とも言えない赤色のいい夜明けだ。他の人はまだ眠りに就いていることだろう。

”いぃ天気だなぁ…素振り行くか?”

自分の体にそう尋ねてみる。するとどこも問題はないようだ。寧ろ、バットを手に持つと体中に何かエネルギーのようなものが流れ始める。朝日のおかげでもあるのかもしれないね…。

外に出ると一層朝の新鮮さを味わうことが出来た。心地よい潮風と朝日、最高の練習場じゃないかな?。いつも通り俺はそれなりに走ってからそれなりにストレッチをして素振りを始めた。本当はTバッティング当たりしたいんだけどなにぶん俺の使っている金属バットは古いタイプのやつで…カキーンととてつもない大音量を放つものなのだ。俺にはこの音は気持ちのいい音なのだが野球に興味がない人からしたら迷惑な騒音に違いない。木製バットでも幾らか音はしてしまうからまだボールを実際に打つという練習には移行しない方がいいだろう。

「ふぅ…」

100回ほど振って小休止を5分というのを繰り返している。所謂インターバルだ。水ぐらいしか持ってきていないが潮風に芝生と来

たら寝転がるしかない。

”やばいなぁ…この気持ちよさ…”

俺がのんびり明るくなっていく空を見上げてそんな事を思っていると誰かがこちらにやってくるのが聞こえた。芝生で足音が分かるという算段だ。

「ボクだよ、鵜井」

「デュノアか…こんな朝早くにどうしたんだ?」

「鵜井こそ」

「俺は…野球の練習だよ」

「そうなんだぁ…ねぇ」

「何だ?。変な顔して?」

「ボクがもし男じゃなく女だったらどうする?」

俺はその一言に衝撃的な何かを受けた。

「な、何言ってんだお前?!」

俺のこの反応をデュノアは想定していたようだ。

「ボクの事嫌いになる?」

俺は返答に困った。仮にもしもデュノアの言っているとおり…いやいやそんな事はあり得ないはずだが…あくまでも仮にデュノアが女子だったら。俺は毛嫌いすることが出来るのだろうか?。だが更衣室で早着替えをしたりしていたのもそうすれば辻褄(つじつま)が合ってしまう。

「無理だね」

今度は俺の答えにデュノアが驚いたようだ。

「えっ?」

「一度男って思い込んじゃったからなぁ…今更変えるなんて無理だな」

「ふぅん…そうなんだ」

暫くの沈黙の後俺はケースの中にあるバットを取りだした。

「振れよ」

「えっ?」

「お前さんの国じゃ野球はマイナーだろ?。折角日本に来たんだったらやってけ」

「…うん!!。ありがとう!!」

まだまだ時間は午前5時になろうとしていたばかりであった…。

27話　Language

いつもの通り教室に着くと、またまた俺への攻撃は行われていた。

”ぉやぉや…”

今日は一段と激しく攻撃されているとようで、机の中に偽物のナイフが入っていた。大体見当はつくが…それにしても

「よくこんなもの見つけたなぁ」

と俺は呟いた。おもちゃのナイフとは言え、最近のおもちゃは値段の割にはとっても高性能に、高品質に出来ている。試しに自分の手の甲を歯のあるべき部分でなぞってみたが何も起こらなかった。と言うかこのナイフ…プラスチックに銀メッキをしたようなものだ。だから当然のことだが切れるはずもない。

「それ昨日１００均で見つけたの！」

谷本さんもなかなかやるもんだ。そろそろ俺も少しは注意しようかなって、思ったりもするがまぁいいかな？。

そんな事を思っているとチャイムが鳴り、１限の授業が始まった。谷本さんも自分の板席に戻っていったようだ。隣には織斑、デュノア、ラウラさんの順番で並んでいる。そういえば凰さんなのだが席を織斑の前に変更させて貰ったようだ。俺にはあんまり関係ないからいいかな？。さてと、今日の最初の授業は…日本語(こくご)だ。外人からしたら国語と言っても日本語ではないからこう呼ぶことにこの学校ではなっている。そういえば、例の一件で自分の前に座っている布

仏さんはいつも俺に怯えているというか、どことなくよそよそしくなった。関係を修復しておきたい…というかこのままじゃあ布仏さんが参ってしまいそうだ。しかも今日の授業は寄りにもよって近くの４人と意見交換をするんだそうだ。俺は織斑と目があった。織斑も何を俺が言いたいか理解してくれているようだ。

”織斑、俺寝てるから…”

”了解”

”ん？。一夏と蒐井なにをアイコンタクトで？”

「さてと、布仏さんは意見あるか？」

「え、私は…う～ん、この作者がいいたいのは…こんなことなのかな？」

「鈴はどう思う？」

「そうね、あたしはこのヒロイン役がいい味出してると思うわ」

「なるほどね…蒐井はって…」

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

「何コイツ、ホントついさっきまで起きてたのに」

「蒐井君は寝息を聞いてる方が多いかな？…でも、私がそんなこと言っちゃうと癒子達に又心配かけちゃうからあんまり大声では言えないんだけどね…」

俺がこの話を聞いてないわけがない。まだ3分ぐらいしか経っていないんだ、これで寝ようと思って寝られたら相当な才能の持ち主だろう。まぁ俺も5分くらいで寝ようと思えば寝られるけどね…。だけど3分は正直無理だ。

「ねぇ起きなさいよ!!」

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

「ねぇってば!!」

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

「鈴、聳井もきっと疲れてるんだよ。少し休ませてあげ…」

「ううううう」

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

「ふぁ、凰さ…ん?」

「あぁぁぁ!、もう。我慢出来ない!」

そう言うと凰さんは立ち上がって俺の机を思いっきり蹴飛ばした。俺も突然のことに少しビックリした。せっかく夢の中で韓国の野球を観ているところだったのに、しかもよりによってネクストに李承?選手が…あ～ぁ…

「夢がぁ…」

「アンタ、起きなさいよ！！」

「あなたのおかげで今起きましたけど…」

「そういうこと言ってんじゃないわよ！！。布仏さんとか一夏とかあたしの意見もちゃんとききなさいって言うの！」

周りはこの状況に困惑しているようで、黙っている…いや、ざわついているといった方がいいだろう。

「り、鈴。ひとまず落ち着け。なっ？」

「そ、そうだよ。みんな驚いちゃう！」

「全く。いい？。アンタ、次寝てる姿をもし私が見たら甲龍（シェンロン）でボコボコにするからね！」

「２４時間営業はヒトじゃ出来ませんよ？」

「授業中の話よ！」

「はぃはぃ…と」

それからは俺も仕方なく話しに参加することになった。まぁ俺は‘特に意見はない’とか‘織斑と同じだ’とか適当なことを言って誤魔化したが。言い忘れていたがこの学校の授業は基本的には２限連続で行う。つまりは後１時間ほどこんな事をやっていないといけないのだ。面倒というのもあるが、布仏さんとの関係がとてつもなく悪いから、なんだかぎくしゃくしてしまう。話もまともに続かない。

「俺は…だとおもうけど」

「ふ～ん…そうなんだ」

「アンタさっきから同じ事ばっか言ってない？」

「何だ、俺の意見に文句でもあるのか？」

「そ、そういうわけじゃないわよ…」

「なら気にするな」

「お、おい。聳井も鈴も…」

「あぁ、悪い悪い…次いこう次」

その後もこんな調子ではあったが何とか逃げ切った。ようやく日本語の時間は終わった。この後は体育なのだが

「いやぁあっついなぁ…」

「そうだね。ボクもへばっちゃいそう」

「織斑、デュノア、大丈夫か？。今日もソフトボールらしいけど無理すんなよ？」

「わかってるって、心配してくれてるのか？」

「ボク達のこと」

「当たり前だろ?。大切で少ない男友達なんだから…」

今日は4月にしては27度かなり暑い日だ。何も起こらなければいいのだが…。

28話　Ｈｏｔ

ソフトボールはやっぱり行われたが急な気温の変化に俺を始めみんなそれなりに苦労しているようだ。４月で２７度というのは俺もきつい。こんな中ソフトボールだなんて、本当にデーゲームでプレーをする野球選手は凄いと思う。

「暑いよぉ…」

「癒子、元気出して」

「何言ってんのよ。本音、あなたが一番心配よ」

「う～ん…」

織斑先生を恨んでいるわけではないが、俺と谷本さん達一行は同じチームにさせられてしまったのだ。他にいるのはデュノアと凰さんぐらいかな知ってる人は…。他はみんなあちらというわけだ。そう言えばラウラさんについてなのだが、どうも凰さんとセシリアさんを怒らせたらしくて、近々決闘を行うのだとか…代表候補生同士だから織斑にも誘われたこともあって俺も観に行ってみるつもりだ。おっとっと、今はこの試合のことだったな。

「ほ、本音！」

「う～ん？」

「さっきから相当汗かいてるけど、大丈夫なの？」

「へーきへーき…」

俺にもそんな布仏さんの声が聞こえてきたが、何だかいやな予感がする。これじゃあまるであの時と同じだ。

「デュノア」

「ん？」

「ちょっと頼まれてくれないか？」

「どうしたの？。鹵井がボクに頼み事なんて」

「用意しておいて欲しいものがあるんだ…」

俺はそうデュノアに頼み事をすると打席に入った。

打席に立ってるだけでも、じりじりと肌が焼かれていくのが分かる。だけど、この勝負は負けられない。何てったって相手の投手（ピッチャー）が織斑だから。今日はここまでの2打席とも連続三振に喫している。李承？のフォームの欠点を突いているのだろうか…低いボールは俺もあんまり好きじゃないのだ。

「へっ、アジアの大砲もそんなもんか？」

「言っとけ！、次は必ず打つわ！」

俺は有言実行だった。3打席目にホームランとまではいかないが、走者（ランナー）が3塁にいたから、タイムリーヒットを放つことが出来た。女子しかいないに等しい試合だからガッツポーズすら出来なくて少々

寂しいが…。と、その時である。

「本音！」

谷本さんの叫び声が聞こえた。みんなが駆け寄ったから俺もそっちの方に向かった。丁度この時織斑先生は職員室から呼び出されていて先生が不在だったのだ。どうやら俺の予想は的中したようだ。

「大丈夫？。大丈夫本音！」

「ぅぅん…」

顔が赤くなって足には若干の痙攣がある。明らかに熱中症だ。意外な事かもしれないが熱中症というのは必ずしも夏場に発生するものではない、過去には１１月に熱中症で死亡した例もある。どうして俺がそんな事を知っているのかというと、実は中学時代に部員…いや朴が熱中症でこのぐらいの時期に倒れてしまったのだ。その時は自分たちにはどうすることも出来ずにただただ救急車がくるのを待っているだけで何も出来な自分たちに憤りを感じた。だから、少なくとも応急処置はみんな出来るようにということで講習を受けたのだ。あっ、朴は病院に搬送された後は軽度と言うこともあってすぐによくなったから幸いではあったが…もし重度だったら、おっとそんな事を考えている暇は今はないぞ。幾ら対立しているとは言え、助けないと…。

「お前等、下がれ！」

「な、何言ってんのよ。本音を殺す気なの？」

「馬鹿なこと言ってんじゃねぇ！。今から助けてやるんだよ。デュ

ノア！」

「うん！。甕井の言ってたとおりにしたよ」

「よし。誰か先生を急いで！」

そう俺が言うと、女子の数名が先生を呼びに行った。こういうときもみんなで行くのか…いやいやそんな事考えている場合じゃない。

「さてと…末端の部分が冷たくなってて多量の発汗、かつ顔が赤くなってるそれに痙攣と…？度だな」

「な、何なのよその？度って。まさか！！」

「中度の熱中症だよ。このまま放っておいたら確実に死んじまうな」

「ぅぅん…」

谷本さんは今にも泣きそうな顔で俺に迫ってくる。

「お願い！、本音を助けて！」

「私からもお願いするわ。助けてあげて」

鷹月さんを筆頭にたくさんの人達がそう俺に言ってくる。まさか、野球部で培った経験がこんなところで発揮されるだなんて…。夢にも思わなかったよ。

「さてと…まずは水が飲めるか何だけど…おい、大丈夫か？」

「ぅぅん…」

「無理して何か言う必要はないぞ。水が飲める余裕があったら首を振ってくれ」

そういうと布仏さんは首を立てに頷いた。どうやら飲むことぐらいはまだ出来るようだ。さっきデュノアに頼んでおいたスポーツドリンクを飲ませる。

「織斑、ちょっと彼女を起こしてあげて」

「あぁ…よいしょっと」

「ほい」

「えっ？」

「俺がやるよりもお前の方がいいだろ？。やったれや、大切な友達だろ？」

俺は涙を流して心配している谷本さんにそう言って飲み物を渡した。

「ぅん…本音しっかりして」

「ぅぅん…冷たくて…おぃしぃ…」

「よし、意識がしっかりしてきたぞ。後はこれを脇の下と両首筋、それから足の付け根に…おっと、これも俺がやるべきではないな」

「わかってるわ。みんな、手伝って！」

当たりにいた人達みんなは谷本さんがそう言うと言われたとおりの行動をしてくれた。

「ふぅ…あとは保健室に運んでここの先生に診てもらえれば問題ないかな。やれやれ、腕がこの調子じゃあ明日は腫れちゃいそうだな」

そうこうしているうちに織斑先生と山田先生が駆けつけた。

「はぁはぁ…布仏大丈夫か？」

「中度の熱中症のようです。応急処置は現在も患部の冷却を継続中です。今すぐ保健室なり涼しいところに運んで安静にすべきかと」

「わかった。山田先生、担架を」

「わかりました！！」

そういうと山田先生は急いで担架を持ってきた。いやこれは担架じゃない…

「どうしてストレッチャーが？」

「この学園は医療機器の精度も他の学校に比べて圧倒的に向上されている。万が一ＩＳで負傷した事を考えてな。だからストレッチャーも当然配置されているというわけだ」

「なるほど…」

「みなさん！。布仏さんを持ち上げるの…手伝って」

「「「はい！！」」」

そばにいた谷本さんを始め数名が布仏さんをストレッチャーに移し替えた。早速先生は布仏さんを学校の保健室の方へと搬送していった。

「済まない。私が職員室にいる間に起こった事故だ。責任は私にある…」

「大丈夫です。自分の言葉にしっかりと応答出来ましたし、言語障害もありません。きっと問題ないはずです」

織斑先生もこれには相当ショックだったようだ。まさか自分の受け持ったクラスの生徒がこんな目に遭ってしまうだなんて、誰も予想がつくはずなかった。一応自分が応急処置をすることが出来たことを嬉しく思う。女嫌いだからって救える命をムダにしたくは俺だってない。それとほぼ同時に授業終了の鐘が鳴った。

「よし、それじゃあみんなは教室に戻れ！」

織斑先生のかけ声の下、俺達は更衣室に戻った。

「聳井、布仏さん大丈夫かな？」

「大丈夫だ。心配するな」

「でも…」

「デュノア、織斑。俺達は出来ることはやったんだ。きっと彼女な

らよくなる。心配するな…」

俺もそう言ってはいたが本当はとっても…とっても心配だった。自分の判断は適切だったのだろうか?。いや、仮に適切だったとしてもこの関係の中、会わせる顔なんてない…。

「いつまでしょげてんのよ!」

席についてため息をした俺に向かって凰さんはそう言った。

「アンタは出来ることやったんだからいいのよ!。後は布仏さん次第」

「まぁ…そうなんだけどさ…」

“全くもぅ、意外とコイツってこういうことには弱いのかもしれないわね…”

とりあえず夕方には見舞いに行くとしよう…。

28話　Ｈｏｔ（後書き）

主人公にも動きが見え始めてきましたね。みなさん、どうも作者の直通特急です。最近、更新が又不規則がちになってしまったこと深くお詫び申し上げます。ところでですが、私もいろいろな作品を参考にいたしまして本日は主人公の甕井さんを呼んでみることにいたしました。

甕「アンニョンハセヨ～」

直「いえいえ甕井さん、ここ韓国じゃないですから」

甕「すいませんすいません。ついつい…ところでオリックス最近好調ですよね？」

直「えぇ。私もとっても嬉しいですよ、なんと言っても？」

甕「李承？！！」

直「そうなんですよ～。私も大ファンでして」

甕「直通特急さんとは気が合いそうですね」

直「えぇ…さてと、この後お話はどんな風に？」

甕「さぁ…なるようになるさ」

直「ケセラセラ？」

甕「えぇ、その通りです」

直「ははは…さてと、それではこの辺で読者の皆様とはお別れです。甕井さんどうぞご一緒に」

直・甕「アンニョンヒケセヨ（またね～）～！！」

それでは今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

29話 When Time Ran Out

それから放課後…まぁ夕方になるまでは俺も安心して授業を聞けるわけがなかった。前に本来ならいるべきな布仏さんがいないと言うこともあるのだろう。どうにもこうにも落ち着かないのだ。

「聳井さん、大丈夫ですか？」

「あぁ…まぁ…」

「そんなわけないでしょセシリア？。聳井ったらさっきからずっとこんな調子よ」

「そうなのですか？」

「そんなところだな…」

いつもに増して、こんな有様。実は俺の父親は消防士だったりする。だからこういうことには厳しいのだ。

「ちょっと…」

そう言って俺は教室から出て行った。別に抜け駆けしようとしたわけではない。何となく緊張しているからか腹が痛いのだ。俺が教室から出て行くと織斑はみんなに向かって話し始めた。

「にしても聳井がここまで心配事を抱えてるのははじめてじゃないか？」

「そうですわね。女嫌いが顕著な聳井さんですから」

「聳井も意外と脆いんだね」

「鈴、誰だってそんなもんだ」

「おっ、箒がそんなこと言うなんて意外だな」

「そうか一夏？」

俺が戻ってくるまでそんな雑談をかわしていた。一方その頃俺は用を済ませて洗面所で手を洗っていた。

”助けたのを素直に喜べないなぁ…”

本当ならもっと嬉しく思えるはずなのにこの間邪魔者呼ばわりしてしまった自分がどんな顔で見舞いに行けばいいのか。まさに行きたくても行けないと言ったところだ。まぁ考えていても仕方がないからここは普通に行くしかないのかな？。

「ふぅ…よし！」

俺は自分に喝というか気合いを注入すると洗面所を後にした。だけど、やっぱり少しは心配かな…。

その後授業が終わると俺達はみんなに連れられて、保健室に向かった。

「いいっていいって…俺が行ってもどんな顔会わせればいいか…」

「うっさい！。アンタはいつも通りしていればいいの」

「お前なぁ…それが出来れば苦労しないんだよ」

「甲龍で痛い目遭いたい？」

「あぁもぅ！！」

「ひっ！！」

どうもやっぱりまだ女嫌いは治っていないようだ。一緒に女子といるとどことなく心の中がイライラしてくるのが自分にも明確に分かる。凰さんも俺が少し怒ったような態度を取ると一気に怯える。あんなに強気なのに何でなんだろうな…。

「それにしても登井さん。どうしてあんな事をすぐに思いつかれたのですか？」

「あんな事って？」

「登井、お前布仏さんを診てすぐに？度だったっけ？」

「そうだ一夏。登井、お前すぐに熱中症と判断出来た上に、どうして中度とまでわかったんだ？」

「あぁ…俺の中学の友達、この間俺が言った韓国に帰った在日の子なんだけどね。あいつが野球部の練習中に倒れたんだ。その時に自分たちに何も出来なかったって事が悔しくてね。こういうことなら知ってて損はないだろ？。だからみんなで講習を受けたんだ。おかげでその後、俺達の部からは熱中症になっても救急車を呼ぶまでに

かなりの応急処置をすることが出来るようになった。だから、みんな回復が早まったんだ」

「そう言う過去があったのか」

「まぁな。良かれ悪かれ、中学での経験は大きいから」

そうこうしている内に、どうやら保健室の隣の…病院で言うところの入院患者が過ごすような病室についた。入口には確かに布仏本音と書かれたネームプレートがついている。ここに彼女がいることは間違いないのだろう。

「アンタから入りなさいよ」

「そ、そんなこと言うなよ。どんな顔で入ればいいか、わからねぇよ」

「うっさい！」

「り、鈴さん。中で休んでいるかもしれないんですからお静かに…聳井さんも」

「入って問題はないだろう」

みんな俺にドアを開けて貰いたいようである。仕方がない…。

「失礼します」

ドアをノックして俺はそう言いながら病室に入った。するとどうやら布仏さんも起きていたようだ。脇には谷本さんと鷹月さんがいる。

見舞いの先客だろう。さっき教室から飛んで出て行ったから。当然と言えば当然のことだろう。

「あっ、来た来た!!」

俺が来たのを喜んでいることからして、布仏さんも十分に回復していると言うことは明白だった。何だかいつも通りののほほんさを、取り戻しているようにも感じた。席に座るように言われたので俺達はそうすることにしたのだが…読者の皆様にもご想像がつくように7，8人が一気に病室に来ると椅子の脚数が当然足りるはずもない。寄りにもよって後、一脚しかないという状況。そうなると俺が座るしかないだろう。と言うかそれが当然といった具合でみんなは椅子に座ろうとしない。俺が立ったままなのを見かねて凰さんが座るように布仏さんから見えない位置で俺の背中を突く。

”アンタが座りなさいよ!”

”凰さんの言うとおりですわ”

”甕井、座った方がいいんじゃない?。ボク達が少なくとも座るべきではないよ”

”甕井、座らないと剣道に付き合わせるぞ”

”お前が座るべきだよ。布仏さんの話聞いてやれ”

後ろを見るとみんながそんなことを言ってるような気がしたので、俺はしょうがないから、席に座ることにした。

席に座って同じ目線になってみるとやっぱりまだ日焼けして肌が

腫れているのが明確に分かった。俺もさっきから両腕がヒリヒリしている。相当酷い日焼けを俺も喰らってしまったようだ。

「どうですか？。その後は？」

俺はいつもの通り敬語で話す。さっきはついつい俺も気合いを入れていたからタメ口になってしまったが今は基本的に凰さん、セシリアさん、篠ノ之さん以外の女子には敬語だ。おっと、谷本さんにもケンカ売られたときは敬語じゃないか…。

「すっかりよくなったよ。聳井君のおかげだってさっきからずっと言ってるわ」

「そうですか、それは助けた甲斐がありましたよ」

「ありがとぅ…邪魔者って言ったから嫌われちゃったかなって思ってたんだ…」

「…」

俺が一番心配していたことを最初に言われてしまった。正直見舞いに行くのも複雑な気分だったのはさっきも言ったとおりだ。邪魔者扱いをしてしまった自分を非常に憎く思う。もしあんなことさえ言っていなければ、もう少し遠回しに表現しておけばこんな風にならなくてもよかったのに。俺だってそんな気持ちで一杯だった。

「だけど、わかったんだ」

「えっ？」

「私のこと…ホントに…邪魔なんだったらたすけ…ないもん…ね？」

あれ、どうやら布仏さんは泣いているようだ。

「聳井君が…女嫌いなのは知ってた。癒子が胸ぐらを掴まれても慣れてたみたいだし…」

「ま、まぁ中学でいろいろありましたから」

「そうなんだ…でも、嬉しかったよ」

「はい？」

なんだかぎくしゃくとしながらどことなく、気持ちがこもった会話が出来ているような気がする。こんな会話をすることが出来たのって小学生以来かもしれない。

「私…聳井君が助けてくれなかったら…死んじゃってたとおもう…だけど…嫌いだって、嫌いだって言ってたのに…助けてくれるなんて…」

「もういい。それ以上言わなくても十二分に俺にお前さんが言いたいことは分かる」

「うっ…うぅ…」

とうとう耐えられなくなってしまったようだ。布仏さんは泣き始めてしまった。だけど不思議だ。どこにも偽りのないスッキリしたような気分だ。中学の時には絶対に味わえなかったような感覚。なんなんだ?。俺は女嫌いじゃないのか?。女の涙ほど嫌なものは無い

って思っていたんじゃないのかと考えさせられているような気がする。

「それじゃあ…俺はもう不必要だな。後は体力の回復だけだろ？」

「え、えぇ…」

「それなら俺は戻るよ。お大事に…」

俺はそう言うと病室を出ようとした。他の人達の事なんて俺には知った事じゃなかった。だけど…谷本さんが

「待って！」

と俺を呼ぶ。

「なんだ？」

「どうして、アンタ…本音を助けてあげたの？」

「はっ？」

「だからどうして本音を…」

「あのなぁ…助かる命まで俺は奪うつもりはないんだよ。親父が消防士だからな…それじゃあな」

「あっ、ちょっと！！」

俺は廊下を走って寮の方に向かった。気がついたら本当には知って

寮の自室まで辿り着いたようだ。他の人達はどうやらみんなまだ布仏さんのいるところにいるようだ。

”俺…どうなるんだ?。自分に嘘をついてる訳じゃないのに…だけど、なんなんだよこの気持ちは…”

布仏さんを助けたことで俺の心には…いや、俺の女嫌いという黒く硬直した考え方は徐々に揺らぎ始めていた…。

30話　包帯

気がついたら朝だった。部屋に戻って制服から着替えて、考え事をしている内に気づいたら寝てしまっていたようだ。起きようとすると体に異変が生じているのが分かった。

「おっ！！」

両腕が真っ赤に日焼けというか熱傷（やけど）というか、腫れていた。昨日予想していたとおりのようになってしまったようだ。さほど問題はなさそうだが…いやいや大問題だ。この腫れ…制服の袖に直撃するからこれは痛いなんてもんじゃない。

”しょうがないなぁ、織斑先生のところ行くか…”

朝一から気が重たいが織斑先生のいる寮長室に向かおうとした。あっ、言い忘れていたが今は朝の４時半だ。眠さは残っていないから昨日はぐっすり眠れたようだ。

「失礼します」

俺は寮長室にノックをして入った。織斑先生はもう起きているようでジャージ姿でパソコンを開いていた。一見するとキャリアウーマンと言ったところか。

「どうしたんだ甕井?。こんな朝早くに」

「包帯ないですか?」

「包帯だと？」

「昨日日焼けしちゃって…」

俺はそう言うと両腕を先生の前に差し出した。いつ見ても赤く酷く腫れている。実はここに来るまでも多少ヒリヒリしていた。

「これは酷い日焼けだな」

「制服の袖に当たって痛くなるんで…」

「わかった。貸しておいてやるからホームルームの時間に私に返せ」

「わかりました」

そう言って俺は織斑先生から包帯と鋏、それから包帯止めにテープを貰った。織斑先生はここでは言えないがどうも不器用なようで料理だとかも織斑に任せていたとのことだそうだ。意外な一面だと俺は思う。さてと、包帯も貰ったことだし俺は部屋に再び戻った。

早速部屋に戻ると俺もパソコンを開いて昨日のメジャーリーグの日本人選手の動画を見ながら包帯を巻く作業に移った。

「イチローは2安打と…最近調子悪いなぁ」

そんな事を呟きながらも黙々と包帯を巻いていく。腕全体に巻かなくちゃ行けないからかなりの量だ。

「少し先の方は短くしておくか」

ほんの少しだけ腫れている部分が制服に当たってしまうが仕方がない。こうしておかないと腕に包帯が巻かれているのが他の人に知られてしまう。気がつくともう1時間も作業に熱中していたようだ。最後に確認がてら手を握ったりしてみたが問題なさそうだ。

「ん?。これは韓国の野球か…見る価値アリだな」

まだまだ朝は始まったばかりだった。

それから2時間近く経って学校に行くと今日は自分の席が攻撃を受けていないことに気がついた。谷本さんは終始こちらを伺いながらなにやら落ち着かない様子だ。

”う~ん、まぁいっか?”

今日は布仏さんも大事を取って一日休むとのこと。さてと、昨日のわだかまりもなくなったし今日もお見舞いに行くとするか。最近、なんだか女嫌いの俺も拒絶反応が少なくなったような気がするなぁ…。

31話　Ｓｅｎｔｉｍｅｎｔ　（前書き）

昨日の楽天戦で李承？選手が第５号ホームランを放ちました！！

３１話　Ｓｅｎｔｉｍｅｎｔ

学校の授業を終えて、俺はまた保健室の方に向かった。今日は先に本当に保健室に寄るつもりだ。今日は織斑と篠ノ之さんが剣道の練習、セシリアさんは部活、デュノアは先に部屋に戻って勉強をしたいんだそうで実質一緒に見舞いに行くのは偶々（たまたま）部活が休みになっている凰さんだけというわけだ。一緒に行くはずなのだが…どうやら先に行ってしまっているようだ。

「まぁいっか…おぉ、手が痛いな…俺も早く手当を受けないと…」

俺は急いで保健室に向かった…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一方その頃、既に凰さんは布仏さんのいる病室に到着し、既に布仏さんといろいろなことを話していたようだ。

「ふ～ん、今日はこんな事をやったんだ」

「そそ。それでね、この問題は…えっと、まぁ後で甃井が来るからその時に聞けばいいわ。あいつ勉強はかなり出来るから」

「そうなんだよね～。甃井君っていっつも授業中に寝てるけど、ちゃんと理解してるみたいだし。私たちにもちゃんと分からないところがあったら教えてくれるしね～」

放課後…まさにのほほんとした会話だ。これまた一方その頃俺は…

「イタタタ！！」

「あらぁ…相当酷く焼けちゃったみたいね。これを入浴後に丁寧に塗ってね」

「わかりました。包帯はもう？」

「必要ないと思うわ」

「そうですか…。ありがとうございました、失礼しました」

そんな感じで保健室の校医さんの手当を受けていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺がようやくな思いで病室の前に着いてドアを開けようとすると

「そう言えば凰さんってさ」

と中で布仏さんが言っているのが聞こえた。俺はすかさず隠れて見えない場所から二人の会話を盗み聞きすることにした。

「甃井君の話するとき、いっつも嬉しそうだね」

「えっ！？」

”はっ？！。おいおい、どういうことだよ…これは、夢か？”

「な、何言ってんのよ。あ、あたしは別に！！」

「くすっ、顔真っ赤だよ」

「なっ！！」

どうやらこの事は本当のようだ。でも、どうして俺の事が…その、好きなのか分からない。もう少し外で盗み聞きさせて貰おう。

「隠さなくてもいいよ…私も聳井君には感謝してるし大好きになっちゃったもん」

「あたしと同じなのね。あいつってさ…その、女嫌いとか言ってるけどあたしはそんなことないんじゃないかなって。だって、布仏さんを助けてたとき必死だったもの」

自分が思っていることとはだいぶ違っているような気もする。確かに俺は布仏さんを助けることにあの時は、必死だった。でもそれは、中学の時に同じような出来事を経験していて救急車を呼んで、でも自分たちには何も出来なくて、だから自分達で何とか出来るように思って勉強したのに。俺は、屋上に駆けた。下では部活に励んでいる人、遊んでいる人、雑談を交わしている人…といっても女子しかいないが、とにかく多くの人が楽しそうだった。なのに自分は、複雑な心境にパンクというか故障寸前だった。

”何でなんだ?。俺は女嫌いじゃなかったのか?。確かに中学の時は朴とかを苛めていた女子が憎かったはずだ。なのに、なのにだ…ここの人達はそりゃあ谷本さんとはケンカしたけれども…”

「結論が出せない…」

俺はボソッと呟いた。自分でも何を思い、どうすればいいのか全く

分からない。それと同時に自分がここまで脆かったと言うことの驚きに駆られている。だが、いつまでもこうしているわけにはいかない。はっきりとけじめをつけることにしようとこの時思った。だがすぐには出来るまい。何てったって未だに谷本さんとは休戦調停すら結んでおらず、それどころかまともに会話すら出来ないのだから。

”ゆっくり…時間をかけて結論を見つけるか…俺が本当に女嫌いなのかそうじゃないのか”

それがもしかしたら今の結論だったのかもしれない。‘始まりの序曲’とか言ったり世間ではよくするがそれに近いのかもしれない。つまり、‘結論のための結論’といったところだろうか。

「さてと…布仏さんへの見舞いがまだ済んでなかったな」

俺は再び自分の鞄を手に取ると布仏さんのいる元へ向かった。

「失礼します」

「あっ、聳井君!!」

「元気そうだな…」

「うん!。もうすっかりよくなったよ」

「そうか…それはよかった」

「座ってよ。少しお話ししよっ!」

「あ、あぁ…」

俺はそれから暫くの間、布仏さんと話をした。彼女の話を聞いてる限りだと凰さんは俺とすれ違いで先に部屋の方に戻って行ってしまったんだそうだ。俺の会話が自分でも驚くぐらいぎこちないというか緊張しているように感じる、こういう風に女性と面と向かって話をするのは今までに数えるぐらいしかなった気がするし、最後にそれをしたのがいつなのかすら覚えていないからだ。

「…おりむ～とは今も野球の練習したりしてるの？」

「あぁ。毎朝織斑が来たら付き合ってるよ。お互いに楽しみながらやってるから練習とまではいかないけど…」

「そうなんだ…」

「…」

「さっきからどうしたの甕井君？」

「ん？！」

「何だかソワソワして、落ち着かないみたいだけど」

「実はさ…盗み聞きして悪かったとは思ってるんだけど、さっきの話は聞かせて貰ったよ。お前さん方が俺の事を…その…」

「やっぱり聞いてたんだね」

俺は布仏さんの一言に自分の耳を疑った。まさか盗み聞きをしていたことがばれていたなんて…。

「気づいてたのか？」

「うん。凰さんはドアに背を向けていたからわかんなかったみたいだけど、影が映っちゃってからね」

「そうだったのか…悪かったな」

「うぅん。全然いいよ。私たちの話してたことは嘘でも陰口でもないんだから」

「じゃあさっきの話は…」

「そうだよ。私も聳井君のことは大好きだし助けてくれたことにはとってもとっても感謝してる。だけど、凰さんには敵わないよ」

「凰さん？」

「私は聳井君のこともおりむ～のことも大好きだよ。でも凰さんは聳井君のことが大好きみたいなの」

どうやら布仏さんは別に恋愛だとか言う今の俺には無縁であるがそんな感情を抱いているわけではなくてただ単に…俺が李承？選手のことを大好きに思っているような感じなのだろう。だけど、凰さんはどうやらそういうわけではなくて本当に俺の事を恋愛という目線で好きと思っているようだ。確かに今日も布仏さんの見舞いに行かないかと積極的に（一部暴力的ではあるが）誘ってくれた。勿論、自分で今朝放課後に行こうと決めていたが、彼女は知らなかったから仕方がないだろう。

「だから、大切にして欲しいんだ。聳井君が女嫌いなのは私も知ってる。でも凰さんを大切にして欲しい」

「…」

「ダメかな？」

「そこまで言われたら少し考えてみるよ」

「ありがとう…聳井君」

「それじゃあそろそろ、時間だから…」

「うん。明日には学校に行けると思うから」

「そうか」

俺は最後に挨拶を交わすと部屋に戻った。どうやら俺は徐々に変化を遂げているようだ…。

32話　デタント

さてと…凰さんがどうやら俺の事を好きになっているらしい。というのはさっき布仏さんから聞いたわけだが、あの場で一応考えておくと言っておいて正解だった。実際のところ俺は全く今は女性に、いや特にこの学校の女子に興味がない。別に勝手にしていてくれと言うのが心境だ。だから本当は授業中に寝ていようと内職していようと勝手にしておいて欲しいのに凰さんと来たらちょっかいを出したいのかよく分からないがいつも俺の思うようにさせてくれない。

”やれやれ…彼女に気に入られるとはなぁ…”

とは言っても、やっぱりそこは俺も男だから…女に好かれているという情報を聞いて嬉しくないわけではない。

”でも、他に俺の事好きになってくれる人なんて今後現れるのかなぁ？”

変なことを突然思ってしまった。だがこういうことを思ったのは何も今回が初めてではない。中学の時も何度かあった。だけど、最終的な答えは決まって‘いいえ’だった。確かにこんな歪んだ性格、特に女嫌いな男を好きになる物好きもそうそういないだろう。さてと、どうしたものか…

”もう少しこのままで行くか？”

俺は凰さんの気持ちを確かめるわけではないが、もう少し何の切っ掛けもないままで行こうと思った。少なくともそのことを急いで確かめる必要はないだろう。ゆっくりゆっくり行けばいいさ。

「はい」

不意にドアがノックされた。誰だろうか？

「よぉ！」

「おぉ、織斑。今帰りか？」

「そうなんだよ。折角だからここでさ」

「いいよ、いろいろ話すか？」

「おぅ！」

シャワーを浴びているようで石鹸のいい匂いをさせながら座っている織斑と一緒に俺は言葉を交わした。篠ノ之さんの剣道の話を織斑が俺は布仏さんの見舞いの話をした。

「…そうか、布仏さん随分よくなったんだな」

「見る限りだとそうだったよ。明日には学校に行けるってさ」

「お前のおかげだな」

「よせやい、そんな言い方」

「照れてるのか？」

「当たり前だろ？」

「「はははははは!!」」

一見するとまるで酒でも飲みながら話しているように陽気な会話だ。

「さてと…」

いきなり織斑は声のトーンを落として俺に真剣な面持ちで話し始めた。

「お前、鈴のことどう思ってる?」

「凰さんのこと?」

「あぁ」

「そうだなぁ…お国柄かもしれないけどパワーはあるよな」

「そうじゃなくて、好きか嫌いかで言ったら?」

「う〜ん。俺は基本的に女嫌いだから、嫌いって言えば嫌いだけど…いや、俺にとっては無縁な感じがするからどっちでもないかな?」

「普通って事か?」

「そう思ってくれていいんじゃないかな?」

「そうか」

「でも何でこんな事をいきなり?」

「そ、それはその…」

そろそろ俺も知らないふりをするのはやめよう。

「知ってるさ。凰さん俺の事好きなんだろ？」

「ど、どうしてそれを？」

「さっき布仏さんから聞いたよ。と言うよりかは布仏さんが感づいちゃったみたいなんだけどね」

「そうなのか」

「あぁ」

それからというもの、俺は織斑から結構な凰さんの話を聞かれた。どうやら篠ノ之さんと同じで幼なじみのようで、入れ違いで二人に面識はないんだそうだ。中国出身と言うこともあって両親が中華料理屋を日本では経営していたようで、凰さん自身の腕前も確かなものなのだとか。

「料理が得意なのか…今度何か作ってもらおうかな？」

「いいんじゃないか？。中華ならなんでも作れると思うぞ」

「なるほどな」

「で、どうなんだ実際のところ？」

「あれ？。さっきどっちでもないって…」

「俺からも甕井に頼む。もっと真剣に考えてくれ！、鈴は必死なんだ！」

織斑の力強い答え方に俺は心から驚いた。まるで敬遠球をホームランにされたような感じだ。

「そ、そうなのか。そうは俺には見えなかったけど」

「あいつも甕井の前では隠したいのかな？」

「ま、まぁ嫌いじゃないとは言っておくよ。嫌いじゃないと言っても俺女嫌いだからなぁ…う～ん、とにかく毛嫌いをするような感じじゃないって事かな？。自分でも答えをすぐになんて無理だよ。切っ掛けか何かがあれば変わるかもしれないけどな」

「わかった。ありがとな甕井。鈴にこのことは？」

「まぁ嫌いじゃないって言うのは言ってもいいぞ。だけど切っ掛けの話はＮｏだ」

そう俺が言い返すと織斑は笑顔で分かったと言ってくれた。

織斑が去ると俺はテレビをつけてナイターを見ることにした。だけど、李承？選手の打席が回ってきても何だか今日は心が躍らない。さっきのことが尾を引いているのかもしれない。

「さぁ、追い込まれました李承？、ピッチャー５球目…打ち返した、李承？が打ち返した！！。ライト前ヒット！！、さぁノーアウトラ

ンナー1塁です」

実況中継の声も今日はどこか遠くにあるように聞こえる。知らないうちに俺は横になった。夕食を摂っていないが、まぁお腹も空いてないし問題ないだろう。

「とうとう、冷戦も…崩壊の…序曲か」

俺が最後に記憶しているその日の言葉だった。知らないうちに俺は眠りに就いていた…。

33話　予測

さてと、翌日に凰さんとセシリアさん対ラウラさんの対決を控えた今日は座学しかない平凡な授業の日だった。6時間がとてつもなく長く感じた気がする。何でも今日はデュノアと織斑が放課後にISの練習をするんだそうだ。折角だからと誘われて俺も行くことになった。まぁ男だけなら俺ものんびりと練習出来るだろう。学校の授業中は女子もいるし、谷本さん達もいるからいちいち気を遣わないといけない。だけどここではそういうことは気にせず出来る。その後素振りも出来るし。最近全然出来ていないからいい機会(チャンス)だ。

とは思いつつ、着替えを済ませてアリーナ…まぁ国立競技場みたいなところに行ってみると既に織斑とデュノア…の他にいつもの3人の女子もいたし隣では他の人達が練習もしていた。放課後は自由に使えるとのことだから仕方ないだろう。そう言えば、今朝野球の動画を見ていてインスピレーションの如く気がついたのだがもしかしたらISの攻撃と防御は野球と似ているかもしれないと思ったのだ。それを今日は試してみることにしよう。

「こうズバッとやってからバキ、ドカッ～と！」

「感覚よ一夏！。何でわかんないのよ！」

「攻撃の時は斜め上前方に5度！」

3人に一気に教えられて織斑の脳はフリーズ寸前の用というかイライラしているというか

「率直に言わせて貰う…全然分からん！！」

遂に織斑は我慢が出来なくなったようだ。と言うかよくもまぁここまで耐えられたもんだ。俺なら無理だったな。

「なぜ分からん！」

「ちゃんとききなさいよ！」

「もう一度最初から説明して差し上げますわ！」

そりゃあ一気にしゃべられたら何も理解出来ないだろ？。況してや篠ノ之さんと凰さん、それからセシリアさんの考え方は点で違う。例えるんだったら…いや例えられないな。それに加えて俺も彼女たちは全く考え方が違う。

「お待たせしました～」

「おぉ、聳井待ってたぞ！」

「いろいろ教えて貰ってたんだな」

「あぁ、まぁな…」

「なんなんだ一夏！その態度は！」

「折角教えてあげてたのにそれじゃあ」

「全く分かってないみたいですわ」

「まぁまぁ…」

やれやれ、俺がまさか仲裁役をするなんて…これも運命かな?。するとセシリアさんが俺に

「聳井さんはどのような戦術で?」

と聞いてきた。珍しいというか、織斑の参考にしたいそうだ。

「う~んとねぇ…野球かな?」

「なんなんだ聳井、野球?」

「まったくわかんないわよ!」

「私も全然わかりませんわ」

「俺もだ聳井、野球ってどういう意味だ?」

「打者が打席に立ったとき、相手の投手は自分をアウトにしようとするだろ?。って事はその投手が考えていることが読めさえすれば、自分はアウトにならない。要は、相手の考えていることを予測して自分が行動すればいいのさ」

ちんぷんかんぷんな感じの4人…何かいい方法はないかなと思っていると丁度デュノアがやってきてくれた。デュノアのは第二世代型とか言う完成度の高いISだこの上には凰さん達が使っている第三世代、織斑が使っている第四世代があるのだがどれも秘密な点や課題が多くて、どうも芳しくないとのこと。

「デュノア、ちょっと手伝ってくれないか?」

「何をするの?。ボクでいいなら何でもするよ」

「そう言ってくれると思ったよ。あの的はお前さんがこれから使うやつだろ?」

そう言って俺は的のある方を指さした。内側が赤くなっている、アーチェリー用の的のようなもので、当然内側に行けば行くほど高得点をたたき出すことが出来る。

「うん。そのつもりだけど…」

「あそこに俺立つから、適当に俺目掛けて撃って」

「うん!、わかった…って!!」

「な、何言ってるんですの!」

「そうよ!。当たったら大怪我するわよ」

「勿論ただで当たるって訳じゃない。この刀があれば大丈夫さ」

「一応はそれで回避は出来るって事か」

「さすが織斑。まぁ、野球やってればこれは誰でも出来るよ。と言うわけでよろしく」

「あっ、ちょっと!」

そう言うと俺は早速そっちの方に向かった。みんな心配していたよ

うだが、俺は全然怖くなかった。寧ろ俺にとってはこれも立派な作戦だった。だがみんながそんな事を知っているはずがなかった。

「さてと…聞こえるかデュノア？」

「う、うん…甕井やっぱり危ないよ」

「気にするな気にするな。何かあったらすぐ保健室行くから」

「そう言う問題じゃ…」

「よし！。早速頼む！」

俺はデュノアの返事を無視して的の脇に立った。左打席、まさに野球そのもの。だけど違うのは打ち返すのではなくてあくまで弾丸を的に命中させないことと使うのがバットでなくてＩＳ用の刀と言うだけだ。勿論ＩＳを俺も使っているから最悪回避出来る。

「そ、それじゃあ行くよ」

「おぅ！」

デュノア以外の４人はとても心配そうに俺を見つめている。

”甕井、大丈夫だよな、でも野球と一体何が関係してるんだ？”

”あいつ、死なないでよ！”

”甕井も無茶をするやつなんだな意外と”

”登井さんたら何をお考えなのでしょう”

丁度その時デュノアは第一発を俺目掛けて放った。多分本当に当たらないようにだろう、俺から離れたところに撃ってきた。

「練習にならない！」

俺はそう言いながら刀で何とか弾丸を止めることが出来た。

「ダメだデュノア！。狙ってくれないと困るよ！」

「で、でも」

「大丈夫だって！」

「う、うん。じゃあ今度こそ」

そう言うと今度こそ本当に俺目掛けて撃ってきた。

”おぉ！！”

俺は勢いよく飛んでくる弾丸を刀で又止めた。それからじゃんじゃんデュノアは撃ってくるようになった。どうやら俺に言われようやくエンジンがかかったようだ。

「やばっ！」

俺は上に飛び上がって弾丸を止めた。それをデュノアは狙っていたようだ。

「もらった！」

実はこれが最後の弾でここまで一度も的に当てられていない。デュノアも最後の最後にようやく当てられると思っていたのだろう。

「予想通り」

俺はそう言いながら自分の持っている刀を下に落とした。するとものの見事に刀に弾丸は吸い込まれるかのように当たった。

「な、何だって…」

「ふぅ…楽しかった～」

俺は急いでみんなのいるところに戻った。

「ありがとうデュノア…さてと、俺の言いたいことが分かったでしょ？。最後の最後、デュノアは俺の下を狙うように撃った。実際には俺がわざとそうするように仕向けたんだよ。見事に引っかかってくれたけどね」

「…甚井って凄いな。俺にＩＳ教えてくれないか？」

「はい？！」

「お前の予測のやり方は凄かった。頼む、教えてくれ！！」

「でも、俺は射撃は無理だぞ」

「シャルルには、射撃を教えて貰って。お前には戦術を教えて貰い

たい！」

「本当、一夏？」

「あぁ。本当だ、頼む甕井！」

”そうだなぁ。織斑がここまで言ってるから引き受けるか！。自分の勉強にもなるし”

「よしわかった！。早速やろうや！」

「おぅ！」

俺達は勢いよく飛んでいった。それを面白そうに眺めているラウラさんが脇にいることなど俺達は知る由もなかった。あぁそうそう、他のセシリアさん、凰さん、篠ノ之さんは何だか悔しがっていたなぁ…どうしてだろうか？。

３４話　帰属（前書き）

本日２０１１年７月９日、李承?選手が西武ドームにて涌井投手から今シーズン第６号ホームランを放ちました。昨シーズンの記録も更新し、日本球界通算１５０本本塁打も達成!!。これからもじゃんじゃん打って欲しいです。

34話　帰属

織斑を鍛えた後、俺は一人で夜のアリーナに残って素振りをしていた。久しぶりの一人だけの有意義な時間を過ごせて何だか嬉しい。今はボールがまるで吸い込んでくるかの如くバットに当たりそして、美しい放物線を描きながら観客席にアリーナの照明も落とされてとっても暗いがもしもここの照明が全て点けばすぐにでもナイターは開催出来るだろう。

「ライト点かないかなぁ…」

俺はそんな事を思いながら李承?選手の真似を決まってする。ライトが点いていて目の前には…そうだなぁ格好良くダルビッシュとしようか…ヘルメットと自分のベルトをクイクイッとしてからバットを2，3回ほど回して構える…すると勝手に自分の脳内でラジオ放送が再生される。

「さぁ、打席に立ちました李承?。ここでいい当たりを見せることが出来るか?。さぁピッチャーのダルビッシュ振りかぶって、投げた!」

「打ち返した!!、李承?が打ち返した!!。入るか入るか入るか…入りました〜!!!」

というラジオの興奮したアナウンサーの声と共に飛び込んでいく。ホームランを打ったときほど打者にとって嬉しい瞬間はないだろう。そんな自分の空想に浸りながら野球の練習をするのも楽しい。だが

「おい！」

後ろからの女性の声が一瞬でそんな俺の楽しさをいとも簡単に壊してくれた。

「何だ？」

「ふん、貴様のやっているものは滑稽で面白い」

「言ってくれるますねぇ…ラウラさん」

そう、現れたのはラウラ・ボーデヴィッヒ…この間転校してきた堅めを眼帯で覆ったドイツ人だ。代表候補生であるのは勿論の事だが高い身体能力を誇っていることでも知られている。と言うのもこの間のソフトボールではじめて俺は女子にフェンス直撃の打球を打たれた。おふざけで投手を引き受けたのはあったが、それにしても凄いと俺は思った。そう…あの熱中症事件の時だ。

「明日は貴様は観に来るのか？」

「行かないと言ったら？」

「ふん、教官の弟が行きさえすればお前も来ないはずがない」

「おぉ、頭いいんですね。てっきり戦うことだけしか能がないのかと思ってましたよ」

「くっ…貴様」

そう言うと、ラウラさんは降りてきて谷本さんに前やられたように

胸ぐらを掴まれた。ただこの間と違うのは俺が制服じゃなくてアンダーシャツだから少し苦しかった。だけど俺はちっとも怖くなかった。胸ぐらを掴まれて俺が怖いとでも思うのだろうか。

「ふん！。まぁいい、明日を楽しみにしていろ。目にものを見せてくれる…」

そういうとラウラさんはすばしっこいから飛び上がってどこかへ行ってしまった。

「さてと…後１００回くらいは振っていくか…」

俺は再び真っ暗のアリーナで素振りを続けた。

素振りを終えて部屋に戻りドアの前に立つとなにやらドアに紙が挟まっているのが見つかった。

”ん？…聳井、戻り次第すぐ俺達の部屋に来てくれ！。織斑”

と書かれている。何なのだろうかと思いながらもとにかく俺は織斑の部屋に向かった。

部屋に入ると織斑とデュノアがいた。そう言えば織斑とデュノアは同じ部屋だったんだな。だけど、様子が少しおかしい。デュノアは自分の胸に手を当てながらとっても恥ずかしそうにと言うか悲しそうにしている。

「どうしたんだ？。遅くなって悪かったな」

「いやいい。単刀直入に言わせて貰うぞ、実はな…」

「本当か?!。デュノアが?」

「本当なんだ。実はさっきシャルルがシャワー浴びててさ…その…」

「一夏のエッチ」

「だから違うんだって!」

「まぁまぁ…何となく言いたいことは分かったよ。俺もまぁ大体は予想がついていたさ。デュノアが男じゃないって言うのはね」

「ど、どうして?」

「そうか織斑はまだ聞いてなかったのか。デュノアが前にな…そう俺が朝早くに起きて素振りの練習をしていたときだったな。ボクが男じゃなくて女だったらどうするって聞かれてさ」

そう俺が言うと織斑もデュノアもぴくっと反応した。別なことを考えていたようだが…。

「それで何て答えたんだ?」

「俺は別に嫌うつもりはないって言ったよ。だって、一度男って思って一緒に楽しくやってきたのに今更女だからって毛嫌いするなんて俺には悪いけど無理さ」

「そうか…っていうことは?」

織斑は急に希望を持ったような顔をした。

「今まで通りで行こう。それでデュノアもいいんじゃないかな？」

「…」

「ん？」

「実はシャルルは親父さんに自分が女子であることがばれたら戻って来いって言われてるんだ。元々男性の操縦者って世界に俺達しかいないだろ？。だからさ…」

「広告塔になるしデュノア社の性能試験もしてくれる…一石二鳥というわけだな」

「…ということなんだ」

「聳井は凄いんだね。みんなお見通しなんだ」

「企業が思う事なんてそんなもんさ。それにしても酷いなぁ、人を広告塔扱いするなんて、韓国と陸続きのお隣の国みたいだ」

俺はデュノアの父親がどんな人か顔すら分からないが憎く思った。自分の娘を言いようにこき使うというのは些(いささ)か納得いかないし、甚(はなは)だ許し難い。でも一番心配なのはデュノアだ。俺がいちいち怒ってなんかいる場合じゃない。

「ボクは近いうちにフランスに帰るよ。その後はどうなるか分からないけどね…」

「その必要はないんじゃないか？」

「えっ！？」

「なぁ織斑？」

「ＩＳ学園特記事項、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない」

「率直に言おう。お前は残った方がいい」

「で、でも」

「少ない友達を俺も失いたくないんだよ…」

「俺もだ」

そういうとデュノアも決心を固めてくれたようだ。

「特記事項って５５個もあるのによく二人とも覚えてたね」

「俺は勤勉だからな」

織斑はそう言う。まぁ織斑もよく勉強しているみたいだしな…

「登井は？」

「この学校は特殊だからさ…そう言う制度の一つや二つはあるだろ？」

「かばってくれてありがとう、二人とも。とっても感謝してるよ」

「い、いやぁ…」

「これからもよろしくな…」

織斑の目線が徐々に下に落ちていく…この野郎何考えてんだか…

「一夏のエッチ…」

「何でそうなるんだ！！」

と、その時不意にドアがノックされた。

「一夏さん、いらっしゃいますか？」

セシリアさんのようだ。俺は急いでベッドの下に隠れて、デュノアは自分のベッドに横になった。

「入りますわよ…ん？、何をしていらっしゃいますの？」

「い、いやぁ…シャルルが風邪引いちゃったみたいでさ」

何とも言えない茶番劇だ。

「そうなんですの…」

「一夏さんを夕食にお連れしても大丈夫ですか？」

「ゴホッゴホッ…どうぞ！」

そう言うとどうやらセシリアさんは織斑の腕を持って出ていったようだ。

「意外と大胆なんだな」

「そうみたいだね」

俺とデュノアの二人きりの部屋は話すことも特になくただただ時間だけが過ぎていく。俺はあぐらをかいて織斑のベッドの上に座っていた。

「甕井はお腹空かないの？」

不意にデュノアは俺にそう訊いてくる。

「これがあるから大丈夫だよ」

「何それ？」

「朝鮮飴って言うんだ。名前には朝鮮ってついてるんだけど歴（れっき）とした日本のお菓子兼非常食なんだよ」

「へぇ…」

「食べてみるか？」

「ありがとう」

そういうとデュノアはベッドから起き上がって朝鮮飴を一つ手に取るとすぐにそれを頬張った。

「甘くて美味しい」

「気に入ってくれてよかったよ」

「さっきは甕井…本当にありがとうね。感謝してる」

「気にするな気にするな…何かあったらまたすぐに言え、それじゃあ俺はそろそろ部屋に戻るとするよ」

「晩ご飯は大丈夫なの？」

「なんとかなるよ。朝鮮飴あるから」

そう言うとデュノアも笑って俺に

「そうだったね」

と言い返してくれた。部屋に戻ると早速、ベッドに横になった。

”これで女を助けたのは通算2度目か…”

そんな事を思いながら俺はまた気がつかないうちに眠りに就いていた。そう言えばここのところ満足に食事が摂れていないから明日は食べるか、と思いながら…。

３４話　帰属（後書き）

作者は朝鮮飴を食べたことはありません。でもいつかは食べてみたいお菓子の一つです。

35話　任命式（前編）…？

午前1時頃、さすがに俺もまだ起きる時間ではなく爆睡していた。するといきなりドアが開いたかと思うと織斑が眠気を全く見せることなく俺を勢いよく起こした。

「聳井！！」

「う～ん…織斑？」

「聳井、起きろ！！」

「なんだなんだ、まだ1時じゃないか…さすがに野球の練習は」

「そんなことじゃねぇ！。テレビをつけてくれ！」

「テレビ？」

俺は急いでテレビを言われたとおりつけてみた。するとにわかには信じがたい速報（ニュース）が特番で放映されていた。

「本日午前0時過ぎ頃、日本の下関と韓国の釜山（ブサン）を結ぶ関釜（かんぷ）フェリー釜山出港の便で航行中に火災が発生し炎上、乗員４０名乗客３１１名の計３５１名は救命用の船舶に乗り換えた後日本日本海上に漂流。付近では今後時化が予想されていて日韓の両政府では早急の対応を迫られています…ここで新たなニュースです。先ほど、菅直人総理大臣が海上保安庁の、韓国の李明博（イミョンバク）大統領が空軍並びに海軍への救助要請を依頼。付近一帯の捜索活動を開始すると発表しました」

黙って俺が聞いていられるわけがない。政府の対応を馬鹿にしているわけではないが、日本政府のこういうときの対応の早さはあまりよろしくない。急がないと何百人という人の命が奪われてしまう。

「行こう！」

「お、おい！。どこに行くつもりだ？」

「大体の航路は俺も知ってる。だから今すぐ下関に行くんだ！！」

「な、何で」

「格納庫を開けろ。今すぐ行くぞ」

「馬鹿なこと言うな。先生にも黙っていけるわけがないだろ？」

「馬鹿野郎！。今助けないで後悔するんだったら、助けて先生に叱られた方が何倍もましさ！。さ、行くぞ！」

俺にそう喝を入れられてとうとう織斑も気がついてくれたようだ。後で叱ってもらえるならそれでもいい、だけど今助けなくてはならない命があると言うことを…。

「わかった、行こう！！」

「そういえば織斑、旅券（パスポート）は？」

「引き出しの中だ」

「よし、それを急いで持って行こう、あと生徒証もだ」

「わかった！！」

その時だ俺が着替えようとしたまさにその瞬間

「待って！！」

とのデュノアの声がした。起こしていないのにもかかわらずこの異変を察知したようで目を覚まして着替えまでも済ませていたようだ。

「デュノア！、お前まで行くつもりか？」

「シャルルだめだ。お前は候補生だぞ？。何かあったら」

「二人がいなくなっちゃったらボク、一人ぼっちになっちゃうんだよ？。なのにおとなしく寝てるなんて無理だよ」

「だからって…」

「ボクを行かせないんだったら、二人も行かせない…」

ドアの前で通せんぼをしている彼女の目はやる気に満ちていた。俺が決断を下すのにそう長い時間はかからなかった。

「よし！。お前も来い！、仲良く男子三人で怒られようぜ！」

俺達は頷き会うと急いで格納庫へ向かった。そして、こっそりとＩＳを起動させると俺達は勢いよく夜空へと飛んでいった。これを織斑先生が知らないはずがなかった。俺達の事をＧＰＳで確認すると

「あの馬鹿どもめ…まぁ、面白そうだな。聳井の統率力はいかほどか、試すことが出来そうだ」

そう呟いていた。

俺達は2時間ほど飛行をしてようやくフェリーの場所に着いた。
俺は急いで海上の救命筏（きゅうめいいかだ）に乗っている乗客達の安否を確認した。

「船長は？」

「私だ。先ほど書く筏との連絡を取り合った結果乗員乗客３５１名全員の安全を確認した。後は救助を待つだけだ」

「わかりました。私たちが来たから安心して下さい」

「ありがとう」

そう言って俺達は急いで他の筏の状態も調べた。すると…お母さんを捜しているこれまた少女がいた、しかも二人だ。一方は日本人でもう一方は韓国人のようだ。

「おかあさ～ん」

「聳井、何とかなりそうか？」

「大丈夫だよ」

「えっ、聳井って韓国語分かるの？」

「友達に韓国人がいるって言っただろ？。心配すんな」

俺は急いで韓国人の少女のところに向かった。

「おい？、俺が来たからもう大丈夫だぞ。今からお母さんを捜してあげるからな」

「本当に？」

「あぁ、本当だ。だからもう泣いちゃダメだ」

少女というのは素直なもんだ。谷本さん達に見せてやりたいぐらいに素直だ。俺がそう言うと

「うん！！」

と笑顔でこっちを見返してきた。

「よし、それじゃあ俺にしっかり掴まってろよ！」

「うん！」

「さてと、行くか」

それから俺は１０隻近くある船を見て回った。

「この子のお母さんはいらっしゃいませんか？」

「あっ、お母さん！！」

「どこにいたの？」

「別の救命筏にいました。泣いているところを発見しましたのでこちらまでお母様を捜索さて頂きました」

「ありがとうございます。ありがとうございます」

「いえいえ…」

すると

「こちらは大韓民国海軍です！。ただいまから救助を行います！」

「こちらは日本国海上保安庁です。こちらでもただいまから皆様を救助いたします」

と両国の救援部隊が駆けつけてきた。俺は韓国側に、デュノアと織斑は海上保安庁の巡視船に向かった。

「君は？」

韓国の軍人が早速俺が船に降り立つと向かってきた。慌てて俺は

「日本人です。ここにパスポートがあります！」

と韓国語で言い返した。すると急いで軍人さんはパスポートの有可を捜して、それを発見すると俺の顔と合っているかどうかの確認をした。

「うん。君が日本人であることは分かった。だけど、どうしてここに？。しかも君は…もしかして世界でもたった三人の？」

「仰るとおりです。私は日本国ＩＳ学園１年１組の聳井亮悳という者です。このたびは、関釜フェリーの事故を知りまして皆様より先に救援活動等を行っていました」

「本当か？」

「はい。ただいま連れの二人が日本の巡視船で対応をしております。私は韓国語が使えますからこちらに」

「そういうことだったのか…ありがとう」

「その人は私の娘を見つけてくれたんです」

さっきのお母さんだ。

「本当ですか、ご婦人」

「はい。娘の怖い想いを少しでも抑えようと頑張っていただきました。本当にありがとうございました」

「いえいえ…お役に立てて光栄です」

俺がそう言い返すと後からやってきた軍人…多分上級職の人だろうが、その人がこう訊いてきた。

「うん！。よく頑張ってくれた君たちの名前を聞いておこう」

「はい、私は聳井と言います。今から連れをこちらに呼びます」

そう言って俺達はその後日韓両国の船舶で自己紹介をした後、消火活動にも協力した。

気がつくと、時間は既に朝の４時半になろうとしていた。

「本当に助かりました。甕井さん、織斑さん、デュノアさん。本当にありがとうございました」

「君たちはよく頑張ってくれたぞ。大韓民国軍人として君たちのことは一生忘れない！。本当にありがとう！」

そう両国の船長からお褒めの言葉を受けて俺達は急いで学校のある平塚に戻っていった。

学校に戻ったのは７時前。結局今日の睡眠時間は３時間ほどだった。しかも、早速俺達は織斑先生の部屋にお呼び出しを受けた。

「全く！、貴様等自分たちがしたことが分かっているのか？」

「すいません…」

「ごめんなさい」

「申し訳ありませんでした。彼等を誘ったのは俺です。責任は俺が取ります」

「ダメだ。全員で取って貰う！」

「そ、そんな…」

「一夏、テレビをつけるんだ」

「えぇ、千冬姉いきなり何を…」

「いいからつけるんだ！！」

「は、はい！！」

そう言うと織斑はテレビをつけた。するとどのチャンネルにしても俺達の報道がなされていた。

「今日未明に発生した関釜フェリーの火災事故でＩＳ学園の男性操縦者複数名が救助活動を支援し、事故後の復旧活動に大きな貢献を果たしました」

「貴様等はこれから大いに期待をされるだろう。期待に応えられるように責任を持って頑張るんだ！」

織斑先生がそういったとき、先生の顔には笑みが浮かんでいた。

「「「はい！」」」

俺達は笑顔でそう返事をした。このことは勿論、李承?選手の耳にも当然のことながら入っていた…。

というわけで、眠気も今日は一段と凄いことになっているが、授業は通常通り始まった。おかげさまで俺達男子の列は全員が１限から頭(こうべ)を垂れる始末、よりにもよって今日は織斑先生が俺達の授業風景を見学に来ているようだったらしく…

”ゴツン！、ゴツン！、ゴツン！”

と3人全員に強烈な一発をお見舞いしてくれたし

「起きんか！、馬鹿者が！」

と罵声まで気前よく飛ばしてくれた。俺達はと言うと突然のことで俺はデッドボールが頭に当たったのかと思うような感じだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな姿を見ているアタシが目の前にいる。アタシの名前は凰鈴音(ファンリンイン)、一夏とかセシリアとかには鈴とか鈴さんとか言われてるわ。でも、甃井(かれ)だけはいつまで経っても名字にさん付け…ウンザリする。アタシが、甃井に興味を持つようになったのはここに入学したとき。いわゆる一目惚れってやつなのかしら?。今まで一夏一筋出来たアタシにとっては衝撃的な出会いだった。何でなのかなぁ…アタシが甃井に惚れた理由は自分でも分からなかった。きっと何か大きな理由があるんだろうってその時は思ってた。今一番アタシが後悔してるのはこうやっていつも通りの生活しかできないこと。布仏さんには少し前にアタシの気持ちを読まれちゃったんだけどね…でも間違いじゃなかったからあたしも怒らなかったし、人にそう思われていると言うことが嬉しかった。多分、一夏を経由してこのことは甃井の耳にも入っているのだろう。だけど、甃井はいつも通りの生活…女嫌いというのを貫こうとしてる。でも最近、なんだかそんな甃井の性格が徐々に壊れようとしてる。いや、新しくなろうとしてるといった方がいいかもしれない。何か切っ掛けがあればいいんだけどなぁ…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな事を凰さんがこの時思ってるとはつゆ知らず、俺は先生に謝ってから再びノートに手をやった。退屈な授業だけど、俺もしっかり聞いてないと成績下げられるし、凰さんに机蹴飛ばされちゃうからね…。

その日は翌日にクラス対抗戦を控えてることを突如俺は発表された…いや、発表自体は随分前にしたんだそうだがホームルームをよくサボってるから俺だけが知らないのかもしれないな。

「…というわけで、明日のクラス対抗戦に出場する者を選出したい。自薦他薦は問わない」

「織斑君がいいと思います！」

「私も私も！！」

収拾がつかなくなってしまった。俺はチャンスだと思いそっと教室から抜け出そうと鞄を手に取ったのだがいきなり

「待て甕井！！」

と織斑先生に一喝された。どうやら俺がよくホームルームを抜け出していることを知っているらしい。

「どこへ行く気だ？」

「どこって、寮ですけど」

他の女子は邪魔するなと言わんばかりにウンザリした顔をしている。

こっちの方がウンザリしてるよ、織斑で確定するんだったらここに俺を残す必要だって無いだろって言いたい。

「待て待て、甕井。重要なことを言い忘れていた」

織斑戦線がそう言うから俺も仕方なく椅子に座った。

「実はな、今度のクラス対抗戦には男子生徒は無条件で…いや強制的に全員出場することになった」

「はっ？！」

「ま、マジで…」

「ボクも出るの！？」

何だかまだまだ話は終わらなさそうだ…。

36話　任命式（後編）

それから暫くの間俺達は何でこんな目に遭うのかをしつこく聞いた。

「…要はお前達の負わなくてはいけない責任だ。しっかりとやるように！」

「拒否権はなしですか？」

「当たり前だ馬鹿者！！」

織斑先生もヒートアップしているようだ。やれやれ…まさかクラス対抗戦の垣根を越えて男子は強制的に全員参加だなんて聞いてないぜ…。

「甦井！」

俺が嫌々そうに先生の話を聞いていると、不意に織斑先生は俺にそう言った。

「はい？」

「織斑にしろデュノアにしろ、専用機を持っているが…」

「どうせ練習機なんじゃないんですか？」

層俺が言い返すと織斑先生は急ににやつくというわけではないが軽く微笑みながら

「お前にも専用機が来ているぞ、言い忘れたがお前は明日から候補生だ」

と続けざまにそう言った。俺も理解するのは難しかったから他の人…まぁ女子が殆どだから

「えぇー！！！！」

と全員がそう叫んだ。全く、叫びたいのはこっちの方だよ…。

「でも、何でですか？。と言うかどこの候補生で？」

「あぁ、お前の場合は何から何まで世界初なんだ。まず、日本の代表候補生という扱いにはなっているが専用機は大韓民国政府の強い要望によって韓国製のものを採用することになった。と言っても専用機のコンピューターは日本が作っているから実質外回りとエンジンを韓国が製造した、いわゆる共同開発だ」

何だかよく分からないが、早い話がコンピューターだけ日本でつくって後は韓国製と言うことなんだろう。

「でも、どうして韓国がそこまで？」

「野球選手の息子を助けた上に、先のフェリー火災事故の時の救援の迅速な対応をあちらの政府が非常に嬉しく思ったんだそうだ。そこで今回は是非とも言ってきてな…」

「なるほど。わかりました、それならぜ…」

「ただしだ。この専用機を使うには今度のクラス対抗戦に出る必要があるな…」

どうやら俺を何が何でも今度の対抗戦とか言うやつに出したいようだ。俺もとうとう根負けした。

「わかりました…それじゃあ出場します」

他の二人も俺が出場すると言うと続々俺に続いた。まぁ、織斑とデュノアが出るなら構わないかな?。

さてと、その後は解散後俺はアリーナに向かった。これからセシリアさんと凰さん対ラウラさんの対決…いや決闘が始まるようだ。

「古くさい国と数だけの国がどれだけのものか教えて貰おう」

「の、臨むところですわ!!」

「覚悟していなさい!」

二人は一気に攻撃態勢に移ったがラウラさんは終始冷静とこの状況を読んでいる。

「一番厄介な相手になりそうだ…」

「何て?聲井?」

「いやいや、何でもない…こっちの話だ」

「そうか」

俺は知らず知らずのうちに独り言を呟いていたようだ。だけど

”何だかいやな予感がするな…”

とデュノアもこの時はそんな事を思っていたようだ。それがこの後まさか的中してしまうとは思いもしなかった…。

３７話　Ｍｏｕｔｈ　ｔｏ　Ｍｏｕｔｈ

病院で治療が済むのを待っているなんてまるで、ドラマの世界の中だけだと思っていたのに…。隣では織斑とデュノアも一緒に治療が終わるのを待っている…。

誰がどうしてこんな目に遭ったのか…。実はさっきの決闘でセシリアさんと凰さんが重傷を負ってしまったようだ。ラウラさんの使っているＩＳには何というか紐のようなものが装備されていてそれが原因になってしまったのだ。だが、二人の怪我の度合いはかなり違った。セシリアさんは単に銃撃をまともに食らっただけで、怪我と言っても足首をねんざするぐらいで助かったのだが、凰さんは首をさっき言った紐でどうやら瞬間的に強く絞められてしまったようで、一瞬怯んだ隙に無防備な状態からまともに攻撃をこれまた食らってしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「「きゃっ！」」

二人はほぼ同時に悲鳴というか声を上げた。それから、首に紐が巻き付いて締め付けられているのだから徐々に声が薄れていく。それをラウラさんは狙っていたようだ。まずセシリアさんから言うと彼女の場合は首の紐が解けると

「ゲホッ、ゲホッ！！」

とむせた。その隙を狙ってラウラさんはまずセシリアさんを攻撃した。まずかったのはこの時にまだ凰さんの首は絞まったままだったた

ことだ。

「甘いぞ！、英国（イギリス）代表」

「ひっ！」

幸い、セシリアさんの意識はしっかりしていたから辛うじて自分の最低限ではあるが身を守った。だからこそねんざで済んだわけだが…凰さんは別だった。あろう事か倒れかかった凰さんに向かってラウラさんは発砲したのだ。自分の事で精一杯の凰さんは被弾、結局その場に倒れ込んだ。まるで意識を失ったようだった。

「まずいぞ、行くぞ織斑！」

「お、おぅ！！。シャルル、ついてこい！」

「わかった」

俺達は急いでアリーナの中の二人が倒れているところに向かった。

「くっ…」

セシリアさんは意識がしっかりしていて、足下が内出血しているのが分かったからねんざぐらいの怪我と分かった。だけど、もっと重大な病気の可能性がないわけではない。

「おい、大丈夫か？」

「登井さん…足が、足が…」

自分でも怖いのだろう、セシリアさんのろれつがうまく回らない。

「心配するな！。お前さんの怪我はたいしたことじゃない、ほらしっかりしろ！」

そうやってセシリアさんを起き上がらせると織斑には先生を呼ばせに行った。

「痛いか？」

「とっても痛いですわ？」

「これで冷たいって分かるか？」

俺はそう言うとそれぞれの足にたまたま持っていたジュースの缶を足の指先につける。神経に異常があるかないかを確かめるためだ。

「どっちでも冷たいとしっかり分かります」

「よし、お前さんの怪我はおそらくねんざだろうな。すぐによくなるぞ」

そう言って元気づけるとひとまずはその場をデュノアに頼んで今度は凰さんの手当をすることにしたのだが…

「おい、大丈夫か？」

「…」

「お～い」

「…」

俺は申し訳ないが肩を叩いてみることにした。

「おい、しっかりしろ！」

「…」

それでも反応がない。すると先生を呼びに戻っていた織斑も帰ってきた。そして、山田先生が一緒にやってきてくれた。

「二人は？」

「セシリアさんは大丈夫そうですが…凰さんが、今調べましたら、脈も弱くて意識が…すぐに救急車を！」

「わかりました！」

そういうと山田先生は再びアリーナから学校の中に駆けていった。

俺は早速、応急処置に移った。まずは凰さんの気道を確保した。いくらＩＳ学園とは言えども救急車が来るまでは日本の場合６分くらいかかる。この間に何もしなければ確実に凰さんはこのまま死んでしまう。俺はそんな風にはしたくは絶対にない。

「大丈夫か？。しっかりしろ！！」

「…ん…」

「おい！」

「…」

一瞬意識が回復したようにも感じたがどうも、そういうわけではないらしい。こうなると残された方法はただ一つだ…。

”人工呼吸と心臓マッサージか…”

ためらっている暇なんてなかった。一刻を争う事態、俺は急いでそばにいる織斑とデュノアを呼んだ。

「おい、二人のどっちかは心臓マッサージ出来るか？」

案の定二人は無理という顔をした。確かにそうだろう。普通の高校生なら殆どが知らないはずだ。俺は親父に習った思想言う専門の本も家にあったから知っているだけで、他の人は当然そう言うわけではない。

「わかった。じゃあやってやるから今からよく見てろ！」

俺はそう言うと、懐に入れているフェイスマスク…まぁ親父がくれたやつなんだけどそれを凰さんの顔に貼り付けた。これは逆止弁がついているから衛生的にも安心して人工呼吸を行うことが出来る。でもいいのだろうか。実は俺の中学では3年生の卒業間近に救急の講習会があってそれでこれの訓練をしたのだが…女子達と一緒にやっていて色々批難があったりした。要は人形だろうと男がこう言うのをするのは気分が優れないというのだ。俺もそうだった。実はまだこの時俺にはためらいの念があった。女嫌いという自分を裏切るのもそう容易いことではないし、これで凰さんの意識が戻ったとし

て凰さんはどう思うのか…。

”どうすればいいんだろう…”

だけど俺は凰さんを助けることを諦めるなんて出来なかった。俺はとうとう意を決した。

「失礼！」

俺はそう言うと凰さんの口にフェイスガードを駆けて措置を講じた…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その後まもなくして、救急車が到着。俺の処置のおかげかは分からないけど凰さんは救急車の中で意識を若干回復した様だ。その後病院に担ぎ込まれて今に至る。かれこれ、1時間近く俺達は外の待合室で待たされている。

「鈴、大丈夫かな…」

「大丈夫だよ一夏。きっと甃井が…甃井？」

俺は気がつかないうちに寝てしまっていたようだ。俺も心境的に寝ることなんて出来なかったのに、とても疲れがたまっていたようだ…。

「ん？」

「あっ、目、覚めたんだ…」

天井が見えて、自分はベッドの中にいる…ん?、様子がおかしいぞ。

「あれ、確か俺待合室の椅子で寝てたはずなのに…」

「何言ってんのアンタ。今はもう夜中の3時よ」

「ここは?」

「さっき移送されたわ。ここは学校の病室」

「そうか…ってお前、いつの間にそんなに回復したんだ?」

俺は慌ててベッドから飛び起きた。そしてドアを開ける。見慣れた廊下。確かにここは学校のようだ。外の月明かりのせいでとっても明るく感じる。

「アンタのおかげって先生は言ってたよ。私は気がつかなかったけどね…」

慌てて凰さんを見る。すると凰さんの首には痛々しい包帯の後があった。どうやらすれてしまったようだ。かすり傷だからと本人は言うからたいしたことはないんだろうが、俺は許せなかった。今度はラウラさんを倒さなくてはならないようだな。これは戦争ではない、だから人を殺すことは許されないのだ。

「ねぇ、聳井」

「あっ?。今お前、俺の事名字で…」

「は、話があるの。聞いて！」

「もう寝かせてくれ…」

「聞いて！」

「何だよ。早くしてくれ」

「こっちに来てくれない？。私は起きれないから」

「なんだ？」

「もっと近寄って」

「はぁ？」

俺は眠気を堪えて、凰さんに顔を近づけた。すると突然、彼女は俺を抱きしめた…。

38話　Перестройка

眠気を一気に覚ますようなことを彼女はしてくれた。まさかいきなり女に…しかもこんな自分よりも体格が小さい人にいきなり抱きしめられるなんて。初めてだよ、しかも相手はＩＳを使ってるからなかなか逃れられない。

「は、離せ！」

「イヤ！」

「離せ、離せよ！」

「イヤったらイヤ！」

無我夢中で逃げようとするのを俺も諦めた。すると、意外な事に凰さんは俺を離してくれた。

「な、なにするんだよいきなり！」

「ひっ…そ、その…怒ってる？」

「まぁ怒りはしないけど…でも驚くじゃないか！」

「ひっ…ご、ごめんなさい」

いきなり手のひらを返すかのように凰さんは内気になる。しかも…何だか悲しそうに、今にも泣こうとしている。

「どうしたんだよ?。訳を言ってみろ訳を」

「わけ?」

「そうだよ。こんな行為に及んだ理由さ。別に俺は何度も言うけど怒ってる訳じゃないんだ。ただ単に理由を知りたいんだよ」

「理由…なんて」

すると突然…いやとうとうというのだろうか、凰さんは泣き出してしまった。

「お、おい!。どうしたんだよ?」

「…きなの」

「えっ?」

「アンタの事が好きなの!、自分でもどうしようもないくらい。アンタの事が好きで好きでしょうがないの!」

俺は本当のことを凰さんから言われてショックさえ覚えた。今まで女嫌いを貫き通していた俺が初めて味わったこの不思議な感覚。女に自分の事が好きなんて言われたのは今までで多分初めてな事だろう。だけどおかしなくらい、自分の心の中はスッキリした。本当のことを本人から言ってもらえたからなのだろうか。

「お前…本当なのか?」

俺は普通なら言ってはいけないような質問をしてしまった。

「当たり前じゃない！」

涙を流しながら凰さんはそう笑顔になって答えてくれる。

「でも…どうして？」

「最初は一夏の方が好きだった。誰にも…箒とかセシリアに負けないぐらい。だけどアンタには一目惚れしたの…アンタからしたら幼稚かもしれないけど…好きになった理由なんて自分でも分からなかった。でも…今日分かったの。アンタが私を助けようととっても必死だったことが…だから…だから」

もう普通に泣くでは済まないぐらいになってきた。今にもわんわんと泣きそうな感じだ。俺は短い時間しかなかったが考えてみた。今まで確かに女嫌いを貫いてきた。だけど、前にもセシリアさん達と話をしたときこの人達ならもしかしたら…なんて思ったりもした。その時はまだ疑いの方が大きかった。だから女子とはやっぱり距離を置いてしまっていた。だけど、どうやらそんな日もとうとう今日までみたいだ。

”ペレストロイカか…”

これもそれも凰さんの所為…いやいやおかげなのだろう。今日までの女嫌いはもうお終いにすることにしよう。だけど、根強く残っているから時間はかかるだろうがゆっくりゆっくり自分を治していくことにしよう。

「嬉しいよ」

「えっ？」

ぐすっ、ぐすっと泣いている凰さんにそう俺は言った。だけど凰さんは泣くことをやめることは出来ない。そりゃあ当然か。

「俺さ。今お前に言われてはっきり分かったよ。お前なら信用出来るし、好きになっても大丈夫だって自分に確信が持てたからさ」

「そ、それって…」

「今はお前には勝てない。だけど、そのうちお前が俺の事を好きって事に負けないぐらいお前の事好きになってみせるよ」

「本当？」

「頑張るさ…」

そう言うと凰さんはとうとう感情を抑えることが出来なくなってしまったようだ。

「うっ、うっ…」

「おっと！」

俺に抱きついて思いっきり泣いていた。きっと嬉しかったのだろう。

”もしかしたら…もっと早くこういう風に生活出来たのかもしれない…。俺アホだったんだな”

そんな事を思いながらその時はずっと泣き続ける凰さんを必死に抑

えていた。その涙は俺の服を通り抜けて、自分の肌に直接水っぽい感覚として伝わった。

それから20分くらいして…大体朝の5時と言ったところ。

「アタシ、アンタ…そう言えば」

「ん？」

「この呼び方ももうやめにしない？」

突然の提案だったが俺は素直にそれを受け入れた。

「亮悳でいいよ。俺は？」

「鈴って呼んで！。それもアタシの目標の一つだったの。亮悳にそう言ってもらえるようにするって…」

「そうか…」

俺は椅子に座りながら鈴が再び寝息を立てるまで待っていた。

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

それから間もなくして鈴は再び眠りに就いた。もう5時だ。いつもなら寝坊の時間だ。

「さてと、俺も素振りに行くか…」

俺は今までにない新鮮でとってもすっきりした感覚を身につけて病

室を後にした…。

38話　Перестройка（後書き）

とうとう主人公の考え方が大きく変わりましたね。これからの内容に乞うご期待！。

３９話　３６

素振りのためのバットを自分の部屋に取りに行こうとすると、外になにやら段ボール箱が置かれていることに気がついた。

”甃井、お前に届け物だ。受け取っておくように…。　織斑千冬”

とだけ段ボール箱の上には張り紙がなされている。織斑先生がみんな怖いのだろう。誰一人として先生以外にこの箱に触れた形跡はない。俺が二番目に触るというわけだ。この場ですぐに開けてしまってもよかったのだが、念には念を入れてね…その、何というか…まぁ危険物な可能性もあるからとりあえず部屋に入ってから見てみることにした。

「よいしょっと！」

段ボール箱を丁寧に開けるとこれまた紙袋になにやら服のようなものが入った紙袋と一緒に封筒に入った手紙があった。とりあえず、紙袋を開けて中を見てみると…

「えっ？！」

俺は驚いた。なんとそこには、ＩＳに乗る時に着るアンダーシャツのようなウェアなのだが…３６，２５，３とそれぞれ背番号が書かれていたものが１０着ほど入っていた。サイズはどれも自分にピッタリな大きさ。まさかとは思って、封筒の中も開けてみるとそこにはこんな手紙が入っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

拝啓、新緑深まる季節になりましたね…なんちゃって、もう普通に書かせて貰うよ。君の活躍には僕も嬉しく思う。今度は代表候補生になるんだってね。息子を、そして日韓の人々を救った君には当然の報いだと僕は思うよ。今度会えるときがいつか分からないけど、又必ずどこかで会おう。それじゃあ、もうすぐナイターが始まるからまた今度。　オリックスバファローズ　李承？　背番号3

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そう、このウェアは李承?選手の在籍していた韓国の三星（サムソン）・ライオンズ、日本の千葉ロッテ・マリーンズ、東京の読売巨人軍、それとオリックスバファローズ、更に2006年のWBCで李承?選手が着用した韓国代表のユニホームにそれぞれアレンジされたものであった。どうやら俺が代表候補生になると言うことは李承?選手も知っていたようだ。

「よし、さっそく今朝の練習から着ることにしよう…だけど、どれにしようかな？…やっぱり三星のだな！」

俺はそう決意すると、バットを手に取った…けど、やっぱり何だか眠い。もう少し寝ることにしよう。寝ようにもここで寝ようか、それとも鈴のところで寝ようか…難しい質問だ。

”病室に戻るか…先生もうるさそうだし”

俺は足早に病室の自分のいた部屋に戻った。鈴？…寝息を立てて静かに寝ていたよ、だから俺も隣のベッドで寝ることにしたんだけど…。それから1時間半後、大体6時半と言ったところか。再び目を覚ましてみると何だか右手が重たい。よく見ると

「ぅ〜ん…」

「うおっ！？」

鈴が俺の手を抱きしめて寝ているのだ。ビックリして思わず大声を上げてしまった。だけど鈴は起きない。

「やれやれ…もう少しの間はこのままか」

そんな事を呟いて俺は自由な左手でスマートフォンをいじることにした…。

40話　Morning　Time

それから、10分くらいして鈴はようやく目覚めた。正直ドキドキしたし、手も痛くなってる。

「おはよう…亮憙…ふわぁ」

「おはようじゃない。どうして俺の腕にしがみついたんだ?」

「いいじゃん。好きなんだもん!」

「朝から元気なやつだな…とりあえず、起きるぞ」

そう言うと俺も鈴も急いで自室にそれぞれ戻っていった。今日はこの後実習もある。早速李承?選手がくれたウェアを着てみることにしよう。そんな事を持ってそれらを鞄の中に詰めているとドアがトントンとノックされた。

「はぁい、どなた…鈴か」

「酷い言い方ね!」

「まぁまぁ。俺の女嫌いはまだ治ってないんだ。これから治そうとは思ってるけどな」

そう。鈴と付き合うことを決めたのは本当につい3，4時間くらい前の話。それまでひたすら女嫌いを俺は中学時代から貫き通してきたんだから、すぐにそれが治る訳なんてない。でもまぁ、治せるような自信はあるんだけどね…。それにはまず、布仏さんに謝らなき

ゃいけないな。そんな事を思っている鈴はずかずかと俺の部屋に入ってくる。

「お、おい！」

「亮悳の部屋ってこんな感じなんだ」

「ま、まあね…」

一応言っておくけど、幾ら女嫌いだからって、勿論持つべきものはしっかりと持っている。健全な高校生だからね。えっ？…検閲だって？。心配ありませんよ、どうせ見つからないだろうし。

「でさぁ。亮悳は女嫌いなんだよね？」

「あぁ。そうだけど…？」

「アタシとは学校では今まで通りで行くの？」

「そうするしかないかな。とりあえずゆっくりゆっくり俺も治していこうと思ってるからしばらくはこんな調子だろうな」

そう言うと鈴も一応は納得してくれたみたいだけど…

「わかったわ。でもアタシはこのままなんかじゃイヤだから寮では極力一緒にね！」

と俺に念押しした。すると飛んでくるかのように織斑も俺の部屋にやってきた。

「聳井！」

「どうしたんだ織斑、そんなに慌てて？」

「鈴と付き合いだしたって言うのはホントか？。誰も他の人はまだ気がついてないみたいだけど」

「うん。さすがだね」

「そうなのか…って、お前がか！？」

「ちょっと一夏！。何なのよその言い方は！」

「いやだって、聳井の女嫌い知ってるだろ？」

「それもゆっくり治していこうと思ってるのさ。俺もこのままじゃいけないって思い始めたんだよ」

そう言うと今度こそ織斑も納得してくれてようやく部屋に帰ってくれた。やれやれ、女性と付き合うのは大変だって中学の友達がよく言ってたけど。まさに本当だな。俺も初日…しかもまだ数時間でここまで疲れているんだから。

その後俺は学校に向かった。確かにここでは鈴も約束通り、今までの素っ気ない態度を演じてくれる。だから俺も今まで通りみんなと疎遠な感じを作り出すことが出来る。

「ここの係数は…」

みんなはノートを書いているようだが、俺は既に他の単元を勉強し

ていた。勿論数学だ。

「聳井さん?。大丈夫?」

「えぇ…」

「そう。それじゃあ次の問題に行きましょう!」

そう言って山田先生は又いつもの通り先に進む。谷本さんや鈴が俺の方を見る。もうステータスだ。

”なるほどね、これを微分すると…”

俺はそんな事を思い、

“亮悳って何の勉強しているんだろ?”

と鈴はこの時思っていたんだそうだ。この後はいよいよ実習だぞ…。

41話　実習

さてと、いよいよ実習の時間だ。俺は早速、三星ライオンズの36番の背番号すなわち李承?選手が実際に着用していたものと同じウェアに着替えた。

「あれ?」

「気づいたか織斑?」

「あぁ。それどこで、手に入れたんだ?」

「これ、李承?選手が直接送ってくれたんだよ。ほら、前にさ俺子供東京駅で助けたって言ったよな?。実はその息子さんの親父さんが李承?選手だったってわけさ」

「なるほど…」

デュノアはあの一件以来別の列で着替えることになった。当然と言ったら当然なんだけど、今まで一緒にいたからどことなく寂しい。とは言っても使ってるのは隣の列のロッカーだから俺達の喋ってることはしっかりと聞こえる。

「三星…?」

「あぁ、三星(サムソン)電子のことだよ。韓国の有名な企業さ」

「どこかで聞いたことあると思ったらやっぱりそうだったんだ」

「フランスでも有名なのか？」

「うん。アジアの企業はボクも少しは知ってるよ」

「そうか！」

俺達は楽しく着替えを済ませると急いでアリーナに向かった。そう言えばＩＳは専用機の場合は個々に自分の体のどこかに携帯電話のように持つことが出来るんだそうで織斑みたいに腕時計のように持ったりも出来る。俺はどこにつけようかな…？。悩むなぁ、ＩＳはなるべく身近なところにつけたいけどピアスとかみたいに自分の体を傷つけるのは嫌だし、かと言って腕だと織斑と同じだしなぁ…。まぁとりあえず俺は左利きだから右手につけることにしよう。それが一番安全だ。

「よし全員揃ったな！。今日の訓練は飛行訓練だ。各自専用機を持っているやつのところに適宜散らばれ。聳井、お前も今日に限ってはまだ専用機を持った直後だから練習機生と同じようにすること。以上！」

俺は例によって織斑のところに行こうとするが鈴はそれを由とはしてくれるのだろうか…こっそりと目を見てみるがいいよと言ってるような気がする。だから俺は織斑のところに行くことにしたのだが…

「あっ！」

「ぁっ…」

そこには先客の布仏さん、谷本さん、鷹月さん達がいた。この人達、俺とは今敵対中だからあんまり関わりたくない。俺は去ることにし

たが…

「まって！」

と谷本さんが俺を止めた。

「はい？」

「そのさ…この間は本音を助けてくれてありがとう…」

「…」

「それから…その…ごめんなさい！」

「…」

「聳井の思いも知らないでいろいろして…」

「…」

俺は返答に困った。今までの女嫌いの俺ならもしかしたら又変なことを言い返していたかもしれない。だけど今の俺はもう違わなくちゃあいけないんだよね？。

「起動！」

日韓共同開発のＩＳは水色を基調とした塗装でまるで大韓航空と全日空を足して二で割ったような感じだ。

「お、おい聳井！」

「なぁ、織斑」

「ん？」

「この３人に俺達で教えてやろうぜ」

そう俺が言うと他の４人はみんないい顔になった。その後のことは、言うまでもないだろう。これってもしかして李承？選手のおかげなのかなぁ…？。

43話　Ｔｅａｃｈｅｒ（前書き）

４２話は縁起が悪いですので欠番とさせていただきます。

43話　Teacher

女嫌いを克服するにはこの実習の指導って言うのはなかなかいいもんだ。とは言っても今日は俺が指導を受ける側なんだけどね…。

「そうそう、そんな感じなんじゃないかな？」

「おっ？。専用機持ちからそんなこと言われるって事は…こりゃあいいみたいだな？」

「お前だって持ってるだろ鵜井？」

「あぁ…そうだったなぁ…」

「「ははははは！！」」

少し後ろ側には飛行の訓練をしている、例の三人組がいる。いやぁそれにしても縁って言うのは…俺がか語れる立場じゃないけどもいつも間に仲直りも済んだことだし…これで織斑先生から又お咎めを受ける心配もない。

「おい！」

いや、どうやらまだ一つだけけりをつけなくちゃあ行けない大事なことが残っていた。

「私の昨日の動きはいかがだったかな？」

「おぅ、人殺しとしてはいい動きだったよ」

「く、き、貴様…」

「言い返せないだろ?。オリンピックに凶器を持って出場するような真似して楽しいか?」

「く…」

「覚えとけ、クラス対抗戦。お前は俺と織斑で倒してやるから…」

「えっ、なんで俺も?」

「まぁ勝てるだろ?」

そう言うとラウラさんは俺に向かって銃を突きつけた。おろおろしているのは回りの布仏さんだとか昨日痛い目に遭ったセシリアさんや鈴、それから織斑達のようだ。

「ふざけるな!。お前達の方が卑怯じゃないか!」

「卑怯?。俺は銃で戦うつもりはないぞ。この直刀さえあれば十分さ」

「な、何だと!…ふふ、ははは」

「…」

「面白い。是非とも楽しみにしておいてやる。覚悟しておけよ…」

辺りが白ける。まぁ当然かぁ。そんな事を思っていると、ラウラさ

んは銃を俺から離して自分の元へと戻した。

実習が終わり、更衣室に再び戻ると織斑とデュノアが俺の元にやってきた。

「どうしたんだ二人とも？」

「聲井、大丈夫なのか？」

「何がさ？」

「何がって…一夏と聲井がラウラと戦うことだよ。彼女、この間見てたけどとっても強そうだったよ。攻撃も跳ね返しちゃってたし」

確かにデュノアの言うとおりだ。彼女のＩＳにはＡＩＣ…慣性停止装置という相当強力な武器があるのだ。これは相手の攻撃を無効化というか押さえ込まれてしまうもので一対一ならある種のインチキに近い防御法なのだ。だけどそれの欠点が昨日鈴達の戦いで分かった気がする。

「大丈夫さ…それより、今日は素振りする？」

俺の変わらない感覚に二人は、安心したようだ。俺達は信用され合って信用し合っている、そう言う仲だからこういうときの結束力は特に凄い。

「あぁ、聲井。今日は久しぶりに素振り俺もしたいよ」

「いいよ。見てやるよ」

俺達は教室に戻ろうとする。するとデュノアが俺達を呼び止める。

「二人とも。何かあったらボクも助けるから…」

「よろしくなデュノア」

「頼んだぞ、シャルル」

”い、一夏…”

俺には大体分かっている。どうやらデュノアも織斑にそう言う感情を抱いていると言うことを…。だけど織斑は演じているかのようにそれに気づかない。

「ふふ…」

「ん?。どうしたんだ聲井、急ににやついたりして」

「いやぁ…何でも?」

「そうか…」

こういうことは本人に気がつかせるのが一番だろう。

さてさて、空があかね色から徐々に暗くなろうとしている、午後5時過ぎ。俺達は外にいた。

「いやぁ…よかったよ。やっぱりお前の教え方は上手いさ」

「そう言ってもらえると…照れるなぁ」

「本当か？」

「冗談に決まってるだろ？」

俺達が談笑しながら寮に戻っていると、なにやらラウラさんと織斑先生が何かを話しているのを見つけた。

”織斑？”

”わかった。あの木の陰にでも…”

”了解”

「答えて下さい教官！。なぜこんなところで」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある…それだけだ」

どうやら口論とまでは行かないが、珍しくラウラさんが感情的に話している。どうやら、ドイツ時代に教わったと言うことは間違いないようだ。

「こんな極東の地で、何の役目があるというのですか！。お願いです教官、我がドイツで再びご指導を！。個々ではあなたの能力は半分も活かされません！」

「ほぅ」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません。危機感に疎く、ＩＳをファッションか何かと勘違いしている。

そのようなもの達に、教官が教える時間を割かれるなど…」

「そのくらいにしておけ小娘」

「あっ…」

「15才でもう選ばれた人間気取りか？」

「くっ…」

そう声を漏らすとラウラさんはどこかに行ってしまった。俺達も逃げようとしたのだが…

「待て！。聳井！、織斑！」

どうやら織斑先生に俺達の存在は気づかれていたようだ。

「盗み聞きをした挙げ句、逃げ出すつもりか？」

「ち、千冬姉そんなことは…」

「学校では織斑先生と呼べといってるだろ？」

「うぅ…」

「これはこれは、先生には俺達の隠れなんて甘いのですね…」

「当たり前だ馬鹿者！」

「すいません…」

「ところでお前達。」

「「はい？」」

「今度の対抗戦は期待している。いい結果を残すようにな…」

そう言うと織斑先生は再び学校の方に戻っていった。その帰路、俺達は終始黙って寮まで向かった。

「聲井…」

その沈黙を破ったのは織斑で、俺が自室に入ろうとドアに手をかけたときだった。

「ん？」

俺は目をわざと遭わさないでドアに顔を向けたままそう言い返す。

「お互い頑張ろう！」

「勿論だよ…」

俺は織斑の力強く決心した声にほっとした。それは

”俺も頑張らないとな…”

と自分に決心させるほどのものであった。

部屋に入ると何かがおかしい。もう灯りがついている。

「おかしいなぁ…学校に行くときちゃんと切ったはずだったんだけどなぁ…」

奥の方まで行ってみるとその理由がはっきりと分かった。

「おかえりー！！」

「鈴！。お前、なんでここに？」

「何でって、彼氏の部屋に遊びに来て何が悪いの？」

「いや、悪くはないけど…どうやってここに入ったんだ？」

「明恵って意外と不注意なんだね。鍵かけ忘れてたよ」

「あっ…！！」

確かに今朝はいろいろあって鍵をかけなかったかもしれないなぁ…。と言うことを今思い出した。

「そうだったのか…」

「少し話そう？」

「はぁ？」

「いいからいいから。さぁ座って…」

「お、おぅ…」

それからしばらく俺は鈴と会話をすることになった。まぁこれも女嫌い克服のためのステップなのかなぁ？…。

４５話　Ａｇａｉｎ（前書き）

４４話は縁起が悪いですので欠番とさせていただきます。

45話　Again

女性の話って言うのは何だかいつも自分たちが中学で話してる内容とは違っていた。

「それでさぁ…」

「おぅ…」

男子と話しているとスマートフォンだとかパソコンのネタでしばらくは語り合うことも出来るのだが女性にはちんぷんかんぷんのよう。逆に鈴が話していることも俺にとってはよく分からない。だからあんまり盛り上がらないのは必至なことだ。

「ねぇ！」

「ん？」

「ところで明憙、アンタ、ラウラに決闘申しこんだんだって？」

「ダメか？」

「意外に命知らずなのね」

「はっ？」

と、その時…

「鈴さんの言うとおりですわ！！」

誰かの声が突然したかと思ったらドアがバターンと豪快に開いた。
又、鍵を俺はかけ忘れていたようだ。

「だからやめようって言ったのに」

「い、一夏さん卑怯ですわ！」

どうやら外で盗み聞きされてしまっていたようだ。いやぁ、重要なこと話さなくてよかったよ本当に…。

「お、お前等…」

「あっ、聳井…これは、その…」

「まぁいいや。お前さん方も折角来たんだからなんか話さないか？」

「「えっ？！」」

「なんだなんだ？。盗み聞きしたくせに話は出来ないって言うのか？」

俺はにやつきながらそう言い返す。二人の驚いた顔があまりにもおかしかったから少しからかってやろうと思ってしまったのだ。だけど、二人は真に受けてしまったようで…

「あ、あぁ…構わないぞ」

「い、いいですわよ」

とびくびくしながらベッドの上に座った。実はさっきまでは椅子に座って鈴と話をしていたのだがベッドの方が楽じゃないかという結論にいたって座る場所を変えることにしたのだ。

織斑のおかげ正直なところ俺は助かった。男女関わりなく今まで順当にいろんな人と付き合ってきたであろうというのが織斑だから、色々とフォローしてもらえたし話も俺と鈴だけの時よりは膨らんだ。

「ははは。それは織斑がさぁ」

「えっ、一夏さんが…ですの?」

「違うだろ。あれは甕井がノックしてやるって言ったから」

「えっ?…そうだったっけ?」

すると、セシリアさんは俺のベッドの壁の脇に貼ってある野球選手に少し興味を抱いてくれたようだ。

「ところで甕井さん。この…野球でしたっけ?…の選手は一体誰なのですの?」

「アタシも気になってたわ。ハングルで書いてあるから日本人でもなさそうだし」

そういえば、鈴にもまだ話していなかったなと俺は思ったからいい機会だったしみんなに李承?選手のことを説明することにした。

「織斑にはかるぅく言ったかもしれないけど、この選手は李承?選手って言って韓国のスーパースターなんだよ。今は日本のオリック

スでプレーしてるんだけどね。ほら、俺のＩＳようのウェアとユニホームの上半身がそっくりだろ？。実はさ、この間東京に出かけたときに李承？選手の息子が駅で一人迷子になっててね…助けてあげたからって、李承？選手がこのウェアをプレゼントしてくれたんだ。いやぁ…本当に嬉しかったよ」

すると…

「そうかぁ、それは作った甲斐があったよ」

「ん！？…李承？選手？！」

こう言うのなんて言うんだっけ？。まぁいいや。とにかく俺の目の前には本当に李承？選手がいた。

「元気にしてた？」

「え、えぇ…でもどうしてここに？」

あぁ、そう言えば他の三人もベッドに座りながら俺と承？選手の会話を唖然と聞き流している。と言うのも俺達は今韓国語で会話をしているのだ。

「一度でいいからここに来てみたくてね。お前のいる内にさ」

「はぁ…なるほどって！」

「ん？」

「ナイターは？。今はシーズン中ですよ！」

「あぁ。今日は移動日だから大丈夫なんだよ。明日から巨人との交流戦だしね」

”そうか…もうそんな季節になってたのか…”

巨人と言えば昨シーズンまで李承?選手がいた古巣だ。岡田監督もきっとスタメンで出してくれることだろう。

「何度も放送で呼び出してやったのに…この大馬鹿ものが!」

「せ、先生!」

俺はこの部屋の放送機の音量をミュートにしていたから聞こえるはずがなかった。

「ははは。いいんですよ、先生。僕も聳井君に会えて嬉しかったですから」

「承?さん…」

「お前もこれからしっかり頑張るんだぞ!。先生から聞いた話だと女嫌いなんだって?」

「えぇ…今はそれを克服中なんですけどね…」

「そうかそうか!。それはいいことだぞ。いずれそれが分かる日がやってくるさ」

「そう…ですか?」

「あぁ！」

俺も承?選手の言ってることを信じてみることにしよう。もしかしたら本当にその通りなのかもしれないな。今の時点で鈴に会えて自分を変えるきっかけを作ってくれたことに既に感謝してるんだから。

「それじゃあまたね」

「えっ、もうですか?」

「シーズン中だから」

そう言い返されて俺は笑うことしかできなかった。

李承?選手が去った後…俺は今度鈴、セシリアさん、織斑以外のたくさんの人に質問攻めを受けた。どうして野球選手が知り合いなのかって…。勘弁してくれよ、いくら何でもこれはハードル高すぎるぞ…。

46話　MidNight

みんなが寝静まった夜の寮って言うのはどことなく怖さえある。今日はさっき李承?選手にあったからか知らないが何だか興奮してよく眠れない。だから俺は今寮の中をさまようかのように歩き回っている。

「ふぅ、こっちの方に来たのは初めてだけど…やっぱりおっかないな」

消火栓の赤いランと非常口を示す緑のランプが交差する、どことなく何かが出てもおかしくないようなところだ。

スタスタ……スタスタ…

”ん?”

何か自分のリズムに合わない足音が聞こえた。しかもそれは俺が止まるとその足音も止まったのだ。誰かにつけられているかもしくは…。

”まさかなぁ…”

俺は２０％の恐怖心と７５％の興味と５％の余裕を兼ねそろえて、向かってみた。すると…誰もいない。

”あれれ?…気のせいか?”

俺は残念に思いながらも再び足の向きを元々の方へ向けた。そうい

えばスマートフォンに懐中電灯のアプリがあったからつけていくことにしよう。

懐中電灯をつけると尚更、怖さが増大した気がする。意外にも月の明かりの方がいいようだ。何だかこのスマホのライトは白すぎて、しかも目の前しか明るくならないから余計に怖くなってしまう。

”こういうときって何かとサプライズ的な要素がある筈なんだけどなぁ…”

俺はこんな事を思ったことを、次の瞬間心底後悔した。後ろの方で空きカンのようなものがそれなりに高い位置から落ちたような音が聞こえたのだ。

”ん?。本当にサプライズか…?”

俺はカンの音がした方向に向かった。

”やれやれ、ビールのカンがこんなにたまるとはなぁ…洗った後つぶして、資源でゴミに出さないといかんな。ん?、誰か来るな…”

実はカンを落としたのは織斑先生。たまったビールカンを洗っていたときに落としてしまったようだ。

「うわわっ!!!!」

俺は織斑先生に脅かされてしまった。何て言うか、その…先生が髪を濡らしてこっちを睨んできたから…暗くてよく見えなかったし…とりあえず俺は大声を上げて自室に戻った。

翌朝、案の定俺は寝不足になった。目の下には…

「聳井さん！、どうしたんですの、そのクマ」

「あぁ…よく眠れなくてね。今日は授業中寝ちゃうかもなぁ…」

「それは認めないわよ」

「勘弁してくれよぉ…ふわぁ」

「遅いぞお前達！。早く食堂に行け！」

「「はい！」」

「はぁ～い…」

俺の眠そうな後ろ姿を織斑先生は

”あの大馬鹿ものが…でも、意外な一面が分かったな…”

と思っているのだった。

47話　密告

眠気は酷いけど…授業はいつも通りちゃんと行われる。しかも鈴が寝させてくれない。

”えっと、これは偏微分と…ｚｚｚ…危ない危ない…ｚｚｚ…ｚｚ”

この睡魔って言うのは怖ろしいもんでねぇ、逆らおうに逆らえない。

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

「あっ！」

しかも鈴に気づかれたら最後、机をごつごつと蹴られて睨まれる。授業はちゃんとききなさいとでも言いたいんだろうか…。そうそう、俺は今数学を解いてるけど授業は山田先生の専科だ。

「うぅん…ｚｚｚ　ｚｚｚ」

”まただわ！！、もう亮憙…”

俺は今度は机をごつごつされても起きなかった。どうやら本当に眠かったようだ…。

気がつくと授業終了の鐘が鳴ろうとしていてみんなが片付けをしようとしている頃であった。俺も急いで片付けようとすると…鈴にまたまた睨まれた。それにしても寝るのってそんなに悪いのだろうか。

「礼！」

いつも通り授業を終えてほっと一息すると、早速鈴が俺の目の前にやってきた。そういえば明日か明後日ぐらいかがクラス対抗戦だったっけ？…。

「ねぇ！」

「ん？」

「アンタ、どんだけ寝てんのよ。困ってもノートとかは貸さないわよ！」

「まぁまぁ。今日は俺もつかれてたんだよ…」

鈴は呆れた様子でどこかへ行ってしまった。俺は…やっぱりまだ眠い。

”昼は今日いいや…もう少し寝てよう”

授業中に寝ないようにと思って眠りに就いた。そのおかげか幸いなことに、午後の授業は問題なく聞くことが出来た。だけど、鈴の顔は晴れなかった。

「それじゃあ今日はここまで」

先生の一言で学校の今日の授業は終わった。

「礼！」

号令も済ませて自分の席に再び座ってのんびりほっとしていると鈴が目の前にやってきた。

「ちょっとアンタ！」

「んぁ？」

「そんなに…眠いの？」

「ぅん、今日は疲れちゃってね…」

「そぅ…」

「いけねぇいけねぇ…早く部屋に戻ろう」

「あっ、ちょっと！」

鈴はまだ話をしたがったようだがさすがに怪しまれてしまうからここで一旦打ちきりだ。俺は鈴の耳元で

「続きは部屋でな…」

とそう呟いた。

早速部屋にクタクタの思いで到着した。今日は何だかとっても疲れた気がする。何だか夕食を摂るのも億劫になってきたし、言い忘れていたがクラス対抗戦は鈴のトラブルもあってか延期になって明日にようやく開催されるとのことだし、早く休まないとなって感じだ。

”寝よう…”

俺は再び眠りに就こうとして目を閉じた。それと同時にドアが開いた音がした。

「聳井！。大丈夫か？」

「お、織斑…先生？」

「亮悳！」

「りんまで…ｚｚｚ　ｚｚｚ」

「おい！」

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

「ダメです先生。完全に寝ちゃってます」

「全く、今朝のことがよっぽど尾を引いたようだな」

「今朝？」

「実はな…」

この後織斑先生は鈴に今朝あったことを全てばらしてしまった。このせいでどんな目に俺がこの後遭うかなんて、眠ってる俺には当然分からなかった…。

48話　恐怖

変な時間に寝ちゃったから変な時間に起きてしまった。今は夜中の2時16分だ。因みにこの2．16というのはとある国のお偉いさんの誕生日でもあるんだよねぇ。おっと、そんな事はまぁさておき…

「どうしようかな？」

と俺は呟いた。外を見てみると真っ暗でただただ波の音が遠くから聞こえてくるだけだ。今日はクラス対抗戦をこの後数時間後に控えているわけだから休んでおかないと致命的なことになる。

”寝ないといけないんだけどなぁ…。ヤバい、口の中乾ききってるなぁ…”

とりあえず洗面所に俺は向かった。歯を磨いて、その後冷蔵庫のお茶をグイッと一気飲みすると俺は再びベッドの中に潜り込んだのだが…何だか変な感じがする。何というか足下がくすぐったいのだ…。

「ん？」

「うぅ…ぅぅ…」

なんだか変な声が聞こえた気がした。

「うぅぅぅぅぅ」

しかもそれは俺の顔の方に近づいてくる。こういうときって何でか

は分からないが体が動かなくなってしまうものだ。俺もまさにその通りで、逃げようにも体の大体半分くらいがもう既に眠ってるような状態だから思うように体を動かすことさえ出来ない。

「ひっ！」

「わぁっ！」

「り、鈴！？」

「ビックリした明彦？」

「あ、当たり前だろ！」

「よかった」

「あのなぁ。俺をおもちゃにするなって…いきなり寄っかかるなよ」

「ドキドキしてるね」

どう釈明しようか。鈴のせいと言うべきかそれとも怖かったと言うべきか。

「あ、当たり前だろ。その…女にそんな事されたら誰だってそうなるんじゃないの？」

俺は前者でも後者でもなく新たな返答をした。

「そうなのかな？」

「まぁそれはさておき。お前どうやってこの部屋に？」

「あぁ、実はね。さっき千冬姉…いや織斑先生とアタシが一緒にこの部屋に来たのは覚えてる？」

「あぁ…そんなことあったなぁ」

「その時からずっとのこってんの」

「お前さぁ…」

俺が言葉を続けることを出来ないように鈴は俺に抱きついてくる。

「お、おい！」

「今日は頑張ってね」

「あぁ、当たり前だろ？。お前の敵も取ってやるからな」

「うん！」

そう言うと鈴は俺の部屋から去っていった。自室の…セシリアさんと同じ部屋に戻っていったようだ。

「ほっ」

俺はまたまた独り言のようにため息をはいた。さてと、あれ？…何だかまた眠くなってきたぞ…こりゃあいい…また朝にすぐになれるなぁ…。

49話　クラス対抗戦　前編

やっぱり朝はやってきた。と言うか今日はクラス対抗戦の日な訳で…たくさんの観客とギャラリーがいる。本当に野球選手に自分がなったような気分だ。と言ってもまぁこの間セシリアさんと決闘したときにもそんな場面に俺はいたから慣れた…うぅん?…やっぱり慣れてないか…。

「おいおい甚井」

「ん?」

「大丈夫なのか?。アリーナの席、満席だってさっき千冬姉が言ってたぞ」

どうやら俺達の闘いには相当な興味が皆さんにはあられるようだ。

「まぁ、何とかなるって…」

「本当か?」

「あぁ」

俺達は第1試合を見ていた。あっ、そうそう。鈴とセシリアさんは先日の一件で今日は試合出場停止処分を受けている。鈴なんかは出たい出たいって山田先生に言いまくった挙げ句、織斑先生にげんこつを受ける始末。やれやれって感じだよ。

「さてと…俺達の出番か」

「あぁ」

俺と織斑も準備を済ませてアリーナに向かった。

「これより、男子生徒女子生徒による対決を行います。男子は、聳井亮悳、織斑一夏、シャルル・デュノアの3名、女子はラウラ・ボーデヴィッヒです。今回は3対1の変則体型にて試合を開催いたします」

その瞬間、アリーナ中を歓声が駆け抜けた。そりゃあそうだろう。織斑もいるし、デュノアもいるし。

「ふん！、おとなしくしていればいいものを…」

「ラウラさん。俺がそんな性格じゃないっての知ってんでしょ？。考えてものは言わないとね」

「くっ…。覚悟しておけ、新人候補生」

試合開始を告げるホイッスルが高らかに鳴った。ラウラさんは余裕な顔をして攻撃をしてこない。きっとＡＩＣが有るから奢ってるんだろうな…。やれやれ、祇園精舎の鐘の声って言ったもんなのに。

「織斑、左につけ」

「わかった！」

ようやく、ラウラさんも俺達が攻撃態勢に入ると発砲を開始した。

「ほらほら！。貴様等の実力などそのようなものだ」

「強いな」

「イェー」

意外な事に織斑のつぶやきに俺は韓国語で言い返せるほどの余裕があった。何となくではあったが、彼女の攻撃には隙があるような気がしてならないのだ。

「てやっ！」

「甘いな」

「何！」

織斑の攻撃が跳ね返されているというか…彼女に指一本触れることすら満足に出来ないようだ。これがＡＩＣかって思わせるには一番いい方法なんだろうな。

「うわっ！」

織斑ははじき飛ばされた。

「危ない！」

急いで俺も助けに向かう。幸い大事には至っていないようだ。だが問題なのは織斑のＩＳの方であった。

「悪いな」

「いやいや」

「ところでさ」

「ん？」

「聳井どうしたんださっきから余裕そうな目してるけど」

「この間やったこと試そうと思ってさ」

「この間って…まさかあれか？」

「そう、あれさ」

「でも、それは危険なんじゃ」

「うるさいうるさい。デュノア、織斑の手当を頼むわ」

「う、うん」

さてと、この間の確率勝負に出てみるとするか…。

５０話　クラス対抗戦　中編（前書き）

暫くの間、作者がテスト期間に入りますので投稿が不規則になってしまう可能性がございます。読者の皆様には多大なご迷惑をおかけいたしますことお詫び申し上げます。

追伸：後編につきましてはなるべく早く投稿する予定でございます。

50話　クラス対抗戦　中編

俺は早速ラウラさんと一対一の感じになった。この間に織斑はデュノアがＩＳに詳しいと言うこともあって色々整備して貰っている。

「ほぉ、お前だけがやられにきたのか。仲間のために自分だけが犠牲になるとは…」

「口数が多いほど気が散るぞ…」

「うっ」

「お前さん、隙あるんじゃないの？」

「な、なんだと！？。私のどこに隙があると言うんだ！」

その途端、俺はラウラさんに向かって直刀をかざした。勿論左手で。だけど、案の定それはＡＩＣによって跳ね返されてしまった。いやいや、計算通りだった。俺はこの瞬間を狙っていたのだ。

「ぐわっ！」

さっき織斑には俺が向かうからその時にどさくさに紛れてデュノアと一緒に後ろから攻撃しろと言っておいたのだ。多分いつものラウラさんならば、自分の背中側に敵がいることも把握出来ているのだろうが今日はそういうわけではなかったようだ。このＡＩＣという武器、どうやら自分と面と向かっている人にかなりの集中力を必要とするようで、後ろのことまでいちいち気を配っていられないみたいなのである。ということは、俺がおとりになってその隙に後ろか

ら攻撃すれば…どうなるかは大体読者の皆様にもご想像がつくだろう。ラウラさんは負傷した。だけどさすがは軍人だ。そこまでまだ有効的な攻撃を俺達はさせてもらうことが出来ない。

「くっ、これしきのことで…」

「言っておきますよ。こっちは3人ですから」

「ぐはっ！」

「甘いよ！」

「うわっ！」

「織斑！」

「一夏！」

俺とデュノアの同時のかけ声に織斑は

「よしっ！」

と応えて最後の一撃をした。歓声が沸き起こるアリーナ、俺達も手を取り合ってハイタッチを使用としたのだが…一向にラウラさんが起き上がろうとしない。

「おい」

「どうしたの石井」

「見てみ、ラウラさんの様子がおかしくないか？」

そう俺が聞いた瞬間にラウラさんは何か雄叫びのようなものを挙げたと思うと忽ち黒い霧のようなものに包まれた。アリーナでは警報が鳴って生徒の安全のためシャッターが同時におりた。何だかいやな予感しかしないぞ…。

51話　クラス対抗戦　後編

しばらくしていると、織斑先生から無線が入った。

「聞こえるか？」

「「「はい！」」」

俺達三人はほぼ同時に言い返す。どうやら問題なく聞こえているようである。

「ラウラの件に関してだが…ＶＴシステムがどうやら作動しているようだ」

俺にはＶＴシステムが何かと言うことは分からなかったが、とりあえずやばそうだなってことはわかった。何とかして彼女を助けて出さないと、最悪の事態に至ってしまう可能性も少なからず存在する。今まで、

「織斑、下がれ！」

無線で交信中な訳だが相手からしたら、そんな事は関係ないようだ。というか、このＶＴシステムとか言うやつ、ラウラさんの艦上とは又違って会話が出来るわけでもなくただただ攻撃をしてくるだけでまルで野球で言うところのピッチングマシーンのような感じだ。

「危ねぇ…」

発砲を続けるラウラさんに俺達な為す術もなくただ突っ立っている。

これはこれでまずい。

その後俺達は真っ黒いのに攻撃を仕返してみたが、全くといっていいほど歯が立たない。さすがは織斑先生の分身と言うだけある。いや…分身でももしかしたらないのかもしれない。これは単なる真似っこなんだから。

「ぐわっ！」

と、その時。とうとう織斑が攻撃を喰らってしまった。もうエネルギーが枯渇してしまっているようだ。俺も後、数分ぐらいしかまともに飛ぶことが出来ない。どうしようか…。

「くそっ！…、せめて兵装だけでも…」

織斑がそう嘆いたとき

「聳井」

ど小さな声でデュノアが呼んだ。

「どうしたんだデュノア？」

「ボク達のエネルギーを足した状態で何とか一夏の零落白夜が作動するかもしれないんだ」

「なるほど…じゃあお前さんはエネルギーを織斑にあげたいと…」

「うん…」

「でも、そんなことできるのか？」

「まかせて」

「よし、なら俺も賛成だ」

その後俺とデュノアは織斑に自分たちにあるエネルギーを全て渡した。

”あれは千冬姉なんかじゃねぇ…絶対に倒す！！”

そう決心したであろう織斑の攻撃は、それまでのとは違って何かを感じさせるものであった。徐々に相手の戦力も鈍っていき、しまいには倒すことに成功した。

「よしっ！」

すると、それまでのＩＳのような真っ黒い物体はまるで雲のように立ち消え、ラウラさんはその場に倒れ込んだ。その後のことは俺達には詳しくは分からない。とにかくラウラさんはストレッチャーで搬送されたことまでは分かっている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやぁ、よかったな織斑！」

「あぁ。ラウラも助かったことだしな」

「でもラウラさんのＶＴシステムって危ない代物だな」

「ボクも少しだけ聞いたことがあるよ。でも、開発は禁止なってるはずなのに…」

デュノアの言ってることなら不思議でも何でもない。何てったってドイツとフランスはお隣同士だもんな。

とりあえず、織斑の部屋でのんびりとそんな言葉を交わしていると、山田先生がやってきた。

「登井君、織斑君、デュノア君。待望の男性用大浴場が出来ました！」

「「「えっ？！」」」

さてと、この後どうしようか…。

52話　クラス対抗戦　後日談（前書き）

昨日のオリックスは李承?選手のタイムリー、バルディリス選手のホームランで日本ハムを下しました。後半戦で絶好のスタートを切ったと思います。これからもクライマックスシリーズ、そしてその先へと頑張って欲しいものです。

52話　クラス対抗戦　後日談

ここの風呂は…でかいの一言に尽きる。まるで音泉旅館の大浴場くらいの大きさを誇っていて少しぐらいなら泳ぐことだって出来るぐらいだ。

「お、織斑」

「な、なんだ？」

「すごくねぇか？」

「あぁ…」

俺達二人は風呂の入口の戸を開けた瞬間にそう言った。まさに絶句というやつだな。

ここを男子二人が独占していいって言うんだから最高だ。

「おぉ～いい湯加減だなぁ…」

「本当だなぁ」

「今日のクラス対抗戦の疲れが癒されるわ～」

実を言うとクラス対抗戦はラウラさんの一件の影響で今度こそ完全に中止となってしまった。早い話が予選会だけで終了してしまったと言うことだ。

「ふぅ…」

「聳井、背中流してやるよ」

「おぉ、あんがとぉ」

俺達は一旦風呂を上がると洗面器やシャワーがあるところに向かった。

「織斑うまいなぁ」

「だろ？」

のんびり背中を洗いあうなんて…中学の合宿以来だ。

さてさて、のんびり風呂に再び浸かりながら俺達は話を始めた。

「そういえばさぁ、ラウラさん大丈夫なのかな？」

「どうだろうな。千冬姉の話だと怪我事態はたいしたことじゃないらしいんだけどさ」

「もっと精神的にって事か？」

「あぁ。何でも負の感情が影響してるとかって…」

「へぇ…発狂みたいな感じなのかね？」

「どうなんだろうな…」

それで会話が終わってしまいそうになって若干、変な空気になっていると突然後ろの風呂への入口のドアが開いた。もしかしてのもしかして…

「シャルル！！！」

「でゅ、デュノア！！！」

「ちょっと、二人ともこっち見ないでよ！。恥ずかしいんだから…」

「あぁ…」

「ごめんごめん」

俺達はビックリした。まさかデュノアが入ってくるだなんて思いもしなかったからだ。もう少ししたら、スライディングでもふざけてここでやろうかなって思ってただけに、ほっとしている。まぁデュノアも今のところ学校では男子という扱いになっているから、おかしくはない。俺は上がろうとしたんだけど…

「聲井、行かないでくれ」

「はい？！」

「俺とシャルルだけになると色々とさぁ」

「うぅん…いいけど、俺いつも風呂上がるの早いからのぼせるぞ」

「大丈夫だって」

という感じで居残る形となった。

３０分くらいして、デュノアも湯船に浸かった。勿論この時は、俺達はわざと目を反らしたけどね。すると入るやいなや…デュノアは俺達に話しかけてきた。

「一夏、聲井」

「ん？」

「どうかしたのか？」

呼ばれた順に俺達も聞き返す。

「ありがとう。二人のおかげでここに残ることも出来て、本当に感謝してるよ」

「気にするなって、シャルルがいてくれれば俺も嬉しいしさ」

「本当？！」

「本当だよ」

「聲井は？」

「同じに決まってるだろ？。大切な友人がいなくなるのは俺も嫌さ」

「あ、ありがとう」

「で、そんなことよりももっと重要なことがあるんじゃないのか？」

「えっ？…そっか、甃井にはもうお見通しなんだね」

「どういうことだ？」

織斑も慌てた様子で聞き返す。別に俺も何をデュノアが言うのかは分からないが何となく分かった。ほら、テレビのドラマとか見てると、次に何が起こるかって言うのが大体予測出来るっていうような感じだ。そんな雰囲気に似ていたから俺には何だか分かったような気がしたわけだ。

「実はさ、明日からボク考え方改めようと思って」

「考え方？」

「そう…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翌朝、俺達のクラスでは朝一で臨時のホームルームが開かれた

「えっと、今日は転校生を紹介します…」

”えっ？”

”どういうことなの？”

”明悳に後でとっちめないと”

と他の人達は思っているようだ。真相を知ってるのは俺と織斑と…

前にいるやつだけ。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、よろしくお願いします」

「つまり、シャルル君は…シャルロットさんだったというわけで…」

「待って待って！。昨日確か男子の大浴場出来たって訊いたけど」

どうしてそう言う情報は早く回るんだろうなぁ…。本当に厄介なことに…

「うぅぅぅぅ」

もうなったか…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

更に更にその夜。

「どういうことなのよ明悳！！！。説明してよ」

「だからぁ…デュノアは女だったってこと、これでいいのか」

「全然分からない！」

「うぅん、そうとしか言いようがないんだよなぁ…」

「だぁもぅ！！」

「お、おい！」

俺は鈴にベッドへ蹴っ飛ばされた。

「イタタタタ」

「犬に噛まれて死ね！！。風呂行ってくる！！」

鈴は怒った様子で部屋を出て行った。やれやれだなぁ…。

”もぅ、あと少しで明恵に飛びつくところだったよ。アタシも気をつけないと…”

お互いに考えてることには格差があるようだ…。

53話　AM　2：00

何だかよく知らないがとりあえず鈴を怒らせてしまったことに間違いはないようだ。

”明日謝らないとなぁ…”

そんな事を思いながら、まだ9時過ぎであったが、昨日今日といろいろあったので寝ることにした。

「………ん？！」

そうだったそうだった。すっかり言うのを忘れていたことがあった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それは今朝の授業前のホームルームのこと、デュノアが自分が男子でなく女子であったと告白すると

「そう言えば昨日男子の大浴場が完成したって聞いたわ」

「えっ！！。それってもしかして甃井君と織斑君が一緒に風呂に入ってたって…」

まずい、まずいことになったぞこれは…間違いなく批難と質問の嵐になりそうだし

「うぅぅぅ…」

”ア～キ～ノ～リ～！！！！！”

と言う顔をしながらより一層強く鈴も睨んできている。俺は織斑にサインを送った。実は数日前に二人で決めた暗号だ。

”織斑、逃げよう…”

”でもどうやって？”

”任せろ！”

「一夏さん！！」

「一夏！！」

「うげぇっ！。なんでセシリアと箒が…」

「覚悟！」

「ひいっ！！」

と、その時…何者かが篠ノ之さんの竹刀を止めた。その姿というのは…とっても意外な事にラウラさんだったのだ。昨日まで、敵だと思っていたのに。まさに昨日の敵は今日の友だ。

「さ、サンキュー、ラウラ…！！」

と、その時である。大胆にもラウラさんは顔を赤くしながら織斑の唇…ようはファーストキスを奪ってしまったのだ。

「お前は今日から私の嫁だ。異論は認めん！！」

続けざまに行ったラウラさんの一言に俺はビックリした。今思えば、これはこれで逃げるチャンスだったのかもしれない。この機会を逃した俺は少なくともその後痛い目に遭った…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

思い出してしまうと、なかなかあのシーンはいいものだったと思う。他者から見た限りだが…。多分ラウラさんも織斑に惚れてしまったんだろう。だけど、一番リードしているのは今のところラウラさんと言ったところだろうか。その時だった。とつぜん、ドアがノックされた。

「はぁい…ふわぁ」

俺はあくびをしながらドアを開けた。

「済まん…ってもう寝ているのか？」

「わるいですかねぇ？」

「いやいや、ところで何だが…」

「織斑の部屋はどこですかって？」

「そうだ…ってどうしてそれがわかった！！」

〟そりゃあねぇ、朝っぱらにあんなもの見せつけられたら…〟

何て思っていたが、口は禍の元と言うしここは黙っておこう。とりあえず俺は織斑の部屋がこの先にあることを伝えた。

「…わかった。ありがとう」

「それじゃあ、おやすみなさい…」

俺がドアを閉めようとするとラウラさんは俺を引き留めた。

「待て！」

「はい、まだ何か？」

「あ、いや…その、今まで済まなかった」

「いいんですよ、気にしないで下さい…」

俺はそう言い切るとラウラさんの顔は敢えて見ずにドアを閉めた。

”ふぅ…もう寝ようっと…”

今度の今度こそ俺はやっと眠りに就くことが出来た…。

それから数時間が経過したんだと思う。突然のことだった。

”ボコッ！！”

「ぐえっ！！」

俺は誰かに強くお腹を叩かれて目を覚ました。

「ぅ〜ん。誰だ…あ、あれ、動け…ない」

どうやらその相手は俺のそうだなぁ…胸元辺りにまたがって座っているようだ。ようやく目が慣れてきた。

「り、鈴！！」

「しぃー！！。今何時だと思ってるの？」

スマートフォンの時計は午前2時を指している。俺は急にドキドキしてきた。

「お、おい！」

「何よ」

「どいてくれよ」

「イヤ！」

「訳わかんないこと言ってないでどけよ」

「イヤったらイヤ！」

「おいぉぃ、勘弁してくれよぉ…まだ寝たいんだからさぁ」

すると鈴はいきなり俺の胸に手を当てた。余計ドキドキしてしまう。もう心臓が壊れてしまいそうだ。

「こんなにドキドキしてるのに？」

「う、うるさいなぁ…」

そう俺が言い返すと鈴は更に顔を俺に近づけてきた。

「ねぇ…」

「な、なんだよ」

「今朝の一夏…見てたでしょ？」

「あぁ…それがなにか？」

「鈍感だね、ホント亮悳って…ホントに一度ぐらい犬に噛まれたら？」

「余計なお世話だ！！」

「ねぇ…」

「さっきからなんだよ…！！」

その時だ。鈴もラウラさんと同じだった。いきなり俺の唇を奪った。

「うぅ…！！」

鈴は俺を離そうとはしなかった。これがもし彼女の思う愛情表現の一つなんだとしたら、俺にはハードルが高すぎる。とは言っても嬉しくないわけがなかった。本当に今度こそ心臓が壊れてしまいそう

だった。今までこんなに緊張したことがないだろう。李承?選手にあったときもそりゃあ緊張したけど、それの遙かに上を行くレベルだ。前に抱きしめられただけでも、そうとうきつかったんだからな…。

「はぁ…」

「ふぅ」

「これがしたかったのか?」

「うん」

「そうか…嬉しいよ」

「本当に?」

「当たり前だろ?」

「よかった。それじゃあ今日は隣に寝てもいいよね?」

「お、おい!!。少しはさぁ…」

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

電光石火の早業だ。鈴は俺と同じベッドの中に潜り込んだと思うと俺よりも先に寝息を立て始めた。

”やれやれ…全くコイツと来たら…”

俺は、眠気を堪えて部屋のとの鍵を閉めると再び眠りに就いた…。

54話　Mail

翌朝、まだ鈴は寝ていたがそっとしておこう。

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

”全く、寝顔は…かわいい…”

今日は学校が休みだ。早い話が土曜日というわけで、まだ朝の６時過ぎだから他の部屋の人達は鈴同様、眠りに就いている。俺がそっと起きた理由は、出かけようと思ったからだ。確かに鈴だとか織斑だとかと一緒にいるのも楽しい。だけど、たまには一人にもなりたいものだ。丁度この間、東海道線を走る特急車両が検査の完了で出場したと同時に登場時の塗装に復刻したんだそうだ。折角沿線に今のところ住んでいるから、是非とも被写体に納めに行くことにしよう。そのついでに、箱根に行って登山電車の写真を撮るのも悪くはない。

「さてと…」

中学の卒業祝いに親から買って貰った一眼レフとレンズをもって俺は寮の自室のドアを開けた。幸いなことに織斑先生はすんなりと俺の外出を認めてくれた。

「遅くならないよう気をつけるんだぞ」

「わかってますって…」

６時過ぎの平塚は、もうかなり暑い。そういえば、もうすぐ臨海学

校なんだそうじゃないか。海の近くに住んでいるのに別の海に行くというのは何だか滑稽だけど…まぁそれも楽しいか。

それから大体１０分ほどで平塚駅に到着した。実際のところ、その復刻塗装の列車が居着くルカなんて俺には分からない。とりあえずこのまま今日はひとまず熱海（あたみ）に向かうことにしよう。

「１番線に到着の電車は６時２２分発普通列車静岡行きです」

早速というか、とりあえずお目当てな電車がやってきてくれた。この電車は東京駅を５時２０分に発車するもので俺がこの学校の入学式の日に乗ってきた電車だ。あの時は、この平塚駅のホームに降り立つのが憂鬱で憂鬱で仕方がなかった。

「平塚、平塚、ご乗車ありがとうございます」

早朝に東海道線を東京駅から静岡駅まで駆け抜けるこの電車は混雑もそれなりに酷い。デッキはまだ余裕があるが、中はそうでもなかった。とりあえず、ここでのんびりとスマートフォンでもいじることにしよう。勿論、音楽も聴いてだけどね…。

それから大体２０分が過ぎた頃、列車は小田原に到着しようとしていた。時間で言えば大体６時４０分頃と言ったところだろうか、突然メールが来て驚いた。

”こんな朝早くに…まぁ誰だか大体は見当がつくけど…”

ところがその見当は意外な事にも外れた。織斑からだ。

‘おはよう。お前出かけんの早すぎだよ。鈴もカンカンだぞ！。帰

ったら明日は付き合って貰うってさ…まぁガンバレ！！，

内容は予想通りだったたと思う。

‘わかった。朝早くからわりぃな…鈴の機嫌を宥めてくれたら、なんか考えてもいいよ，

と返信した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おっ、石井から返信だぞ」

「ホント？、見せて見せて！！」

「あっ、こら」

「…うぅぅぅぅ…」

ところ変わってこちら寮。どうやら織斑に送った返信メールを鈴が先に覗いてしまったそうだ。

「あちゃぁ…」

「一夏！！」

「は、はい！！」

「電話貸して！！」

「お、おぅ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

突然電話来た。

「はい…いしいです…」

「亮悳！！」

「鈴！。なんだよ、朝っぱらから…」

「アンタ、一夏に何てメール送ってんのよ」

「お前、見ちゃったの？」

「当たり前でしょ。今夜と明日覚悟しなさい！！」

そう言うと電話が切れてしまった。朝日を眺めながら俺は深いため息を吐いた。

「まもなく、小田原、小田原です。新幹線、小田急線、登山鉄道線、大雄山(だいゆうざん)線はお乗り換えです」

そんな事をしていたら、もう小田原の駅に到着するようだ。とりあえず今日は先に熱海辺りで少し撮ったら…そこからバスで箱根町(はこねまち)の方へ抜けることにしよう。鈴には…そうだなぁ蒲鉾だとかまんじゅうでも買っていけば機嫌も少しはよくなるかもしれない…。

「熱海、熱海でございます。ご乗車ありがとうございました」

午前7時10分に列車は定刻で熱海駅に到着した。外はもう十二分に暑いぞ…。

55話　険

熱海駅で早速俺は伊豆急行電鉄の電車の写真を撮った。東急から転属してきた電車で、また違った意味で新鮮だった。休日で、いい天気と言うこともあって観光客やら釣りのお客やらで熱海駅は既に賑わっている。一人旅って言うのは、楽ではあるものの、こういうときは寂しいもんだ。そんな俺の気を紛らわせるかのように列車達は俺の一人旅を祝福している。

”おぉ…リゾート21だ！”

こちらも伊豆急行の電車で、大きな展望席と窓が特徴の列車である。伊豆急行線で俺が一二を競うほど好きな列車だ。この間にも沼津（ぬまづ）だとか、三島（みしま）の方からやってくるJR東海の列車なり、たまに通る貨物列車を撮ったりして時間をつぶした。

バスで抜けようと思っていたが一旦俺は小田原駅まで戻ることにした。なんだかんだで乗換や列車の来る時間を考えるとその方がいいと思ったからだ。俺は8時8分発の普通列車東京行きに乗り込んだ。早朝と言うこともあってまだ乗客は疎（まば）らだ。

”おっ、またメールか…”

今度は鈴から直接来ているようだ。見たくはないのだが…

‘さっさと見なさいよ！！’

という思いがひしひしと伝わってくるので開くことにしよう。

‘言っておくけど亮憙のことはこっちでもわかるんだからね…全球定位系？’

とだけ書かれていた。最後の中国語の意味がよく分からない、一体どういうことなんだろうか…。とりあえず俺は

‘本当にゴメンな。今日はお土産買っていくから…’

と返信した。すると

‘甘いものがいい’

と返信が早速またまた来た。全くちゃっかりしてるなぁ…。

距離もそう無いことからすぐに列車は小田原駅に着いた。小田原城を熱海方に見てホームに俺は降り立った。さすがにここは熱海と違って大きい駅だ。脇からは伊豆箱根鉄道大雄山線が着発している。まだ俺のお目当ての列車が来るまでは３０分ほど有るから、とりあえず駅のそば屋で腹ごしらえをすることにしよう。ここはそばも美味しいから…。

「そばで…」

「そばね…」

店員とのやりとりなんて、もう随分と慣れた。立ち食いそばには小学６年生ぐらいの時から入っているから、これぐらいなんて事はない。

とりあえず、食事を済ませると早速東海道線の普通列車を撮るこ

とが出来た。クリーム色に緑色の斜線が入った列車は、検査明けと言うこともあって台車から何からピカピカだった。いいものを撮ることが出来た。きっとこの一眼レフも喜んでいることだろう。

”さてと…次は登山電車だな”

俺の持っている優待パスもここから先はお役御免だ。この先の登山線は、切符を購入しなくてはならないからとりあえず、小田急電鉄が売っている箱根フリーパスを買って一路、箱根湯本(はこねゆもと)駅に向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふ〜ん、亮悳は箱根に行ってるんだ」

「お前、それプライバシーって言うか…その、甃井が」

「何よ！！。置いてかれたアタシの気持ちにもなってよ一夏」

「そうですわ一夏さん。このままじゃあ鈴さんがあんまりじゃないですか」

「だからって言ったたって、こんな大がかりなことをしなくても…なぁラウラ？」

「大丈夫だ。クラリッサ達に頼めばこれぐらいのことはお茶の子さいさいだ。このまま監視を続けてくれ」

「了解しました！！」

”やれやれ、甃井も結構なことやらかしてくれるな…”

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな事を寮の織斑の部屋で（何だかラウラさんが違法占拠しているようだが）話していることを俺は知るはずもなく、箱根湯本駅に到着した。時間はまだまだたくさんある。

「3番線から強羅行きが発車いたします。ご乗車の方はお急ぎ下さい！」

駅員のアナウンスで俺も急かされそうになった。列車は満員だ。一本見送ることにしよう。この箱根登山鉄道は日本でも二番目に急な坂を登る鉄道だ。まぁ名前に登山って文字が入っているんだから当然と言ったら当然なくらいの坂を登っていく。それに加えて急なカーブも多数存在するから車両と車両の間を移動することも原則的に出来なくなっている。

次の列車に乗りとりあえず登山鉄道では撮影の名所とされている大平台駅に向かった。さすがにいい写真が撮れることに俺は半ば感動しながらそこで2時間ほど時間を費やした。

再び強羅行きの電車に乗り今度はまっすぐ終点の強羅まで向かう。その後はケーブルカー、ロープウェー、遊覧船を乗り継いで箱根町についた。この後俺は杉並木やら石畳やらの旧街道を歩き、元箱根まで歩き通した。それはまさに滝廉太郎の作曲した箱根八里の通りだった。よくもまぁ江戸時代の人はこんなところを歩き通したと思うと妙に感心することが出来た。そこからバスで朝出発した箱根湯本駅に到着した。

”さてと、まだ早いけど朝早くで足し明日は鈴に付き合わされるこ

とになってるから帰るとするか…あっ、お土産だったな…”

甘いものと言っていたので名物の温泉持ちを、3箱ぐらい買って再び小田原行きの列車に乗り込んだ。

”おっ！！”

俺は最後の最後にまたあの朝撮ったリバイバル塗装の列車を撮影することが出来た。夕焼けのおかげでオレンジ色になった列車はまたひと味違ったいい画になった。

どうやらそこで俺は今日の幸運を使い果たしたようだ。

「ただいまぁ…と」

俺は灯りの消えた寮の自室に辿り着いた。何だかいやな予感もする。ひとまずお土産を机の上に置いて俺は暗くなっているベッドに飛び込んだ。

「ぎゃっ！！」

「うわっ！？」

俺は突然ベッドの中からした声にめちゃくちゃ驚いた。

「あ、亮悳…」

「り、鈴！？。お前なんで俺のベッドで…いや、何してんだよ？」

「うっさい！。亮悳こそ、どこほっつき歩いてたのよ。待ちくたび

れちゃったから寝てただけよ…そぅ、寝てただけ」

何だか妙に鈴がもじもじしているぞ…。これはまずいかもしれない。

「とりあえず、起きろって…うわっ！」

俺は突然強い力で引っ張られてしまった。だからベッドに倒れ込んだ。

「言ったでしょ…罰よ…ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

鈴は俺の右腕を抱きしめて再び眠りに就いた。よっぽど疲れてるのかな?。

”やれやれ…明日は大丈夫なのかな?”

俺はそう思いながら何とかそこをすり抜けると鈴をセシリアさんの部屋に運んだ…。

56話　Holiday（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。作者のテスト期間が終了しました。今まで不定期更新となってしまっていましたこと深くお詫び申し上げます。それでは、本文の方もどうぞお楽しみ下さい。

56話　Holiday

今夜覚悟しておけとのことだったが…確かに俺にとっては大変なものであった。鈴は寝ているから、文句を言うことも出来ない。それを利用してか鈴は寝たふりかもしれないけどやたらと俺に頬ずりをしてきたり、ぎゅっと抱き枕のように俺を抱きしめたりしてきた。回数なんて…多すぎて数えるのをやめたぐらいだ。鈴を自分から離してみようともしたが、あえなく失敗した。

気がつくと、朝を迎えていた。今日は昨日とは打って変わって雨が降っている。

「うぅん…今日は雨かぁ…」

隣ではもう鈴が起きて俺の事を睨んでいる。

「な、なんだよ。朝っぱらから怖い顔して…」

「亮悳、昨日どれだけ私のことを追い払おうとした?」

「!?」

「私が数えただけで軽く10回はあったわよね?」

「そ、そりゃあだってあんなに頬ずりとかされたら…それに、まだ俺の女嫌いは完璧に治ってる訳じゃ…」

「うぅぅう」

朝から鈴はお怒りのようだ。本当に鈴はパワーがあるなぁ。俺にも少し分けて欲しいぐらいだよ。

「んむぅ…ぅん…むぅ…」

朝からいきなり思いっきりキスしてくるなんて凄いと思わないだろうか?。俺は朝から緊張で心臓が今にも壊れそうだ。ほんの数十秒がとっても長く感じる。鈴はといえば…お構いなしだ。

「お、おぃ…勘弁してくれ」

「ダメ。昨日覚悟してって言ったでしょ?」

「ふぅ…」

「全くもう。折角機能なら出かけられるくらいにいい天気だったのに。明憙が一人で出かけたりなんかしたせいで今日はこの天気じゃない。責任とりなさいよ!!」

そんなこと言われても俺は天気を操ることが出来るわけでもない。雨が降っているけど今から数十秒後に雲一つ無い快晴にしろだなんて無理に決まってる。

「そうだなぁ、今日は部屋でのんびりしてるって言うのはどうだ?」

鈴は意外にも俺のアイデアに乗ってきた。確かにこんな天気に出かけるのもどうかと思うし、ここは部屋にいるべきでもある。とは言っても何をすればいいのだろうか…?。

「麻雀!!」

「ちょ、ちょっと。何よいきなりそんな大声で…」

「いやぁ、麻雀やらないかって?。お前は出来るのか?」

「当たり前じゃん。あたしの故郷中国なんだよ?」

「そうだよな。でも後二人かぁ…」

「そういえば千冬姉と一夏は出来るはずだよ」

俺達は急いで織斑先生と織斑を呼んだ。案の定先生がそんな事出来るかって織斑先生は怒っていたが強行した。すると織斑先生も少しだけだぞと言って勝負に乗ってきてくれた。おかげでその後は楽しく麻雀をすることが出来た。

「亮悳って意外と強いんだね」

「中学の時みんなでやってたからね」

「何というか波瀾万丈な中学時代だったんだな」

「そうか織斑?」

「普通なら中学で麻雀なんてやらんぞ。まっ、私がお前の先生だったらげんこつの数発じゃ済まさないがな」

和気藹々と楽しく麻雀をすることが出来て本当によかったと思う。意外にもこの学校には麻雀を出来る人がいるようだ。今度の臨海学校も楽しくなると思う。

その後、昼を済ませて俺が部屋でのんびりまたまたくつろいでいると、ベッドの上であぐらをかいていた俺のに鈴は座ってきた。よっぽどスキンシップがしたいのかなぁ？。

「重い…」

「うっさい！」

「見た目の割にはこうし…」

質量と言おうとしたら鈴は俺の額にＩＳの腕の部分を起動させてつきだした。

「それ以上言ったら…わかってるわよね？」

危うく自分の命を失うところだった。雨がしとしとと降る今日この頃、その後も鈴は俺の膝の上に座って特に何もすることもなくただただ俺と話を続けるだけだった。

夜もそんな具合だった。結局その日は本当にどこにも出かけずにのんびりと過ごして終わってしまった。明日からはまたいつもの通りハードな生活が待っているというわけだ。いやいや、今夜からだった。鈴がまた俺の事を抱き枕のようにしようとしているのだ。

「おい」

「なに？」

「お前、部屋に帰れよ…」

「ダメ。今日はまだ終わってないじゃん？」

「勘弁してくれる…わけないもんな？」

「そーゆーこと。だからねっ、こうして…」

「おいおい！！」

鈴はなんと俺の胸の辺りに耳をつけた。

「ドキドキしてるね…嬉しい」

何て言われたらどうなるか分かってもらえるだろう。俺が今日眠りに就くことが出来るのはもう少し先のこと…鈴の寝息が聞こえるぐらいまでは起きていないといけないのだろう…。

57話　買い物－1

鈴のいいなりにさせられて一夜明けた月曜日、また今日から一週間が始まる、筈だっただが今日は創立記念日だそうで休日なわけで、すっかり俺はそのことを忘れていた…

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

子供のように寝息を立てながらまだ鈴は夢の中にいるわけで俺はそれを受け止めているわけだ。たまには俺だって…甘えたい。だから甘えてみるかぁ…。

ギュッ

俺は鈴の胸の辺りに頭を置いた。いつもとは逆の組み合わせだ。

「ムニャ…ムニャ…ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

鈴にはまだばれていない。多分このまま目が覚めたら半殺しになってしまうだろう。鈴の心臓の打つ音克明に自分の耳の中にこだまする。思えばここに来てから俺の人生は大きく変貌した。織斑を始め、みんなが俺の変化に少なからず協力してくれたと思う。

「うわぁー！！！」

と、その時織斑の悲鳴が聞こえた。また篠ノ之さんとケンカでもしているのだろうか…あらら、自棄に目の前が暗くなったぞ…

「うぅぅぅぅ」

鈴が怒ってる、もしかして今の悲鳴で!?

「おはよう、鈴」

「ア～キ～ノ～リ～!!」

「お、おい。まだ朝一だから、落ち着け…うぎゃっ!!」

「覚悟!!」

「イヤだよ」

「えっ?」

俺はすかさず鈴を思いっきり抱きしめた。そう、前に俺を突然抱きしめたあの病室での時のように…。

「離して!」

「イヤさ」

「ねぇ、離しなさいよ!」

「ははは。前は俺がそんなこと言ってたなぁ…」

そう俺が言い返すと鈴も思い出したようだ。すると鈴は抵抗するのをやめた。

「ギブ?」

「亮悳、責任取ってよ」

「えっ？…むぅ！」

鈴は朝一にもかかわらず俺にキスをしてきた。さすがのハイパワーの持ち主だ。

「むぅ…ぐぅ…んんっ…」

朝から俺は何て目に遭っているんだか…。

今日は昨日とは打って変わって天気は快晴。鈴がどこかに出かけるだなんて言わなければいいんだけど

「亮悳、買い物行こっ！！」

早速俺の希望を裏切ってくれた。

「えぇ…」

「何よ。自分だけでは出かけたくせにあたしとは出かけられないって言うの？」

「いやぁそういうわけじゃないけどさ…何を買いに行くんだ？」

「今度の臨海学校で使う水着よ！。亮悳もまだ持ってないんでしょ？」

「あぁ～そういやそうだったなぁ…よし、なら行くか！」

「そう来なくっちゃ！」

まぁ、何はともあれ俺は鈴と一緒に買い物に行くことにした…。

58話　買い物－2

とりあえず俺と鈴はＩＳ学園を後にしてひとまず横浜（よこはま）まで向かった。鈴のやつ、中華街にも寄るつもりなのかなぁ…俺そんなに持ち合わせないのに、こりゃあ経済破綻も考えなくてはならないだろう。

「なぁ」

「ん？」

「水着買いに行くのに本当に横浜なのか？」

「いいじゃん。そう言えば最近亮悳疲れ気味でしょ？」

確かに鈴の言っていることは間違っているわけではない。ここのところ…まぁ鈴のせいも少なからずあるけど何だか少しお疲れ気味というのは自分でも分かる。肩も凝ってて腰も痛くて…まったくこんな学生他にいるんだったら教えて欲しいと言うぐらいだ。

「ま、まぁな。それがどうかしたのか？」

「だぁかぁら。アタシが亮悳のために調合して貰った薬もとりに行くのよ」

「そ、そうなの？」

「そっ。アタシさ、亮悳にはいつまでも元気でいて欲しいの」

「鈴…」

勘弁してくれよ、俺泣きそうになるじゃないかよ。1年前まで女を泣かせていた俺がいると言うことを考えるとこれはとてつもない変化である。そう言えば俺が最後に泣いたのって…いつだったかなぁ。俺の考えは古いからさ…泣くのは男らしくないって思ってるぐらいだしね。でも、高校球児が試合に負けて泣いているのは勿論美しいと思う。青春の1ページってやつだな。多分、俺も鉄道学校に通っていたらそうだったのかもしれないけどね…。

横浜に着くと時間はもうお昼になっていた。俺は中華街に行ったことはあんまり無かったから鈴にエスコートして貰うことにした。実を言えば横浜には何度も言ったことがあるがそれはあくまで滝頭（たきがしら）というところにある横浜市電保存館というところに行くためだった。横浜には明治37年から昭和47年まで交通局が運営する横浜市電が走っていた。滝頭には元々市電の車庫があったのだが、市電が廃止になった現在は横浜市営バスの車庫があるところだ。まぁ…この保存館、あまり知られていないようで平日はとっても空いてた記憶がある。だから行くなら平日をおすすめする…おっと、今日はそんな事をしに来た日じゃなかったな。

「ここよ」

「ここ？」

そうこうするうちに俺達は一軒の中華料理屋の前に着いた。確かに昼時と言うこともあって店の中も賑わっている。見た限りでは中国人の人が経営しているようで、日本語も限りなく片言だ。

「味はアタシが保証するわ」

「ほぅ…」

さすがに中国人の鈴なだけ有るな。こういうときは頼りになる。

「こういうときだけで悪かったわね」

「えっ？」

「最後、声が出てたよ」

「ごめんごめん。ところでさ」

「うん」

「俺に作ってくれた漢方薬って何入ってるの？」

「えっ？！」

鈴は驚いた様子だった。何だかいやな予感がする。もしかして…毒が入ってるとか？。いやぁさすがにそんな事はないだろう。俺は少なくともそんな事は決してしないだろうしね。

”どうしよう。確かに疲労回復、滋養強壮の効果の他に…その、む、ムラ…あぁ、アタシにそんな事言えない！！”

「どうかしたのか？。顔色悪いぞ？。薬必要なのは俺よりもお前の方じゃないのか？」

「う、うるさいわね！！。と、とにかく大丈夫よ。薬の成分はまぁいわゆる滋養強壮とか疲労回復とか…そんなところ」

「ふ～ん。そいつは楽しみだな…」

そうこうするうちにまず青椒肉絲（チンジャオロース）と海老チリがやってきた。俺どっちも大好物なんだよねぇ…いやぁうまいうまい。さすが鈴だなぁって俺は思った。

「ありがとう。とっても美味かったよ…」

「亮憙が喜んでくれて嬉しいわ」

「さてと、先に水着買いに行くか？」

「うん！。付いてきて！」

「お、おい」

俺は鈴に手を引っ張られて中華街の奥へと入っていった。

「そ、そんな派手なの着るのか…？」

「ちょ、亮憙見ないでよ！！」

「だって、お前がここに連れてきたんだろ？」

「で、でも見ちゃ行けないものぐらい分かるでしょ？」

「ごめんごめん…」

鈴のやつ、こんなところに俺連れてきてどういうことだよ。この場

所女物しか売ってないのに他のものも自分のやつも多分恥ずかしいからだろうけど見ないでくれって言うのは俺にアイマスクでもかけてろって言ってるようなものだ。ところで俺の水着を買うときはどうするんだろうな、俺が持ってるのはいわゆる学校用の水着しかないからなぁ…ポケットが付いてるズボンみたいなやつでいいかな？。

「は、早くしてよ…」

「おいぉぃ…さっきはゆっくり見てやったんだから勘弁してくれよ…」

「それでいいんじゃない？」

「随分と投げやりだなぁ…まぁ確かに、これでいいか？」

俺は鈴とは違ってものの5分足らずで自分の欲しい水着を購入することが出来た。

「さてと、最後は薬ね…」

「漢方を取るなよ。変な意味に聞こえるぞ」

「アタシがそんな事やってると思うの？」

俺は胸ぐらを掴まれてそう言い返される。このままここでＩＳでも起動されたらそれこそ市民への脅威どころではないぞ。警察のお世話になってしまう。

「ごめんごめん、ただそう聞こえただけなんだよ…」

「そう…まぁいいわ。許してあげる」

そんなこんなしているうちに薬局に到着した。見るからに漢方を専門に取り扱ってそうな薬局だ。

「おじさん、久しぶり！！」

「あぁ…鈴ちゃん、元気にしてそうだね」

「うん。ねぇねぇ、例のやつ出来た？」

「勿論だよ。えっと…君がこれを飲むのかい？」

「えぇ…はじめまして。聳井って言います」

「ほぉ、なかなか鈴ちゃんの目もいいねぇ。まぁいいや、はいこれ。最初だけこの薬を飲んでおくれ。体を慣らす目的でね」

「はぁ…」

俺は何だか変な気分もした。実はこの薬、なぜか知らないが鈴も貰っているようだ。まぁ…疲れてるのかなぁ？。

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

その割には帰りの電車の中では爆睡していて疲れを取っていると思うんだけどなぁ…。

その晩俺は言われたとおり初日と言うことでこの薬を飲んだ。確かに体が火照って疲れを取ってくれそうな予感はするけど…なんだ

か寝にくいし、その…どことなく変な気分がする。

「うぅん、何だかドキドキするなぁ…。今にも壊れそうだ…まさかこれ！！」

俺はその時全てを悟った気がした。だけども今更である。

「ようやく気がついたんだね…」

隣で寝ているはずの鈴も顔が赤くなっている。

「お前、あの薬の中になに入ってるかもう一度説明しろ」

「あ、あの中には普通に漢方が…」

「嘘つけ、それじゃあこんな風になるわけないだろ！」

「ひっ。だ、だからその…ドキドキするような成分のものを少し、ほんの少しだけだよ。でも、入れて貰ったの…」

「そ、そうか。まぁ分かったからスッキリしたよ。それじゃあ寝るぞ」

「う、うん」

俺は何とか心を静めようとした。薬の影響がどこまで続くか分からないけどまぁ明日の朝には問題は解消されているだろう。なのに、なのにだ。

「り、鈴！」

「亮悳、アタシ…もぅ」

鈴の方が先にダメになってしまったらしい。俺の寝ている上に乗りかかってきたぞ。さすがに夢とか言ってごまかしが利くレベルではない。その後のことは言わないでおくけど、俺が寝るのはもう少し後の話であった…。

59話　朝練

目が覚めた。朝だ。といってもまだ5時過ぎ。

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ　ムニャムニャ…」

隣では鈴が丸くなって猫のように、まだぐっすりと寝息を立てている。昨日は鈴の作ってくれた漢方薬のおかげで色々と大変な目に遭った。とは言いつつも何だか体が軽く感じるからきっと薬の効果はあるんだろう。一応だから言っておくけども、昨日の夜のように変な気持ちは今はもう残っていない。

「さてと…素振り行くか！」

俺は強めにそう呟くと、早速準備を始めた。昨日買い物ついでに買った七分袖のアンダーシャツに着替えて…。

「おっと、布団から離れてるぞ…それっ」

「ムンニャッ！！」

鈴に布団をバサッと掛けるとそれに呼応するかのように鈴は寝言を放った。鈴がまだ寝ていることを見届けると俺は部屋を後にした。

昨日は李承?選手もサヨナラホームランを放ちオリックスは単独で3位。まだまだ上位を狙えると言ったところにいるわけだから、頑張って欲しいものである。俺も負けているわけにはいかないから一段と気合いを入れていかないとね。況してや今日から長いようで身近かかった三連休が終わって再び学校になるんだし。俺は鈴を再

び眺め、寝息を間立てていることを確認すると部屋を後にした。

外はもう夏だけあって暑いけど、それでも日中よりはまだだいぶ涼しい。素振りをしていれば心地よい汗がかけるぐらいの温度は少なからずある。

「お～い！！」

「ん？」

後ろを振り向くとをそこにはジャージ姿の織斑がいた。どうやら一緒に野球の練習をしたいようだ。まぁ態々朝っぱらからこんな姿になってるんだから当然な話だけど…。

「やるか？」

「おぅ！！」

俺の質問に織斑は、力強く答える。早速キャッチボールから俺達は取りかかった。基本中の基本な訳だけど、これなら二人でやっていても本当に楽しい。

「最近上手くなったよなぁ…それっ！」

「誰が…ほっ！」

「お前さんだよ…よいしょっと！」

「本当か？…はっ！」

ＩＳをあそこまで上手く使いこなしているのは伊達ではないようで、織斑はスポーツに関するセンスがめちゃくちゃある。他分野球もこのまま練習を重ねていけば俺が抜かれるのもそう先の話ではないだろう…いやいや俺も抜かれる気なんて更々ないけどね。だけども、パーフェクトな人間はこの世界には存在しない。

「次は素振りだ」

「おぅ！」

織斑は打撃に関して若干の問題がある。

「おっと！」

「大丈夫か？。ふらついたけど…」

「気にするなって！」

「そ、そうか…」

大ぶりなのが玉に瑕なのだ。織斑は俺に比べたら細身だから、正直なところパワー系ではないと思う。見たところ、イチローだとか李炳圭のように、パワーよりもヒットに集中すべきと俺は見ている。えっ？。俺は勿論憧れている選手が李承？選手だからねぇ…大振りに決まってるじゃないですか。じゃなかったら腰痛になんかなりませんって…。

「おい、嫁！」

後ろからその時、誰かの声…いやぁもうラウラさんとはっきり言っ

てしまおう。例の一件以来、織斑のことをラウラさんは嫁と称している。

「おぉラウラ！」

「何をしているんだ？」

「野球の練習さ…折角だからやってみろよ」

「私がか！？」

そう言うと織斑は俺にアイコンタクトを送り、バットを貸してくれと頼んできた。勿論俺もそれにはいいよと頷きかえす。

「ラウラさん。嫁が出来るんですから大丈夫ですよ」

「うぐ…それとこれとは…」

「嫁が出来て夫が出来ないんじゃあ、顔が立ちませんよ？」

「くっ…いいだろう。やってやろうじゃないか」

「そうこなくっちゃねぇ…」

俺と織斑は早速ラウラさんの野球の相手をすることになったのだが…

「くぅ…イタタタタ…」

ラウラさんが軍人であると言うことを忘れていた。運動神経は抜群だ。キャッチボールの筈なのにいつの間にか俺は内野からのイチロ

ー並みのレーザービームの送球を受け取る係になっていた。これじゃあファーストミットが効果を果たしいるんだかいないんだか…痛くて自分の手も腫れてしまって、まるでファーストミットのよう…。それでもって打撃の方はどうかと言えば…まぁ最初は振り方なんかを軽く教えてあげたものの、そこからは持ち前の筋力で…

ブン！…ブン！…ブン！…

「おぉ…」

「すげぇな…」

凄い当たりだった。

「いい練習になった。いつも嫁とはこんな感じで練習しているのか？」

「え、えぇ…まぁそうですね」

「それじゃあこれからも暇だったら行かせて貰うぞ」

「は、はい。こちらこそ…」

「うむ。それでは一夏、帰ろう」

「お、おぅ…鵜井お大事にな…」

「あ、ありがとう。いつつ…」

俺も急いで部屋にバットを途轍もなくいたい思いをしながら帰って

行った。

「ただいまぁ…」

「あ、亮恵！。どうしたのその手！」

「ちょっとね…イタタ…」

「ほら、こっちにきて！」

「ありがとう…」

この後消毒液のおかげで俺が再び悲鳴を上げることは言うまでもない…。

60話　薬

右手が腫れてとんでもないことになっている。今日は仕方がないから少し不自由だけど左手で物事をこなすことにしよう…というかそうするしか方法がない。

「ふぅ…左手で書くのも久しぶりだけど、案外まぁまぁ上出来だな」

「困ったらアタシがノート見させてあげるから、心配しないで」

「そう。じゃあ今日は眠いから…」

そう俺が言ったのが間違いだった。俺の右手に鈴はニコニコしながら、自分の手でツンツンと突っついてくる。これだけでも今の俺の右手は悲鳴を上げる。

「イタタタタ!!」

「亮悳、寝てたらこうやって起こしてあげるね。ほらっ」

「痛いって!!。か、勘弁!!」

正確に痛みの根元をついてくるから痛くて痛くてしょうがない。やれやれ、これじゃあしばらく朝練は出来ないだろうし、風呂もどうしようかなぁ…。

「静かにホームルームを始めるぞ!」

そうだったと思いながら俺は急いで席に着いた。

「さてと、今日は来週に行われる臨海学校についてだ。学校としては、水着は学校指定のものを使わなくても構わん。買い物に行くのだったら今週末が最後だ。気をつけるように！」

あれ？…臨海学校ってもうそんなに迫った出来事だったんだ。まぁ水着は先週に買いに行ったからいいとして、今週末が最後の土日という訳か。まぁそれはそれとして…この手でどうしようかなぁ。来週までに治るといいんだけど。

ホームルームが終わって、授業までの僅かな時間に

「ん？。聳井、どうしたんだその手は？」

ラウラさんは何事もなかったかのように俺にそう尋ねてきた。あなたのせいでこんな目に遭ったとは言えるわけがない。それこそボコボコにされてしまいそうだし、況してや誘ったのはこの俺なんだから。

「い、いやぁ…ちょっと、転んじゃって…」

「そうか。お大事にな」

「えぇ…どうも」

俺がそう軽く挨拶をするとラウラさんは自席に戻っていった。その後を間髪入れずに今度は織斑がやってきた。

「おい聳井」

「ん？」

「もう水着は買っちまったのか？」

「あぁ。ついこの間な」

「そうか…はぁ」

「どうかしたの？。浮かない顔してるけど？」

「実はさぁ。今度の日曜にシャルルと水着を買いに行くことになったんだけどさ。ほら、俺とシャルルだけじゃあ色々とさ。だから聳井と鈴にも来て貰ったらって思ったんだけどさぁ…」

「そういうことか。じゃあ今夜さぁ、鈴に訊いてみるよ」

すると織斑は俺の両手をがしっと掴んだ。

「よろしくな！！…ん？」

「う、うぅ…ぎゃあぁぁぁぁぁ！！！」

俺がなりふり構わず出した悲鳴は、瞬く間に他のクラスはおろか３階まで響き渡ったんだそうだ。

「…ふ～ん、なるほどね。一夏とシャルロットが買い物か」

「な？。折角だから協力してやらないか？」

その夜。俺は鈴と部屋でそう話をしていた。最初は俺達が邪魔する

のはどうかと鈴は消極的だったのだが俺の説得の甲斐もあってようやくここまで辿り着くことが出来た。

「わかったわ。亮悳がそこまで言うんだったら」

「ありがとうな鈴。これで織斑も喜ぶと思うぞ」

「一夏が？」

「うん。あいつも結構ドキドキしてるみたいだし」

「一夏もようやく気がついたのかな？」

「何が？」

「な、何でもないわよ。ほら早く手出しなさい」

ついでに鈴に手の手当も行って貰っている。包帯を外してみたら、ある程度腫れは引いているようだ。この間、凄い薬を貰った薬局で今度は塗り薬を調合して貰ったようで、今からそれを俺は塗って貰おうとしている。

「ちょっと待て」

「何よ？」

「その軟膏は大丈夫なんだろうなぁ？」

「あ、当たり前じゃない」

「ならいいけど…」

おぉ…確かに今回の薬は白色でまともそうだ。塗って貰うとそれが目で分かるかのように効いていくのが分かる…

「イタタタ！。なんなんだよこれ、メチャクチャ滲みるじゃないか！！」

「良薬は口に苦しよ」

「いやいや、今回飲み薬じゃないし」

「うっさいわねぇ。これで治ると思って我慢しなさい！」

「ぎゃぁぁぁ！！」

俺は夜にも悲鳴を上げさせられる羽目になった…。

61話　Shopping　part1

それから早いものであっという間に週末を迎えた。薬の滲みる具合は半端じゃなかったけども、手の方は回復した。鈴のおかげとでも言っておこうかな。さてと、今日はデュノアと織斑の買い物に付き合うことになってたもんだから…というか俺が一緒に行くって約束したから勿論行くわけだが、いやぁ鈴を連れ出すのにはとっても苦労したよ。その割には…

「亮悳、遅い！！」

「そう急かすなって…」

「一夏とシャルロットを待たせちゃってるでしょ！！」

「まぁまぁ、一日はまだ始まったばかりだからさ…」

とやけに張り切っている。まぁそれはそれで盛り上がるから、織斑達にも言い刺激にはなるだろうが…デュノアが織斑のことを唐変木だとか言ったんだとか言ってないんだとか。まぁわからなくもないな。今日も天気は絶好の晴れだ。先に織斑とデュノアは平塚駅に向かっていたようだ…。

「な、なぁシャルル…」

「もぅ！！。一夏、二人でいるときはシャルロットって約束したでしょ？」

「あぁ。そうだったな、ごめん」

「もう一夏は…」

「なんか言ったか？」

「何でもないよ！！」

”シャルル、随分ご立腹だなぁ。何か俺したかな？”

すると織斑でもこれぐらいのことは分かったのだろう。あることを考えたようだ。

「なぁシャルロット」

「どうしたの一夏？」

「そのさ、言いにくいから二人の時だけは何か他の名前で呼んでもいいか？」

これはデュノアにとっては最大の喜びであったと言えよう。あこがれの織斑からいわゆる愛称で呼ばれるという他の人達から一歩リード出来るという事に加えて、織斑の独占も先には控えていることを約束されるわけだから。

「い、いいよ…」

「シャルなんてどうかな？」

「うん！！。とってもいい！！」

「そっか。それじゃあシャル、これからも改めてよろしくな」

織斑にとってはまぁ普通なことでもデュノアにとってはそういうわけにもいかない。さらにデュノアは追い打ちをかけようとした。

「て、手つないでよ」

「手？」

「そ、そうしたら許してあげる」

「わ、わかったよ。ほら」

「あ…」

織斑と手を結ぶことにも成功した訳で、更に喜んでいる。

「ちょっと、いつまで実況中継の真似してるのよ」

「まぁまぁ、もう少しだけ二人きりにしてやろうや」

「それもそうね…」

実はもう5分くらい前には、平塚駅に到着していたわけだが…織斑とデュノアの折角なところを邪魔してしまってはダメだから。少し待っていようと俺が鈴に提案したのだ。すると、二人が手をつないだところを俺達は目の当たりにした。みるみるうちに顔が明るくなる。俺はそれを見てそっと鈴の右手と自分の左手を重ねた。

「あっ！！」

「いいじゃないか、俺達も‘恋人同士’なんだぞ？」

「あ、亮憙…」

「さて、行くぞ。あいつ等に負けてるわけにはいかないからな」

「ほんの数分前までもう少し、見てようって言ってたのどこのどいつよ」

「まぁまぁ。気が変わったんだよ…これでいいだろ？」

「まぁいいわ。アタシも嬉しい」

「だろ？」

そう言うと俺達は手をつないで二人のところに向かおうとした。すると…なにやら怪しい影が後ろに見えた。というのも日差しのおかげで俺達の後をつけている不思議な影があったのだ。見たところ…人数は三人のようだ。

「誰だ！！」

後ろを振り向くと、そこにはセシリアさん、ラウラさん、篠ノ之さんの姿が。何となく予想はつく、織斑の後を追ってきたのだろう。なんともまぁ、あいつも大変なもんだ。

「聳井さん、鈴さん。そんなに手をつないでいるところをまじまじと見せないでくださいまし！！」

「ごめんごめん。でもいいだろ？」

俺は若干どやっとした顔でセシリアさんに言い返す。

「むぅぅぅぅ」

「まぁまぁ…三人とも、織斑達の後を？」

「そうだ。一夏のやつシャルロットと一緒に出かけるなんて。私は信じられん！！」

「嫁のやつ…まぁ私も買い物と言ったところだ」

「私もですわ」

「どうするよ鈴。折角だから来て貰うか？」

「で、でも。そんなことしたら一夏達に…」

「何言ってるんだよ。彼女らには俺達を尾行して貰おうってことさ。どれくらい上手いか見てみたいからね」

すると三人とも怒ったような顔をしたぞ…それぞれ特技をお持ちだから怖いと言ったら怖い…あれ？。女性に恐怖心持ったのって、凄く久しぶりな気がするな。まぁいいや、折角の買い物なんだ。楽しまなくちゃな、いろんな意味で…。

62話　Shopping　part2（前書き）

本日、李承?選手が対ロッテ戦におきまして、8回にスリーランホームランを放ちました。日韓通算500号まであと24本、今年中に達成してくれることを祈っております。それでは、本編をどうぞお楽しみ下さい…

62話　Shopping　part2

数分後、俺と鈴は織斑達のもとに遅れたという扱いで到着した。織斑は別に構わないといった顔つきで、デュノアは俺達にもう少し遅れて貰っても良かったというような顔をしている。時間にしてまだ朝の9時過ぎ、これから普通列車で東京に出ても10時過ぎには到着出来るだろう。

「さてと…今日はどちらへ？」

「そうだね。一夏はどこに行きたい？。ボクはどこでもいいよ」

「そうだなぁ、時間があるから東京に行くか」

俺にとっては、この間の李承？選手との対面以来の東京だ。この間鈴と行ったのは横浜だったし。後ろから来る人達もこの会話を聞いていた。いわゆる盗聴ってやつだ。どうしてそんな事が出来るかって言うと…俺のスマートフォンをずっと電話中にしておいて、声が聞こえるようにしているという至ってシンプルなものだ。

「東京…ですわね」

「く、嫁を東京に連れ込む気か」

「変な言い方だが、まぁ鵜井がいてくれるから大丈夫だろう」

「そうですわね。鵜井さんと鈴さんがいれば、いい緩衝材になってくれるでしょう」

「さてと、行くぞ。篠ノ之、オルコット！！」

今日は勿論、普通車に乗車した。そうしないと折角の尾行が台無しになってしまう。俺達は丁度４人だったから向かい合わせになっているところに腰を下ろした。因みに言っておくと、俺達が乗り込んだのは熱海始発で、平塚駅を９時１４分に出る、普通列車東京行き７９０Ｍだった。列車の中ではいろんな事を話していたからあっという間に東京駅に到着した。

「東京到着～！！」

「鈴がはしゃいでどうするんだよ？」

「うるさいわね～。いいじゃない、アタシだって久しぶりなのよ？」

「今日の主役は織斑とデュノアだろ？」

「主役だなんて…なんだかなぁ」

「ボクも恥ずかしいよ」

「まぁまぁ…せっかくだからね。二人も楽しまないと勿体ないぞ？」

「そうだね…それじゃあボクは一夏と一緒に…」

「えっ？。別行動にするのか箆井？」

織斑は困惑気味だがデュノアの目がそうして欲しいと俺達に語りかけてくる。まぁ織斑もいるし、いざとなったら携帯電話もある。ましてや尾行を続ける人達の中には、あのラウラさんもいる。暴漢に

例え織斑達が絡まれたとしてもラウラさんがいれば大丈夫だろう。
問題なのはこっちの方かもしれないけどね。

「そうしたいならそれでもいいよ。フリーきっぷがあるから、それを使えば都バス、都営地下鉄、東京メトロ、都電も乗り放題だし」

「ふ～ん。ならアタシ達もそれ使おうよ亮悳？」

「いいよ。それじゃあ買ったら別行動だ」

「えぇぇぇ！！」

まぁまぁ織斑。こういう経験も必要ですよね…。

「待ってくれよ！。俺とシャルルだけじゃ…その…」

「一夏、どうかしたの？」

妙に悲しそうな顔をデュノアはとっさにする。凄い能力だ。

「わ、わかった。よし！！」

とうとう織斑も気合いを入れてくれたようだ。さてと、俺達はのんびりと…そうだなぁ東京タワーでも行くかな？。

俺は切符売り場に向かった。

「すいません。東京フリーきっぷを7枚」

尾行する人達の分も買わないといけないから、俺がそう注文すると。

「は!?…はい、畏まりました。それでは、１１０６０円になります」

この鉄道パスをいちいち見せるよりもこの方が記念にもなるし、いいだろう。おっと、今日はデーゲームの日か、それじゃあ行こうかな。織斑達をバスに乗せると早速鈴は俺に

「ねぇねぇ。どこに行く?」

と尋ねてきた。まぁデーゲームの開始時刻が今日は臨時で１２時からになっているから、とりあえずそれまでの２時間弱は暇というわけだ。

「買い物にでも行くか?」

「うん!!。亮悳、たっくさん買ってね」

「俺が奢るのか?」

「細かいことは気にしない気にしない」

「いやいや細かくないから…げふっ」

「あんまり騒ぐと、怒るよ?」

仕方がない。とりあえず、なら…渋谷の方にでも出るか。あぁ言い忘れてた、今日のデーゲームはオリックス対日本ハムだ…。

62話　Shopping　part2（後書き）

次の回でこのシリーズは終える見込みです。

63話　Shopping　part3

とりあえず丸ノ内線と銀座線を乗り継いで俺達は渋谷に着いた。山手線でも良かったけど、折角だから地下鉄を活用することにしよう。東京タワー行かないかって鈴に聞いたんだけども、鈴のやつが

「亮悳に色々買って貰いたいなぁ…」

ってＩＳを起動させながら言ってくるから俺がそれを拒否することなんて出来やしなかった。

「にしてもさぁ…」

「ん？」

今気がついたことなのだが…

「この制服って目立つよな」

「そうね…」

基本的に出かけるときは制服を着るのが俺達の学校の決まりなのだが、なんというかデザイナーが作りましたって感じの制服だから、地下鉄なんかに乗っているとかなり目立ってしまう。普通高校の人達が学ランなりブレザーなりを着ている中で白地に赤い線が入った制服は些か目立つ。

「次は、表参道（おもてさんどう）、表参道です。千代田線、半蔵門線はお乗り換えです」

そのアナウンスを聞いて、電車が表参道駅に到着すると、突拍子もなく俺は鈴の手を引っ張って

「降りよう」

と言った。

「ちょ、ちょっと亮悳！！」

ビックリした様子だったが鈴も着いてきてくれた。表参道くらい、デザインだとかファッションだとかにこだわってそうなところなら、降りても浮くことはないだろう。この俺の勘は間違っていなかったようで、実際に地下鉄の出口から外の井の頭通りに出てみると、人並みに上手く俺達の服装は溶け込んでいた。そういえば、デュノアと織斑とその他のご一行様はどうなんだろうか。少し電話してみることにしよう。

「鈴、お前はセシリアさん、ラウラさん、篠ノ之さんの誰かにかけてみろよ」

「な、なんでよ。たまには一夏に私も電話したい」

「でもなぁ、俺あの三人と接点が…まぁラウラさんぐらいならいいや」

そう思い、鈴は織斑に俺はラウラさんに電話をしてみることにした。

「もしもし…」

「登井か、どうしたんだ？」

「尾行の方はいかがですか？」

「あぁ、今のところ順調だ」

「そうですか、ところで今どの辺に？」

「待ってろ、おいオルコット…ここはどこだ？」

電話口でラウラさんはセシリアさんに尋ねる。

「原宿（はらじゅく）…だそうだ」

なんという偶然だった。まさか、織斑達が原宿にいるだなんて…ここ表参道からも歩いて行けなくもない距離だ。

「そうですか…わかりました」

「うむ。ところでそちらはどうなんだ？」

「そりゃあもう、仲良く…」

「そうか。気をつけてな」

「えぇ…」

そう言って俺は電話を切った。丁度それを同じ頃に鈴も織斑との電話を終えたようだ。

「鈴、聞いたか？」

「えぇ。原宿だってね」

そうなると俺達の考えることはお互いに同じだった。表参道から原宿まで散歩がてら歩くことにしたのだ。すると、鈴のやつ…

「ねぇ亮悳」

「ん？」

「シャルロット達みたいに行かない？」

「どういうことだ？」

「馬鹿…」

そう言うと鈴は俺の右手をぎゅっと掴んだ。なるほどなぁ…手をつなぎたかったって訳か。可愛いやつだよ、全く…。

３０分くらいは歩いたと思う。ゆっくり歩いていたからと言うのもあるかもしれないしね。竹下通りはいつも通り、人で一杯だった。しばらく歩いていると、そういえば織斑達は、バスに乗ったはずなのに…あぁそうだった。あいつ等、目黒の方に出る都バスに乗せたんだったな。だから俺達よりも先に着いたんだろう。まぁそんな事はどうでもいいとして、俺達はまず織斑達を探し始めた。その時だった、俺は今日のデーゲームのことをすっかり忘れていた。時間にして１１時１５分、初回から見るならそろそろ原宿から出ないとまずい。でも、こんな事鈴に言ったところではねのけられてしまうだろう。まぁ、今日のところは折れておくことにしよう。

「あ、亮悳。これ可愛いから買ってよ」

「あのなぁ…」

「拒否は出来ないでしょ?。わかってるよね?」

「やれやれ…幾らなんだよ」

「1個800円よ」

「ふ~ん。割に合わないなぁ…よし、それじゃあ俺はこのペンギンのやつを買おうっと」

「亮悳らしくないわね」

「何が?」

「こういうの興味ないと思ってたのに」

「ペンギンは好きだぞ?。あとイルカも…」

「あはははは。あ、亮悳がペンギンとイルカなんて…」

「悪かったな!!!。奢らないぞ?」

「あっ、冗談冗談。ごめんね」

「全くもう」

俺はレジにペンギンと鈴のほしがってた猫のストラップを持って行った。

「あのぅ…2つで1000円でお願い出来ません？」

”な！！。亮悳、値引きとは…やるわね”

「う～ん…ん？」

店員は悩んだ後、待っている鈴の姿を見てピンと来てくれたようだ。

「わかりました。それじゃあ2つで1000円で」

「どうも…」

値引きにも成功したし、鈴からは凄いねって言われたからまぁいいか。すると…

「あ、甕井じゃないか！！」

「よぅ、奇遇だな。織斑」

「鈴も甕井も…買い物？」

「そうよ。一夏達と同じ」

「ふ～ん。俺達はそろそろ昼行こうって話してたんだけど…」

「なるほどね。俺達もそうするか？」

「うん」

「よっしゃ、それじゃあ新宿にでも出るか？」

そう言って俺達は一路新宿に向かった。勿論この時も尾行は続けられていた。後から聞いた話だと、篠ノ之さんが取り乱して襲いかかろうとしたことが幾たびと無くあったんだそうだ。

というわけで、俺は今自分の部屋で今日買ったものをテーブルの上に置いてゆっくりとしているところだ。珍しく今日は鈴もやってこない。まぁセシリアさんと同室だから、色々話を聞いているんだろうな。鈴には悪いけど、今日は部屋の鍵を締めてのんびりと休むことにしよう。たまには一人で寝るのも悪くはないしね。

「さて次のニュースです。本日試合時間が早まったオリックス対日本ハム戦ですが、オリックスの李承？選手が三打席連続でホームランを放ち計7打点を挙げチームの勝利に貢献しました」

「な、な、なんだってぇぇぇえええええ」

俺はその日一番の大声を上げた…。

64話　Sister　part1

そんなこんなで、臨海学校まであと数日を残した水曜日の朝早く。俺はいつもの通り野球の練習に織斑と一緒に向かった。場所もいつも通りのグランドだった。その日はたまたま、織斑が俺の部屋で野球の話だとかをしている内に眠ってしまったのだ。だから織斑をいちいち起こしに行くという手間も省けた。

「ははは。韓国の野球も楽しいんだなぁ」

「いつか見に行かないか？」

「登井には鈴がいるのに、大丈夫なのか？」

「心配ご無用。鈴のことだから、‘一夏も来るの？’とかって感じにはしゃいで喜んでくれるさ…ん？」

「どうしたんだ登井？」

「いや、ほらあれ」

「あれ…？」

そう言って織斑は俺の目線の先を追った。すると、なにやら地面から奇妙な物体が2本ほど生(は)えている。そうだなぁ、例えるんだったらキノコ、いやタケノコか？。

「も、もしかして…」

そう織斑が呟いた瞬間に目の前に突然大きな音と共に白煙が立ち上(のぼ)った。一瞬俺はなんのことか分からなかった。この世界がこんなにも早く終わってしまうだなんて…とまではさすがに思わなかったが。
そして、瞬く間に空から人が落ちてきたと思ったら、華麗に着地。
朝一から何だか俺の目の前で凄いことが起こっているようだ。

「やっほ〜！。私が天才科学者の篠ノ之束(たばね)だよ〜」

華麗に着地した人はそう俺達に向かって言った。

「いっくん。おっきくなったねぇ」

織斑にそう言うこの女性。どうやらこの間授業で習った、科学者の篠ノ之束さんのようだ。ＩＳの開発を行ったんだそうで、少なからず技術や科学の世界では名の知れている人だそうだ。確かに中学の時も…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それでは次のニュースです。次世代型のＩＳ、「白式」が本日、東京の航空自衛隊基地においてはじめて一般に公開されました」

いつだったかは覚えていないがそんなニュースがあったわけで

「公開された会場には、このＩＳの設計者である科学者の篠ノ之束氏の他、世界大会にも出場されている織斑千冬氏の姿も見られました」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何てニュースがあったことを今思い出した。

「んで、君がいっくんのお友達の甕井亮悳君だよね？」

「は、はぁ…お、おはようございます」

あまりに突然のことで、ろれつが回らないというか、驚いて言葉が出てこない。

「束さん。朝一から元気ですね」

「そりゃあもう。久しぶりにちーちゃんとかにも会いに来たんだし」

「ちーちゃん？」

「あぁ甕井。千冬姉のことだよ」

「なるほどね」

俺達のジャージ姿を無視するかのように篠ノ之さんは

「というわけで、君たちもチーちゃんを捜すのを手伝って」

と言ってきた。

「い、いや。俺達これから野球の…」

俺が続けようとすると

「こんな朝早くからお前達、何してるんだ！」

と後ろから声が聞こえた。紛れもなく織斑先生の声だった。織斑先生もまた、ジャージ姿だった。確かにまだスーツに着替えるという時間ではない。あ、そうそう。気になっていたさっきの変なキノコのようなもの、これは篠ノ之さんが頭につけているカチューシャというか、触覚というか、パンタグラフというか、まぁそういったもので。布仏さんの着ぐるみ同様、自分の意志にあわせてどうやらピクピクと動かすことができるようだ。

「ちーちゃぁぁあああん!!」

そう言いながら抱きつこうとする、篠ノ之さんを織斑先生はこれまた華麗に躱した。

「いたたたたぁ」

「全く、お前も変わらんな」

落胆のため息を吐きながらそう織斑先生は言った。子の好きに俺は織斑のジャージを軽く掴んであうんの呼吸で逃げだそうとしたのだが…

「待て、お前達、三人纏めて私の部屋に来い!」

と言われてしまった。逃げるわけにも行かず、俺達は仕方がないから織斑先生の部屋に向かった…。

65話　Ｓｉｓｔｅｒ　ｐａｒｔ２（前書き）

中編になります。

65話　Ｓｉｓｔｅｒ　ｐａｒｔ２

呼び出しというか注意というか説教というか…なんと言えばいいのかはよく分からない。とりあえず俺、織斑、篠ノ之束さんは織斑先生の部屋に呼び出された。

「全くお前達と来たら、今度の週末は臨海学校だというのに」

「すいません」

「聳井に同じです」

「まぁ二人は朝練を使用としていたからとして…おい束」

「どぉしたのぉ？」

「突然ＩＳ学園に来るとは何事だ！！」

「あぁそうそう。今日は箒ちゃんに渡したいものがあって来たんだぁ」

箒さん…、あぁ。どうやらこの篠ノ之束さんと篠ノ之箒さんは姉妹のようだ。篠ノ之さんもこんな姉を持つとさぞかし大変なだろうなぁ…。

それから数分後、束さんだけを残して俺達は部屋を後にしていいことになった。とは言っても、もう朝食の時間だ、織斑先生が特別に今日に限ってジャージ姿で授業を受けていいと言ってくれた。選択するには勿体ないと言うことなのかな？。

「さてと…織斑、朝食行くか？」

「おぅ！」

織斑の声を聴くと、俺達は食堂へ急いだ。

「遅かったな…」

「あぁ…」

まるで帰省ラッシュ前の上野駅の特急券売り場のように長い列が出来ている。最近思ったんだけど、ここの食堂は味も、収容力も、価格も問題ないどころか寧ろいいのだが、朝は受付が1つしかないから…読者の皆様ならおわかりいただけるとは思いますが…客を捌ききられる訳がない。列が出来るのは必然というわけです…。だから俺と織斑はここに並んで、落胆しているというわけ。

「にしてもさぁ織斑。凄い列だよな」

「本当だよ」

とは言えども、男子が二人しかいないから前も後ろも並んでいるのは女子というわけだ。確かに、最近になって確実に俺の女嫌いは治ってきた、それどころかほぼ完治したと言っても過言ではないだろう。とは言っても、こんな世界で生活したことは今までに当然あるはずもない。自室で鈴と話したり一緒に寝たりするぐらいならすぐに適応することも出来るが…

「えぇ、それはないよ～」

「でしょ～?。それにほら物理ってさ～」

「ねぇ聞いた聞いた?」

「えっ、うそぉ!?。そうだったのぉ?」

といった具合に女性特有の声の高さと口調が前後から絶え間なく聞こえてくると言うのにはさすがに体が堪える。蕁麻疹(じんましん)の一つや二つは出来ていそう…。

「う～ん」

「聳井どうかしたのか?」

「いやさ、体がかゆくて…」

「何かにでも刺されたのか?」

「ま、まぁ…そんなところ…かな?」

撤回しよう、もう蕁麻疹というか体に湿疹が出来ているようだ。織斑は、霊の唐変木差を遺憾なく発揮しているようで、この生活にも慣れているからだろうが平然を保っている。よくそんな事が出来ると思うよ、本当に…。

そうこうするうちに、俺達の番がやってきたようだ。ようやく朝

ご飯にありつける。

「そういえばさ、今日は織斑先生来ないな」

「多分束さんと話でもしてるんじゃないか？」

「なるほどな…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ところ変わってこちらは織斑先生のお部屋。さすが姉弟というだけあった。織斑先生は話をしていたようだ。

「ところで束。一夏と甃井についてなんだが」

「う～ん、いっくんは相変わらずってところかな。甃井君は面白そうだよね」

「なるほど…面白そうか…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「へっくし！！」

「風邪か甃井？」

「いや…誰かの噂だろ…」

「誰かのねぇ…」

「そう、誰かの…ね」

俺達は食事を続けた…。

66話　Ｓｉｓｔｅｒ　ｐａｒｔ３（前書き）

最近連載が滞ってしまっていて誠に申し訳なく重い、反省しております。今後は連載の間隔を狭めていけますように努力いたしますのでよろしくお願いいたします。

66話　Ｓｉｓｔｅｒ　ｐａｒｔ3

なんでも篠ノ之博士がいらしてくださったのは…新しいＩＳをお披露目するからだそうだ。多分妹の篠ノ之さんにでもプレゼントするのかなぁ…

「じゃじゃ～ん！！。これが新型のＩＳ、紅椿（あかつばき）だよ～」

名前の通り、赤色だ…いや紅色だ。第４世代のＩＳで俺のやつの後継に当たるわけだが、性能はめちゃくちゃいいらしい。

「よぉっし！。箒、早速対戦してみようぜ！」

「な、何！？。一夏と…」

篠ノ之さんは顔を赤くしている。にもかかわらず織斑と言えば

「ん？。どうかしたのか？」

という質問。鈴も俺を突っついてそれは無いよねって具合でアイコンタクトを送ってくる。確かにその通りだ。

「鈴、折角だから模擬戦やらないか？」

「亮悳と私が？！」

空気を読んでないような俺の発言。でもこうすれば

「ボ、ボクも手伝うよ甕井」

「わ、私もですわ」

「わ、私もだ。嫁も甕井も一緒に飛ぶって言うのに、私が飛ばないわけにはいかない」

といった具合で結局全員で最終的には練習が出来るからこれはこれでいいんだと思うけど。

「ふぅ～。やっぱりスカイツリーは高いよなぁ～」

「亮恵。模擬戦に集中しなさい！」

「全く～、鈴はお小言が多いなぁ…うわっと！」

「覚悟しなさい…たっぷり練習させてあげるから」

「全くもう。あの二人は…」

「あっちはあっちで…」

「こっちはこっちもだ…ん？！」

「箒、どうだ？」

「快調快調だ。私にピッタリだ！」

逃げ回っている俺に対して篠ノ之さんと織斑はいい具合に練習している。何でも織斑の乗っているＩＳと姉妹型というか、一緒に飛ぶことを前提としているようだ。まるでＪＲ北海道の７３１系とキハ

２０１系の関係だ。言ってもわかってもらえないかもしれないかもしれないが、俺にはこう見える。

「こら〜！！。待ちなさ〜い！！」

「な、なぁ。一時休戦して、あいつ等見てみろよ」

「えっ…織斑と箒、凄いね…」

「だろ？。俺達と似てるよな？」

「共通点なんかある？」

「共に第三世代のＩＳだし、ほら俺達こういう関係だろ？。野球で言えば…」

「バッテリー？」

「そうそれそれ」

「全く、亮悳はいっつもそうなんだから…」

「ははは。さてと、それじゃあそろそろ練習再開だ」

「だって言いながら、逃げるな〜！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夕方になって俺はクタクタだった。今日が水曜日、明後日は臨海学校だから今日はこれぐらいにしておこう。

「って…どうして篠ノ之博士まで？」

「暇だからだよ～？」

「いやいやいや…一応博士なんですから忙しいんじゃ？」

「大丈夫～」

「そうですか…」

篠ノ之博士も臨海学校が終わるまでは俺達の学校にいるんだそうだ。やれやれ、学校でも寮でも気が抜けないなこりゃあ。無論、篠ノ之さんなんかはもっとそう思っているよう…いや、何かよそよそしささえ感じてしまう。一体どうしてなのだろうか、気になるなぁ…。

66話　Ｓｉｓｔｅｒ　ｐａｒｔ3（後書き）

ところで今後の方針なのですが。あと１０話前後で完結する見込みです。また年内には完結するようにしたいと思っております。それでは、今後ともよろしくお願いいたします。尚、ｓｉｓｔｅｒ回は次の回まで続きます。

67話　Sister　part4

夜も更けて、時間は深夜の12時半と言ったところだ。今日は鈴には俺の部屋には来るなって伝えておいた。多分これから俺がすることを見たりしてしまったら、きっと勘違いされて怒らせてしまうことになるからだ。さっきの篠ノ之さんの態度がどうしても俺には腑に落ちなかった。だからこの際だ、聞いてみることにしよう。

「すいませんね。こんな夜遅くに呼び出しちゃって…」

「甕井、一帯どうしたと言うんだ？」

「いえ、少し聞きたいことがありますから」

篠ノ之さんは眠そうな顔一つせず、俺の一言一言に真剣な面持ちで言葉を放つ。

「篠ノ之さん、博士とは仲が悪いんですか？」

「…」

「黙るって事は、そういうことなんですね？」

「甕井にもやっぱり分かるものなのだな。確かにその通りだ、あの人とはなるべく関わらないよにしている」

「どうして？」

「それは…」

それからしばらく篠ノ之さんの話を聞いてみた。すると、どうやら篠ノ之さん自身も相当な苦労をしてきたんだそうだ。彼女が小学校４年生の時、織斑と離ればなれになった。そう言うと誤解を招くかもしれないが、早い話が篠ノ之さんが転校したというわけだ。というのも、彼女のお姉さん…あの篠ノ之博士がＩＳを考案してしまったからである。こう言うと篠ノ之博士が悪者になってしまうかもしれない。ＩＳを開発したことにより日本国政府の重要人物保護プログラムとか言う訳の分からないものによって、全国各地を転々とさせられてしまったんだそうだ。まるで、移籍を繰り返す野球選手のように…。

ところで、プロ野球選手が一つのチームで一生を終えることが出来ると言うことがどれだけ幸せなことなのだろうか。王貞治にしろ長嶋茂雄にしろ…。野球選手でさえも、移籍というのは心身共にかなりの負担を強いられる。一番疲れるのはやはり人間関係だろう。団体種目の野球では常にチームプレーが求められる。これがもし水泳のような個人種目なら、また別なのかもしれないけどね…そんな、プロ選手でも相当な負担がかかってしまうようなことを篠ノ之さんは小学校４年生から幾たびと無くさせられてきた。それが彼女をどれだけ苦しめたか、俺には想像が出来ない。おまけにこの学校に入ったのも、姉がＩＳの開発者であるからという理由だったんだそうだ。

「意外ですね」

「えっ？」

「俺とそっくりですよ。国の命令で俺も、そして織斑もこの学校に入学させられたんですから、男性のＩＳ操縦者って名目でね…」

「…」

「分かりますよ。その所為で織斑とも離ればなれに…」

「くっ！」

「ん？」

「私は、私はどうしたらいいんだ？。中学の時もそうだった、全国大会で優勝しても…憂さ晴らしにしか感じない」

「…」

「お前は、その今まで女嫌いを続けてきていたのにどうして？」

「切っ掛けですかね？」

「切っ掛け？」

「最初は俺も自分と葛藤した。このまま女嫌いを貫きたい自分と、変わらなくちゃいけないのかなって思う自分とで対立した。だけど、布仏さんとか鈴とかに出会ったのが最終的には俺を変えたのかな？」

「…」

「何事も楽しんでみればいいんじゃないですかね？」

「楽しむ？」

「えぇ。折角の人生なんですからね…のんびりしてると、織斑取ら

れちゃいますよ？」

「なっ！！！」

篠ノ之さんの顔は一気に赤くなった。あちゃぁ…こりゃあ図星のようだな。まぁ、俺が言ったことが分かってくれたら嬉しいな。

「さてと、それじゃあまぁ今日はそんなところで…もう夜も遅いんで…」

「あぁ」

「それじゃあ…」

「あっ、甕井待ってくれ！」

その時、篠ノ之さんは俺を呼び止めた。

「はい？」

「ありがとう。お前のおかげで何かわかったかもしれない」

俺にそう言い返してきた篠ノ之さんの顔は、今までとは違った純粋な喜んでいる顔のような気がした。

翌日から、篠ノ之さんの態度も変わった。博士とも結構会話とかをしているようだぞ。一方で…

「鈴、悪かったって…許してくれよ」

「じゃあここで私を抱きしめてよ！」

「はい？」

「じゃなかったら殺す！！」

「またまた朝からそんな物騒な言葉を…」

「早く！！」

昨日のことがやっぱり感づかれてしまって俺は今あたふたしている。
俺を変えるきっかけを作ってくれたこの人は、どうも難しい…。

６８話　５～９

そんなこんなで迎えた臨海学校だ。海水浴場までは東海道線で向かった。何だか昭和を彷彿させるような臨海学校だった。これで１１３系が来てくれれば本当に昭和なのになぁ…

「はぁ～」

「亮悳、どうかしたの？」

「いやなんでも…」

鈴に無用な心配をかけるわけにも行かない。あ、そうそうこの間鈴を怒らせたときはさすがにあの場で抱きしめるのは無理だったから、その夜部屋で謝って、なんとか許して貰った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ごめんなさい、本当に申し訳ありませんでした」

「ホントにそう思ってんの？」

「はい、反省しております」

「そう、じゃあいいよ。許してあげる」

「本当か？！」

「但し、今日は私をずっとこれから抱きしめて寝ること」

「えっ？」

「さぁ早くしてよ！」

「お、おぅ…」

あぁ、一応言っておくけど、やましいことは一切してませんからね。

・・・

その後はいつも通りの生活に戻った訳だけだ。ところで少し考えていただきたい、僅かな期間の間にここまで俺は変貌を遂げることが出来た。ある意味これは'漢江の奇跡'なのかもしれない。ところで、漢江の奇跡を起こした立役者の朴正熙大統領にはこんな後話がある。独裁者と言うこともあった朴正熙は、そりゃあ命も狙われていたわけで、彼の部下であった金載圭(キムジェギュ)中央情報部長もその一人だった。中央情報部というのは旧ソ連で言うところのKGBに当たるもので、国民からは怖れられていた秘密警察のようなものだった。当時は、公募制での職員採用などあるはずもなくて、全て軍人からの選抜であった。とまぁ、こう言えばこの金載圭という人間がどれだけ凄いのかと言うことが分かっていただけると思う。

彼が、朴正熙を暗殺しようとしたのは長年の恨みがつもりに積もったとでも言えばいいのだろう。そもそも、この金載圭と朴正熙は旧友であった。にもかかわらず朴正熙は金載圭を学生運動の弾圧が手緩(ぬる)いとして、しばしば叱責していたようだ。それだけというわけではないが、この時から金載圭は殺意を抱いていたらしい。この同時期に、金載圭にはライバルがいて、遂には2人の命を奪ってしまうことになる。

１９７９年１０月２６日、朴正煕大統領をはじめ７人の命が中央情報部で金載圭と結託した仲間の馨６人の手によって奪われた。翌年には容疑者全員に死刑判決が下され、絞首刑に処せられた。これは韓国では「１０．２６事件」として今日まで語り継がれている。

何でこんな話をしたかというと、どうやらこの時既に変貌した俺と、俺を変貌させた鈴はとある人達に狙われていた。そんな事は俺達が知る由もなかった。

・・・

(どこだかわからない、学校の部室)

「やっぱり、彼女が中国の代表候補生…凰鈴音ね」

「えぇ。映像で見た限り、間違いはないわ」

「それじゃあ始めましょう。甃井と、そして凰鈴音を処分する計画をね…」

・・・

俺達はその後、列車とバスを乗り継いで静岡県の御前崎までやってきた。はじめて来た海水浴場だけど、いい海水浴場だ。それに美味しそうな魚が晩ご飯で出ることを考えると…う〜ん、これはいい。だけど…何だかおかしい。

「ん?。甃井、どうかしたのか？」

「亮悳、どうしたの？」

「い、いや。何でもないよ、鈴、ラウラさん」

「ははは。聳井にしては珍しいな」

「そうですわね。聳井さんが考え事なんて」

（…？。聳井は何を考えているんだ。何だかいやな予感がするな）

どうやら俺の何かが、俺と俺を取り巻くこの６人をとんでもない目に遭わせようとしていることを感じ取っていたようだった…。

69話　Last－Game　part1（前書き）

今後の方針についてなのですが、後数話ほどで終了する見込みに設定し直しました。読者の皆様のご理解のほど、どうかよろしくお願いいたします。

６９話　Ｌａｓｔ－Ｇａｍｅ　ｐａｒｔ１

予想が外れてくれれば良かったんだけれど…そういうわけにもいかなかった。今俺は一人織斑先生の部屋にとある置き手紙を持ちながらいる。

「く…私としたことが迂闊だった」

「そんなことないです。何となく犯人も分かっていますから」

「何だと？！。それは本当なのか？」

「えぇ…」

いやな予感はまさに的中した。最初に俺達に襲いかかったのは、これは不幸という名の幸運とでも言えばいいのだろうか…鈴が海の中で足をつって溺れてしまったことだ…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「随分沖まで来たなぁ」

「ばぁっ！！」

「うわっ！。鈴か…」

「ねぇねぇ亮悳。あのブイまで競争しよう！」

「お前さぁ、準備運動もろくにしてないのに…怪我するぞ？」

「うっさいわねぇ。とにかく行くわよ」

そう言いながら鈴は何のお構いもなしに、俺より先に出発した。ちなみにこの時織斑はのんびりと浅いところで布仏さん達とじゃれていたようだ。

”さてと、追いつかなくちゃ偉い目に遭いそうだな…”

俺が潜った瞬間に鈴の異変に俺は気がついた。一応、俺はゴーグルをつけていたからすぐに何が起こっているかも判断することが出来た。足をつって、溺れているようだ。急いで俺は鈴を助けに向かった。

”助けて…亮悳…”

意識を失いかけていた鈴をおぶって俺は急いで陸へ向かった。幸いなことに海水もあんまり飲んでおらず、陸に上がったらすぐ俺に抱きついてきて泣いた。よっぽど怖かったんだろうな、まさに‘海は魔物’だったんだな…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その後俺達に襲いかかったのは、夕食後のことだった。織斑のとなりにはセシリアさんとデュノアが鎮座して、二人が織斑を見守った。まぁ山葵（わさび）は二人とも苦手だったみたいだけどね…。その後のこと、専用機を持っている俺達は呼び出された。あ、そうそう。篠ノ之さんにも待望の専用機が与えられたようだ。紅椿（あかつばき）とか言うそうで、篠ノ之博士が直接プレゼントした、織斑の乗っている白式の兄弟機のようなやつだ。まぁ、いろいろといざこざはあったみたいだけどね

…。それで、この召集が今回の悲劇の序章だったといっていいだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「これだ。先のと同様、無人機のようだ」

「教官、これは」

「あぁ。国籍不明で、こちらからの指示も届いていないみたいだ」

「と言うことはおそらく…」

「無人機ですわね…」

「しっかし無機質なやつだなぁ。でもまぁこの間のと同レベルなんですよね？」

「甃井、今回のはどうやら機関砲の性能が圧倒的に向上しているそうだ」

「機関砲が？」

「気をつけないといけないわね」

「織斑、派手に行くか？」

「おぅ！」

俺達専用機持ちの一員は翌日の朝から、空に向かった。とは言って

も、相手が拘束で移動しているため、このスピードに耐えられる白式と紅椿…要は織斑と篠ノ之さんが今回の任務の主な役割を果たして、俺達は脇役というか、目的地までの援護をするのみにとどまった。

「じゃあな。二人とも気をつけて！」

「ありがとう、甃井」

「行ってくるぜ、みんな！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そう言って二人は元気に空の向こうへと去っていった。だが…帰ってきたときは大変なことになっていた。織斑は大怪我をしてしまって、意識不明の重体のようだ。何でも、航行禁止区域に密漁船が迷い込んだらしく、その補助をしている最中に織斑は被弾したそうだ。その後、何とか織斑は意識を取り戻した。幸い、体にも目立った損傷というか、とにかく骨折だとかはしていないようである。一方で篠ノ之さんの方が参ってしまっていた。

「一夏を…私は…」

「箒さん。しっかりなさいなさい！」

「で、でも…」

その時だった。みんなで慰めているときに、鈴が篠ノ之さんに平手打ちを喰らわした。どうやら、鈴曰く、専用機持ちはそんな風じゃいけない，だそうだ。確かにそうなのかもしれない、俺達は国を代

表するかもしれない人間同士なんだからな。とは言っても、篠ノ之さんの心の傷跡は大きかった。鈴が平手打ちを喰らわしてしまったのもいけなかったのかもしれないな。

「篠ノ之さん？」

「…」

「いつまでも黙ってても始まらないぞ？」

”――！！”

突然の俺の態度の豹変にそこにいる人達全員の目が驚きを表した。
俺は静かにこう続けた。

「いいか？。もしも織斑（あいつ）が逆の立場だったら、きっとあの無人機撃墜すると思うぞ。もし本当に申し訳ないと思うんだったら、それぐらいのこと出来るんじゃないのか？」

すると、篠ノ之さんも何か考えた後…

「そうだったな…私は…私は…。みんな、済まなかった。次こそ、あの無人機を墜とす！」

と力強くみんなに公言した。さてと、俺達もほっと一安心していた矢先に更なる悲劇が襲った。これは俺にとって、人生最大の悲劇と行っても今の時点なら過言ではないだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの…」

「な、何よ。アンタ達?。どうしてこんなところに?」

「あなたが凰鈴音さんですか?」

「えっ!?。そ、そうだけど…なに…」

「今よ!!」

「えっ、ちょっと。何する…の…Zzz…Zzz…Zzz」

「よし、車に運んで!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の彼女の、凰鈴音が何者かに誘拐されてしまったのだ。しかも、それと同時にあの無人機がまた行動を始めようとしていた…。

70話　Last－Game　part2

目が覚めた。どこかは分からないけど、何だか自分の体がおかしいことに気がついた。

「ここ…どこなのよ、それに…」

「気がついたようね。凰鈴音さん」

「ア、アンタは誰なのよ！！」

「そのうち分かるわ。そうね、あなたの大切な人が来たら分かると思うわよ」

そう、私は誰だか分からないこの女に拘束されている。そうだった、さっき何かを嗅がせられたと思ったらいつの間にか寝ちゃって…そしてこの場に今はいる…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

機能の無人機との闘いから一夜明けて、改めて状況が深刻な方に向かっていることを知らしめられた。まず無人機はどうやら現在のところ、日本海上空を周回しながら飛行している。このままでは日本はおろか隣国の韓国、台湾、中国にも影響を与えてしまう可能性がある。それに加えて…

「甕井、お前への手紙だ」

「はい…」

”あなたの大切な人、中国代表候補生の凰鈴音さんを私たちは拘束しました。もし、返していただきたいのであれば、どうぞ今夜９時までにここへ…”

とだけ書かれた手紙があった。同封されていた地図を見たところ場所は…東京貨物ターミナルの辺りのようだ。なんだかよくあるような展開だとは思ったけど、鈴が捉えられている以上、俺は鈴を救ってやらなくちゃならない。折角プレゼントも用意しておいたのに…今夜は星が綺麗だって、前々から気象庁で調べて今日こそはって思ったのに…この犯人にだいぶ予想がついているけど、勿論許すわけにはいかない。

「聳井には悪いが、無人機の方も刻一刻と状況は悪化している」

「わかってますよ。勿論俺も、行きますよ」

「いいのですか聳井さん?。約束の時間に…」

「約束の時間に間に合わせますから」

「聳井、気をつけて行ってこいよ。お前が帰ってこなかったらそれこそ鈴が」

「わかってるよ織斑。今日はお前もゆっくり休んでおけ」

「ボク達が聳井をサポートして、何とか間に合うようにしよう」

「そうだな。一応だがクラリッサ達に鈴のＩＳの位置情報を常に監視しておくように頼んでおいた」

篠ノ之さん、セシリアさん、デュノア、ラウラさん、織斑とみんな俺に協力してくれている。その協力に俺も全力で応えなくてはいけない。

「ありがとうみなさん。今夜は9時に予定が入ってますので、急ぎましょうか！」

「「「「了解！」」」」

俺のかけ声に従って、今日の戦闘を共にする4人はそう答えた。

今日の日本海は発達した低気圧があり、ユーラシア大陸よりに行けば行くほど天気は悪くなっている。幾ら高性能のＩＳでも、天気がこうも悪ければ性能は落ちてしまう。

「見えたぞ、あそこだ！」

ラウラさんが真っ先にそう言った。確かに前方の方には、例のＩＳがのんびりとこちらを伺いながら不気味に空の上で空中待機（ホバリング）していた。

「時間は？」

「１２時２６分ですわ！」

約束の午後9時まで後8時間と３４分。時間に余裕があるとは言えない。

天気も徐々におかしくなっていった。風が強くなって、もうすぐ

雨が降りそうという天気になりつつあった。

「くそ、速いな」

俺はそう呟いた。確かにこれなら、織斑と篠ノ之さんでも苦戦したのはおかしくないだろう。

「イタッ！」

初っぱなから俺は被弾してしまった。相手は小癪にも、俺を集中的に狙ってくる。一つ一つ確実に仕留めていく戦法なのだろうか。

「大丈夫ですか…？。キャッ！」

「危ないから、各自で！」

心配してきてくれたセシリアさんには悪いけど、このままじゃあセシリアさんも攻撃されてしまう。

「ぁの野郎…絶対に許さない…」

俺は無人機を睨みつけた。鈴のためにもさっさと決着をつけなくてはならない…。

さすがに、攻撃を続けていくと1対5という人数の差に無人機も少なからず消耗していった。もう少しで片付きそうだ。

”エネルギーがギリギリだな”

そんな事を、傍らに思っていたせいで再び俺は攻撃されてしまった。

「まずいな。次やられたらお終いだ」

「…っ！。みんな、ちょっと！」

その俺の発言をきいた、デュノアが一旦全員を無人機から遠ざけたところに連れて行った。

「どうしたんだよ？」

「聳井、とぼけても無駄だよ？」

「何のことだよ？」

「ボクきいたよ。聳井、次で…」

そうデュノアが言った途端に、他の人達も何をデュノアが言いたいのか想像がついたようだ。

「だからなんだって言うんだよ。はやくアイツを倒さない…」

そう言った途端にデュノアは俺を殴った。殴ったって言うよりかは、平手打ちって行った方がいいかもしれない。

「何するんだよいきなり」

「鈴の気持ちを代弁しただけだよ」

「鈴？」

「確かにあいつを倒すことも大事だけど。登井がやられちゃったら元も子もないよ」

「デュノア…」

そうすると俺も静かになってしまった。確かに俺は何か見失っていたのかもしれない。鈴を助けるためにって必死になって戦ったんだけど…。

「登井さん」

「なんだい？」

すると、その沈黙を破るかの如くセシリアさんが今度は俺に向かって話しかけてきた。

「ここは私たちにお任せ下さい。そろそろお行きになられて下さい」

「はっ？」

「ですから、早く鈴さんのところへ」

「いいの…か？」

「勿論ですわ。登井さんの大事な任務ではありませんか」

他の人達も頷いていた。

「登井」

今度は篠ノ之さんとラウラさんが俺に向かって話しかけてきた。

「昨日は世話になった。感謝している」

「…」

「今度は私たちがお前を助ける番だ」

「ほぅ…」

「私もだ。聳井、ＧＰＳでのデータをお前に送信しておく。急いで鈴の元に向かってやれ…」

俺も結論を迫られた。こうなったら、最後の勝負に駆けるしかない。

「わかりました…それではお先に…失礼します！」

そう言い残すと俺は日本海上空から急いで東京の貨物ターミナルまで急いだ…。

71話　Last－Game　part3

彼女たちの協力もあって東京貨物ターミナルには夜の7時過ぎに到着することが出来た。ISは目立つから、特に降下するときには注意した。急いで辺りを見回してみるとなにやら文字が書かれたコンテナがあった。このコンテナ、貨物列車に搭載されているものだ。9時までに来ないといけないというのは、運ばれてしまうからと言うことだったのだろうか。

”間に合ったようですね。それでは脇にある倉庫にこの紙をもってお入り下さい”

と印刷用紙のようなものに今度は書かれていた。裏面をめくってみるとおれの尊敬している李承?選手の写真の脇に

”活躍出来ないなら帰れ”

とマジックで書かれてあった。いくら何でも俺は許せなかった。

「あいつ等…」

俺は急いで脇にある倉庫へと向かった。

中に入ってみると、お決まりのように真ん中の椅子に鈴が縛って座らされていた。ここで普通なら

「鈴!!」

とかって、大声で呼ぶところだけど、俺は敢えて静かにその場に近

づいてみることにした。

後数メートルというところで鈴は目を覚ました。どうやら何かで寝かされていたようだ。

「あ、亮悳！」

すると脇から

「随分と早かったのね」

と女の声がした。

「こんばんは…の一言もないのか？」

「当たり前でしょ？」

すると脇からも続々と女性の姿が見え始めた。

「やっぱりお前さん方だったのか…」

そう、こいつらは中学の俺の元クラスメートだった。そして、目の前にたっているやつは俺に合唱コンクールの練習の時に俺に平手打ちをお見舞いしてくれたやつだった。

「主犯はお前か？」

「そうよ。こうすれば、甕井もちゃんと来てくれると思ったからね」

「まぁな。鈴は大切な人だし」

すると、前にいるそいつはくすとほくそ笑んだ。

「アンタにも大切な人が出来たんだ。びっくりよ」

いちいち発言にイライラしてくる。とりあえず俺は、話を進めた。

「要件はなんだ?。お前等もそれなりに常識はあるんだろうから、何の考えも無しにここに鈴を誘拐してまで俺を呼び出すことはないだろう」

「要件?…笑わせないでよ。今すぐ立場を替わって」

「なんだと?」

「アンタがＩＳ学園を退学して、私と替わってくれたら彼女も帰してあげるわ」

言ってる意味がよく分からないけど、とりあえず俺に今通ってる学校を退学して欲しいそうだ。

「私は、アンタさえいなければＩＳ学園に入れた…なのに、アンタがＩＳを起動させたりするから、私は入れなかった」

「ははは」

俺はおかしくて高らかに笑った。

「そんなの俺の知ったことじゃない」

すると、前にいるそいつは突然にやけた。

「と言うことは交渉は？」

「交渉？…まぁ、決裂だな」

「そう、なら実力を見せるまで！」

そう言うと彼女は突然俺を蹴り飛ばした。確かに彼女は俺に過去に平手打ちを喰らわせてくれただけのことはあって、あり得ない話ではない。でも…これは痛い、しかも靴に細工がしてあるようだ。まぁ工場で使うような安全靴みたいに、鉄板のようなものをつけているのだろう。

「みんなも出てきて！」

後ろの方からは女子がわんさか出てきた。見たところ、全員俺も顔は覚えている。

「あのねぇ、アンタのこと嫌いだった女子って、こんなにいるのよ」

「へぇ…イタタ、つまりは俺を消すってことは…この世界から消すと？」

「察しのいいことで」

「あ、亮悳！！。ダメ、逃げて！」

その時だった。鈴は俺に向かってそう叫んだ。勿論、そんなのに俺が従うわけがない。大体、そんなことして逃げ出すんだったら、鈴

のことなんか端から助けに行かなかっただろう。だけど、今は彼女を助けなくてはならない。彼女が幾らなんと言おうと、俺にはその使命を全うする義務がある。

「は、早く！！」

「うるせぇ！！」

「ひっ…」

「観客は観客席で黙って見てろってんだ！」

「え…」

「待ってろ」

「おしゃべりが多いわよ！」

その時だった、俺と鈴のぎこちない会話を遮って突然また蹴られそうになった。

「学習能力はあるのね」

「お前さんほどじゃないけどね…」

最後の闘いはこの時、幕を開けた…。

72話　Last－Game　part4（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。Last－Game最終章です。

72話　Last－Game　part4

以外と女だからって安易に思ってたが…こいつ等予想外に強い。

「腰いてぇ…」

ある意味で鈴の予想通りになってしまい、俺は結構痛い目に遭わされている。

「強気だったのにね」

「そうね。聳井も所詮こんなもんなのね」

ばつが悪すぎる。大体、相手はたかだか数人とは言えどもみんな格闘選手並みに鍛えているから並大抵の力じゃなかなか太刀打ち出来ないし、しかも男性の持っている本能なのかは知らないけど、女性を殴ろうとするとどうしても躊躇ってしまう。もしかしたら、相手もこれを予想していたのかもしれないな。見たところ、この場には俺以外に男性は以内。

「それじゃあ、そろそろとどめね」

「あ、亮悳!!」

そう言って、例の女がバットを手に取った。まるで、殺人事件のドラマにありそうな展開そのものだ。

「俺を殺して…その後に鈴か？」

「そぅ。よくわかってるじゃない」

「野球の道具をそう使うなんてますます許せないな…お前等みたいなのがいるから…」

「良くその口が言えたものね…聳井亮悳、覚悟!!」

女は、容赦なく俺に向かってバットをフルスイングした。危うく当たりそうだった。バットは地面に落ちると、コンクリートに当たったからか火花を散らした。

「危ねぇなぁ…まさか本気でやるとはな…お前等何にも分かってないんだな」

「何がよ!!」

「刑法２０３条、殺人未遂罪。歴とした犯罪だぞ?」

「く…くく…」

俺の質問に対して女は次の瞬間

「あはははははは!!」

とその場に響き渡るほどの大音量で笑った。

「冗談言わないでちょうだい!。死人に口なしって昔から言ったものでしょ?」

「お、お前…」

俺と鈴は偶然目をあわせた。

「私はねぇ…アンタがウザくて大嫌いなの。アンタなんかに生きていて欲しくはないのよ」

「…」

俺はじっと、相手の動きを見ていた。周期的に一瞬だけ女はバットの持ち手を握り替える癖がある。その癖を俺は盗むことが出来て、運が良かったと思った。

「チョンにしろアンタにしろ…大嫌い。アンタなんかいなければ、私は今頃幸せだったのに」

「IS学園に入るのが全てだったのか？」

「そうよ！！。何もかも壊してくれたのよ、アンタがみんな！」

「…ほぅ」

すると、再び女はバットを強く握りしめた。

「これで最後よ。色々遊んであげたけど、もうそれもお終い」

女がそう言った瞬間に俺はとある歌を歌い始めた。

「オドゥンパダッカ、ホルロナヌンセヤ～」

「な、なんなのよ！」

「あ、こっちか」

「何がこっちなのよ」

「暗く泣いてる海を飛んでいく～。名前もない俺は海鳥なぁんだ～」

パダセ（海鳥）と言うタイトルのこの歌は１９８６年に韓国で流行った歌で、韓国の野球選手の応援歌として使われていたから俺はこの歌を知っていた。自分なりにアレンジした替え歌として日本語の歌詞もつくって中学の時は良く歌ったものだ。

「く…いつまでも変な歌、歌ってんじゃねぇ！」

俺は最後の力を振り絞ってバット絡みをそらした。そして…

「な！！」

「この大馬鹿野郎！！」

俺はその女の頬に特大の一発を効かせてやった。それと同時に、倉庫のドアががらっと開けられる音がした。

「な、どうしてこの場所が？」

「貴様等がやつの大切な生徒を誘拐した奴らか」

「だ、誰なのよ」

「ＩＳ学園教官、織斑千冬だ！」

倉庫を開けて織斑先生が静かに入ってきた。丁度俺が殴った瞬間も見られてしまっていたようだ。

「甕井、いくら何でも他校の生徒に暴力をふるったことは否めない。処分は覚悟しておけ」

「分かりましたよ…お手柔らかにできませんか？」

「馬鹿者！」

「はぁ…まぁいいでしょう。俺もこいつ等殴ってスッキリしましたし」

「凰！」

「は、はい！！」

「怪我はないか？」

「は、はい！。問題ないです」

「そうか…甕井と凰はこれから先に戻れ。後は私がけりをつける」

「お、織斑先生。無茶苦茶なこと言わないでください」

織斑先生の口から、そんな言葉が聞けるとは思いもしなかったので、驚いた俺はそう言い返した。すると先生は耳元で

「早く行け…心配するな」

と囁いた。

「わ、わかりました。起動！！」

そう言うと俺は急いでＩＳを起動させた。

「ちょ、ちょっと。逃げないでよ！」

「お前等の相手は私だ…」

「鈴、行くぞ乗れや！」

「う、うん…」

鈴は誘拐されたとき、たまたまＩＳを身につけていなかった。だから、載せていかないといけないというわけだ…。

「それじゃあお先に…」

そう言って俺達は東京貨物ターミナルを後にした。鈴が生身なのもあるからあんまり速度を出すことは出来ない。ゆっくりゆっくりと…御前崎まで戻ることにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「は、速いわよ！！」

「ん～？。時速３５０キロぐらいだぞ？」

「十分すぎるわよ！」

「まぁまぁ。もう少し我慢してくれ…ところで今何時だ？」

「え？…多分９時過ぎだと思うけど…」

「分かった。１０時までに戻るぞ。しっかり掴まってろよ！」

「ちょ、ちょっとぉぉぉおおお！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鈴の意外な姿が見ることが出来た気がした。あんなに怖がってる姿を見せた鈴を見るのは、はじめてのことだった…。

72話　Last－Game　part4（後書き）

もう少しだけ続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1036u/

IS…Plays as a bridge

2011年12月11日18時23分発行